

日本タンゴ・アカデミー機関誌

TANGUEANDO EN JAPON

No. 38
2016

タンゲアンド・エン・ハポン

ÓRGANO OFICIAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 38, julio de 2016

日本タンゴ・アカデミー 機関誌

タンゲアンド・エン・ハポン 第38号 (2016年7月)



日本タンゴ・アカデミー
(<http://tangoacademy.jp/>)

TANGUEANDO EN JAPÓN

第38号 (2016年7月)

(タンゲアンド・エン・ハポン)

目次

	頁
巻頭言 (第三期タンゴ黄金時代と「ラ・クンパルシータ全集」)……………飯塚久夫	3
NTAのホームページがリニューアル……………山本幸洋	5
アルゼンチン・タンゴ愛好家の多様性がNTAの運営に与える影響……………齋藤富士郎	7
NTA 2016年上期活動実績……………編集部	15
第93回タンゴ・セミナー・レポート……………宮本政樹	17
全国会員の集いレポート (含第94回タンゴ・セミナー・レポート)……………笠井正史	19
第95回タンゴ・セミナー・レポート……………池永博威	23
第86回東京リンコン・レポート……………福川靖彦・笠井正史	26
第87回東京リンコン・レポート……………福川靖彦・笠井正史	27
第88回東京リンコン・レポート……………福川靖彦・笠井正史	28
第27回関西リンコン・レポート……………鈴木忠昌	30
春の芸術祭2016 オルケスタYOKOHAMA……………宮本政樹	34
神戸の夜を彩った「深夜のタンゴ喫茶店」……………山本雅生	37
数に纏わるタンゴ雑感 (前篇)……………小林謙一	42
大貫孝三氏の死を悼む……………泉谷隆男	51
ルイス・スターソを悼む……………山本幸洋	53
エルネスト・バッファ追悼……………西村秀人	55
マリアーノ・モーレス追悼……………吉村俊司	57
<愛好家インタビュー> ー高橋トク子さんー……………聞き手・宮本政樹	59
全国リレー随想 (18) バンドネオン vs アコーデオン……………大河内祐	65
現代タンゴ群像 (1955～1990) 第9回 エル・センチナリオ四重奏団……………西村秀人	70
<アーティストの足跡 (4)> フランシスコ・ロムート……………訳・弓田綾子	75
魅せられてるままに／ラ・クンパルシータ……………島崎長次郎	82
CD「ラ・クンパルシータ全集」全曲リスト……………大澤 寛	84
2016年上期首都圏タンゴ・コンサート情報……………脇田富水彦	87
編集後記……………編集部	92

“第三期タンゴ黄金時代” と 「ラ・クンパルシータ全集」

会長 飯塚久夫

■提唱 “第三期タンゴ黄金時代” ？

先般発行された「Tangolandia」誌に“第三期タンゴ黄金時代”の提唱をしたところ、吹田市の吉澤義郎氏などからそんな言葉は聞いたことないが、誰が言っているのか？ 何時ごろからのことなのか？ 等のご質問を頂きました。そこで本号ではまずこの点について述べさせていただきます。

そもそも“タンゴ黄金時代 Époque de oro”ということはアルゼンチンでも共通認識になっています。しかし、アルゼンチンではもっぱら1940年代から55年までの間を言っていると思います。これはとりもなおさず第二次世界大戦でアルゼンチンが経済的に繁栄し、また民衆の音楽タンゴを支持したペロン将軍の第一期大統領就任期（1946～1955）とも重なります。1929年の「世界恐慌」の影響がアルゼンチンにもおよび、一旦落ち込んだタンゴは、1930年代半ばからのファン・ダリエンスを筆頭とする再振興の動きの結果、演奏・唄・踊りいずれも40年頃から大きく飛躍することになります。それがクーデターでペロンが職を追われる55年まで続きました。これはあのフランチェニ＝ポンティエル楽団の解散時期とも重なります。この時期を日本では下記との関係で“第二期黄金時代”と言っているのでしょう。

そして“第一期黄金時代”という言葉がありますが、これは主として日本で言われるようになったのではないかと思います。NTA会員の多くの方が好きな1920年代後半を指しています。あの“オデオン5大楽団”やフリオ・デ・カロ、オルケスタ・ティピカ・ビクトルなどが最も素晴らしい録音を残した時期です。1970年代にビクター・レコードから「黄金時代シリーズ」と称するLPが出され、これが日本では20年代を中心にした名盤を続々と発売してくれた盤の嚆矢ではないでしょうか？ 私などはこのシリーズのおかげで、それまで喉から手が出るほど欲しかった（聞きたかった）演奏を堪能できるようになりました。あの頃は、アルゼンチンSP盤は日本でもごく限られた人しか入手していなかったと思います。

さて“第三期黄金時代”ですが、これは私が昨今（特に2010年頃からは）の世界のタンゴ情勢を見て、勝手に言い出している言葉です。いずれタンゴ史を振り返ってそう言う人が出てくるだろうという考えと、そう言うことによってタンゴに再び関心をもってくれる人が少しでも増えればというキャッチ・コピー的思惑です。上記のことでは言い尽くせませんが、第一期、第二期がタンゴ隆盛の時期であったことは間違いありません。そして、その言葉がキャッチ・フレーズとなって戦後のタンゴ・ブームを一層牽引したこともあったでしょう。

事実、現在、世界は歴史上初めてアルゼンチン・タンゴが席卷しています。といっても、その大宗はダンスですが…。戦前からタンゴ・ダンスが世界中（特にヨーロッパ）で流行ることはありましたが、そのスタイルはアルゼンチン・オリジナルとは異なるものでした。特にイギリスでボール・ルーム・ダンスが集大成された後の所謂社交ダンスの一ジャンルとしてのタンゴ・ダンスはアルゼンチン流とは踊り方も音楽も全く異なる方向を辿りました。それに対して今日世界で流行っているのは、真正正銘のアルゼンチン・スタイルです。タンゴ・ダンスが上手になるには、タンゴ音楽をしっかり聴き込まないと…

という認識が広まりつつあるのも世界的傾向です（いや、日本以上に海外はそれが強い）。大岩祥浩氏（NTA初代会長）や馬場明人氏といった1万枚以上のSP盤を蒐集されている方が復刻してくれた沢山のCDも、東京の中古レコード店で長らく眠っていましたが、最近は殆ど無くなっています。しかもそれは海外を含むダンス・ファン（主にディスクジョッキーDJをやる人）が買っているのです。

こうした世界的なタンゴ・ブームの発端は、1983年パリで成功した（日本公演は1987年）「タンゴ・アルヘンティーノ」ショーにあります。それ以上に影響を与えたのは1990年にサンディエゴで発表、1994年サンフランシスコでロングラン、97年ブロードウェイで人気を博した「フォーエバー・タンゴ」（最初の日本公演は1999年）です。音楽的には、アストル・ピアソラ没後5年（1997年）の頃、日本ではヨーヨー・マがTVコマーシャルで「リベルタンゴ」をやり、ヨーロッパでは有名なバイオリニストのギドン・クレーメルが「オブリビオン」などを録音したインパクトが大きかったでしょう。そして決定打が2002年、ブエノスアイレス市長が始めた「タンゴ・ダンス世界選手権大会」です。その後も盛況を続け今年が15回目、1年遅れで始まったアジア大会も最近日本人のみでなくアジア各国からの出場者も増え活気を呈しています。昨年末そのブエノスアイレス市長をやっていたマウリシオ・マクリ氏が大統領になったことで（彼自身はロック・ファンでタンゴ・ファンではないが）今、アルゼンチンは大きく変わろうとしています。こうしたタンゴの再隆盛は継続間違いのないところでしょう。

以上のようなことをもって“第三期タンゴ黄金時代”を提唱している次第です。そして今年はその“黄金時代”に相応しい重要なイベントが日本で当アカデミーも協力して行なわれることになったのです。それはかつてない「ラ・クンパルシータ全集」の発行です。

■推薦「ラ・クンパルシータ全集」！

当アカデミーの名誉会長島崎長次郎氏渾身の傑作全集が出されます。「ラ・クンパルシータ」全50曲CD2枚組、しかし単なる全集ではありません。島崎氏の秘蔵コレクションからアルゼンチン盤（30曲）はいうまでもなく、日（10曲）、米（5曲）、仏（2曲）、英（1曲）、伊（1曲）、独（1曲）の名盤を含む50曲です。録音年はこの曲の初録音の1916年に始まり、1965年までの50年間に及びますが、その多くは1920～50年代の名演奏の集大成です。

「ラ・クンパルシータ全集」はこれまでも何回か出されてきましたが、これほどの充実した内容のものは世界的にも初めてです。既にこの曲の多くの録音を持っているとお思いの方でも、実は持っていなかったりする希少な録音がこの全集には含まれています（別記参照）。日本盤とかいうとあまり関心を持たない方もいるかもしれませんが、実は日本盤でも極めて貴重な名演・名唱の録音が含まれています。それに加えて今回は、これまた貴重な島崎長次郎氏の書き下ろしになる解説書が付属しています。30ページに上るもので、これだけ（という失礼か？）でも購入する価値があるほど過去に例のない「ラ・クンパルシータ」解説書です。

限定部数の発行となりますので、8月末の発売の暁にはご購入を強くお勧め致します。NTAは全面的にその頒布を応援します（申込みは事務局弓田綾子氏 080-1080-9179 までお早めに！）。というのは、島崎氏並びに制作を担当しているオーディオパークのご好意により、この頒布代の一部をNTAに寄付を頂くことになっているのです。財政難のNTAにとっては“救いの神”です。従ってNTA会員のみなならず、非会員の方にも大いにお勧め下さい。おそらく今後これだけの全集は二度と発行されることはないと思います。

まさしく島崎長次郎氏の“世界的快挙”に拍手を送ると共に、NTAを挙げて応援したいと存じます。

日本タンゴ・アカデミーの ホームページがリニューアル

山本 幸洋

2011年、日本タンゴ・アカデミーのホームページがオープンした。原則として、会員になるとIDが与えられ記事を読んだり投稿することができたが、当時のホームページ担当者の退会による初期データの散逸などが重なり、ここ2年ほどは十分なメンテナンスができないままであった。まずは、この場をお借りして会員各位にお詫びします。

このたび、飯塚久夫会長の提唱により、当アカデミーの活動の本義としてのタンゴの普及活動に重点を置いて行く方針に則したりリニューアルを行うこととなった。本稿では、その具体的な施策についてご報告をしていきたい。

全国津々浦々から会員を募っている当アカデミーの主な行事として、年間5～6回開催しているセミナーや全国各地域でのリンコン、年に1回のミロンガや全国会員の集いなどがあるが、同等かそれ以上に心血を注いでいるのが『タンゲアンド』『タンゴランディア』両機関誌である。特に、1998年のアカデミー発足以来、資料性が高く、示唆に富んだ記事（筆者には故人も多数）の宝庫である『タンゲアンド』はアカデミーの財産となっている。原則として会員への配布を前提とした会報誌であるが、20年になんなんとする今、永久的な保存を目的として発行後年数を経たものを電子ファイル化し、ウェブ・サイトを通じて自由にダウン・ロード（コピーすること。以下、DL）するサービスを開始することとなった。こういったアーカイブは資料の散逸を防ぐだけではなく後世に残して、新しくファンになってくれる層にも活用して貰えることが期待できる。また、会員有志によるこれまでの機関誌に掲載されたものの他にも貴重な資料の提供が検討されている。例えば、曲名と演奏者と作家と盤（！）が整理されたMSエクセル（マリアーノ・モーレスをテーマとしたセミナーにおいて、レコーディングされたモーレス名曲群の人気度ランキングでも大活躍）や、うれしい歌詞対訳集（アタマを悩ませるルンファルドにもばっちり対応）などだ。市井のタンゴ愛好家～研究家の情熱と人生を賭けた（大げさか？ いや、その価値はおおいにある！）労作を共有できるのだ。

ここで会員各位にご了承いただきたいのは、これらサービスはアカデミー会員に向けたものであると同時に、当アカデミーが本来の目的であるタンゴの普及を狙って会員以外の一般にも発信するサービスでもあるという点だ。タンゴを聴きどのように感じ取るかといった解釈は、本来ならばヒトとヒトが顔を突き合わせて愛好会のような場で深め合っていくものだと考えるが、そのためのとっかかりとしてインターネット検索の便利さを活用しない手はないと、アカデミー役員が喧々囂々の議論の末に辿り着いた結論である。

飯塚会長の説く、当アカデミーの活動の主たる目的としてのタンゴの普及活動、その具体案のひとつとしての提案である。どうか、ご了解をお願いいたします。

そして、もうひとつ大きな変更点がある。インターネット活用としての利点はDLだけではなく、インターネット掲示板（以下、BBS）を開設し、相互の意見や考えを広く公開することによる“よろずタンゴ談義の場”の提供だ。タンゴを聴き始めて関心の高いときに、ちょっと訊いてみたくなる

ことってた〜くさんあったと思う。それを誰でも自由に投稿（ポスト）し、それに対して誰でも自由に返信できる場としてのBBSだ。それに、タンゴのライヴに行った感想や、その日にタンゴ場に出演するミュージシャンは誰なのかといった情報も楽しいし有益だろう。新しい交友関係を築くことができる大きなチャンスだ。

これらを実現するためのウェブの設計が進行中だ。設計と言っても、何種類もあるテンプレート（ひな型）からひとつ選んで、インターネット掲示板機能（BBS）と資料DL機能（資料BBS）の構成を練り、アカデミーのホームページへのモディファイを行っているところだ。BBSでは、ニュースなどの一般投稿はもちろん、先に記したよろず相談事や“譲ります”情報などをスレッド*（“2ちゃんねる”をイメージしていただきたい。https://jp.wikipedia.org/wiki/2ちゃんねる）として整理していく計画だ。資料BBSは、提供するコンテンツの検討を進めている。ここにはぜひ、リクエストをお寄せいただきたい。みんなでシェアして有効に使っていただけるもの、権利がクリアにできるものという条件があるが、契約しているサーバーがいっぱいになるまでアカデミーとして精査された資料を提供していきたい。

最後に、運用についてお知らせしておく。

基本的にはオープン・サイトなので、BBSを読んだり、資料DLは会員・非会員を問わず誰でも可能だ。BBSへの投稿にはアカデミーの会員・非会員に関わらず登録が必要で、名前とメール・アドレスとハンドル名（表示名）だけいただくこととしたい。“炎上”してしまったときに備えてのことだ。“譲ります”情報などは、その投稿を元に個人間の責任でメールや電話、ファクスなどで交渉し、個人情報が公開されないよう自己管理をお願いしたい。資料BBSへのアップロード（投稿）は、原則として管理者権限を持つアカデミー会員が責任を持って行う。そのための管理運用のルール作りをして行く。

ホームページのリニューアル・オープンは今夏の予定だが、詳細が固まるまで少し時間がかかりそうなので、URLの公表ももう少しお待ちいただきたい。オープンの暁にはじゃんじゃん使っていただき、その感想をお寄せいただくことで、改善できる機会に反映を検討していきたい。タンゴを広めていきましょう！

※スレッド＝話題ごとに記事を書き込む、読む、対応・コメントする。そうした返信・応答が積み重なって行くこと、およびその見出し。



トップ・ページの見本（開発中につき、変更箇所は多数を予定しています）

アルゼンチン・タンゴ愛好家の 多様性がNTAの運営に与える影響

齋藤 富士郎(東京都町田市)

まえがき

NTAは数多あるアルゼンチン・タンゴ同好会とは異なり日本全国のアルゼンチン・タンゴ愛好家に呼びかけて成立した組織である。従ってその運営には地域的多様性や愛好家の多様性など多くの種類の多様性が影響を及ぼしており、それ故に一般の同好会とは異なった運営の仕方が必要となり、そのことが運営の難しさを生んでもいる。ここではそれらの要因の中で特にアルゼンチン・タンゴ愛好家の多様性がNTAの運営に与える影響を考察してみた。

アルゼンチン・タンゴ愛好家のタイプ

世にアルゼンチン・タンゴ愛好家を自称・他称する人々は多数存在するが、それらの人々のアルゼンチン・タンゴ愛好の仕方は多様である。アルゼンチン・タンゴ愛好家のタイプをその愛好の仕方に従って分類を試みた結果が表1である。以下、それらの項目の各々について考察してみよう。

A. プレイバック派	A1. レコード・CD派	A11. レコード・CD聴くだけ派
		A12. コレクション学派
		A13. インターネット配信派
	A2. VT・DVD派	A21. 既製VT・DVD見るだけ派
		A22. 録画派
	A3. ラジオ派	A31. ラジオ聴くだけ派
A32. エアチェック派		
B. ライブ・生放送派	B1. ライブ派	B11. ライブ何でも派
	B2. ラジオ・テレビ生放送派	B12. 追っかけ派
C. ダンス派		
D. 演奏家・歌手		

表1 アルゼンチン・タンゴ愛好家のタイプ

《A. プレイバック派》

統計を取ったわけではないので厳密なことは言えないが、全国のアルゼンチン・タンゴ同好会のメンバーの殆どはプレイバック派かダンス派のいずれかであろう。

プレイバック派とは何らかの記録媒体に記録されたタンゴを通してタンゴを愛好する人々を指し、更に細分すれば表1のA11からA32までに分類できる。

<A11. レコード・CD聴くだけ派>

これはその名の通りレコード（LP、SP）やCDによってタンゴを聴くだけの人々で、アルゼンチン・タンゴ愛好家の大部分はこのカテゴリーに属すると考えられる。このような音楽の愛好の仕方は生演奏に接する機会が制限されていた（されている）日本独特のもので、タンゴに限らずクラシック音楽についても言えることではないかと思う。筆者自身も根本ではこのタイプである。

レコード・CD聴くだけ派を特徴付けるもう一つの事柄は日本独特のレコード・コンサートである。レコード（CDを含む）は本来、個人、乃至は家族で楽しむものであって、多人数が集まって聴くものではない。昔のSPレコードのレーベルや袋には「公開の場における演奏を禁ず」と書かれてあったという [1]。日本でレコード・コンサートが成り立つようになったのは、レコード自体がまだ高価で経済的に恵まれた人々しか手に入れられなかった時代の反映であることはまず間違いのないことであろう。それに加えて、特に1970年代以降、大コレクターの方々の努力の結果としてアルゼンチンから多数の稀覯SP盤が日本に持ち込まれたことでレコード・コンサートは更に盛んになった。今日では比較的安価なCDと稀覯SP盤の復刻LP・CDの普及のお蔭でレコード・コンサートに対するニーズはかつて程ではないと思うが、それでもレコード・コンサートは相変わらず盛んである。もっともそこへの出席者の殆んどは高齢者であるが。

<A12. コレクション学派>

コレクション学とは余り聴きなれない言葉であると思うが、これは故石川浩司氏の発明になる言葉である (*)。その意味するところはレコード（主にSP）の各々について、タイトル、演奏者、作者は言うに及ばず、レコード会社、レーベル、レコード番号、録音番号、録音年月日などを事細かに調べ、記述・整理することで、その成果を一覧表にまとめ上げたものがディスコグラフィである。ディスコグラフィはレコードに関するデータ集である。レコードには、特にヨーロッパ系のレコードの中には、タイトルや演奏者の誤記もある。これも訂正せずに、必要なら注記を付けて、そのまま記録するのがディスコグラフィである。

コレクション学は一般のタンゴ・ファンにはあまり縁が無く、限られた大コレクターだけに許された「学問」である。しかし一般のタンゴ・ファンもディスコグラフィやレコード・コンサートでの解説を通してタンゴ曲やレコードの来歴などを知ることによってそれなりに楽しむことはできるから、(石川氏はどちらかと言えば否定的であったが)コレクション学もそれなりの意義はあると言わねばならない。

<A13. インターネット配信派>

最近ではCDを購入せずにインターネット配信を通してタンゴを1曲単位で購入する人が増えている。大体は若年層だが中高年者でこれを利用する人も増えてきている。この場合、あまり細かい情報は提供されないからコレクション学志向者には不便かも知れない。

<A21. 既製VT・DVD見るだけ派>

録画済みのビデオテープやDVDを通してタンゴを楽しむ人々はかなり多そうで、演奏会場でのDVDも良く売れているように見える。但し、これらの人々はレコードやCDも聴いているから、純粹

(*) 石川浩司氏がこのことを書かれた資料があったはずだが見つからない。今は記憶によるのみである。

にこれだけという人は少ないだろう。

<A22. 録画派>

演奏会での録画は禁止されているけれども、テレビ放送やYouTube画像を録画して個人で楽しむことは差支えないし、録画機器も年々進歩しているから、このカテゴリーに属する人々も少なくないに違いない。但し、この場合も純粹にこれだけというのではなく、一方でレコードやCDも聴いているはずである。

<A31. ラジオ聴くだけ派、A32. エアチェック派>

レコードがまだ手に入り難かった昭和20年代～30年代前半では大部分のタンゴ・ファンはラジオに頼りついて高橋忠雄氏や高山正彦氏が担当するラジオ放送番組に耳を傾けたものである。当時はまだ高価であったオープンリールのテープレコーダーを持っていた人は一所懸命に録音した。しかしそれもAM放送タンゴ番組が無くなると共に終わりを告げた。

その後、昭和40年代に入って故大岩祥浩氏によるFM放送タンゴ番組が開始されると、今度はそれに頼りつき、また当時普及し始めたカセットテープレコーダーで録音した。しかしそれもFM放送タンゴ番組の終了と共に終わった。

最近では秋田市の佐々木かはん氏や四日市市の丹羽宏氏のように地域のFM局でタンゴ放送番組を持っている人も何人かおられる。こうした放送はその地域の人々でないと聴くことはできないが、その代わりにradiko.jp、Listenradio.jp、Simul Radio (<http://www.simulradio.info>) のようなインターネットを介してそれらの放送を聴き、録音できるので、そうした楽しみ方をするタンゴ・ファンもこれから増えて行くであろう [2]。

日本の国内放送のみならず、アルゼンチンのFM放送も最近ではインターネット配信（例えば <http://tunein.com/radio/La-2x4-FM-927-s84341/>）されているから、それを通して現地のFM放送を楽しむ人もこれから増えそうである。

《B. ライブ・生放送派》

「ライブ・生放送派」とは演奏会、ライブ、生放送によってタンゴを楽しむ人々を指す。

<B11. ライブ何でも派、B12. 追っかけ派>

演奏会やライブに行ってみると「こんなにもタンゴ愛好者がいるのか」と改めて思う。演奏会場やライブ会場でよく顔を見かける常連に気が付くことも多い。専ら生演奏を通じてタンゴを楽しむ人は意外に多いのである。これらの常連の人々は必ずしもどこかの同好会に属しているわけでもなく、同時にダンス派であることも多いように見える。そういう人は結構いるらしい。反対に、レコード・コンサートなどでいつも見慣れた顔ぶれを演奏会やライブにおいてもいつも見出すというわけではない。「タンゴを楽しむ人＝プレイバック派」とは限らないのである。

これらの人々は演奏者や歌手を特定しない<ライブ何でも派>と特定の演奏者・歌手だけを追う<追っかけ派>に分けることができそうである。但しそれらの人々の具体的な人数比はわからない。

<B2. ラジオ・テレビ生放送派>

戦後の一時期にラジオがタンゴ演奏を盛んに生放送したことがあったが長続きはしなかった [3]。テレビ生中継も録画機器の進歩と共に姿を消した。だから厳密には<ラジオ・テレビ生放送派>というのは今日では存在しなくなった、と言っても良いだろう。しかし分類枠としてはあっても良い。

《C. ダンス派》

今日、タンゴ・ダンスは隆盛を極めている。いつもどこかでバイレやミロンガが開かれていると言ってもよいだろう。毎年開かれるアルゼンチン・タンゴ・ダンス世界選手権に向けての日本予選会も大盛況である。タンゴ・ダンスの独学は難しく、教師について習う必要がある。そして東京は勿論、全国各地にタンゴ・ダンス教室が存在する。更にタンゴ・ダンス教師の業界団体としての日本アルゼンチンタンゴ連盟なる組織もある（元来の設立動機は風俗営業法対策であったが）。こういう状況を見ると「タンゴは下火だ」ということは全くないことがよくわかる。但し筆者はダンスはしない。

<ダンス派>についての一つの問題点は、その人たちが必ずしも音楽としてのタンゴを聴いているのではなく、タンゴはダンスのための一つの道具になっていることである。その人たちに如何にしてタンゴを聴かせるかということが課題であるということも、実際に何人かのミロンガ主宰者から聞いた。筆者が数年前にツアーでブエノス・アイレスを訪れた時、同行の人々の中にはダンス教室を主宰する人たちが何人かいた。それらの人々はタンゴが好きというよりは、ダンス教師としての幅を広げる目的でタンゴに興味を持ったのだと言っていた。些か興醒めであった。救いはツアーの終わりになって、ある女性（ダンス教室を持ってはいなかったようだ）の口から「アルゼンチン・タンゴ・ダンスの上達のためには首までタンゴ漬けにならないと駄目ですね」という言葉を聞いた時であった。この言葉はすべてのアルゼンチン・タンゴ・ダンス愛好家に当てはまる。競技会で勝ち残ることの前にまずタンゴをじっくり聴き込んで欲しいと思う。最近ではフィギュア・スケートの選手の中にもタンゴ（ピアソラ作品ではあるが）を背景音楽に取り上げる人も出て来た。この場合においても音楽を良くわかっていることが高得点を得る条件ではないかと思う。

《D. 演奏家・歌手》

これについては多言を要しないであろう。問題は後継者の育成である。そのためには安定した市場（＝バイレ、ミロンガ、ライブなど）が無ければならない。これはアルゼンチン・タンゴ愛好者のすべてが負う宿題である。

NTA会員のライブへの参加に関して、筆者が一つ問題にしているのはライブの開演時刻である。最近、東京都内で開催されるライブで19:30開演がかなりある。都内23区在住の人なら問題は無いが、遠隔地・郊外在住の高齢者にとって19:30開演は帰宅時刻を考えると二の足を踏むことになる。麻場利華氏はアストロリコの関東公演の時にNTA会員の参加率が低いように感じた、と言っておられるが（Tangeando En Japón, No.37 (2016) p.51）、それは開演時間の関係もあったのではなかろうか。昼間公演が増えれば高齢者（NTA会員の多くは高齢者である）の観客は増えるのではないだろうか。同じようなことは関西地区についても言えるのではないか。

表1に示したプレイバック派、ライブ・生放送派、ダンス派はあくまで類型を示しただけであって、例えばプレイバック派の愛好家が演奏会やライブにも足繁く通い、時にはミロンガにも行くということは大いにあり得ることである。

アルゼンチン・タンゴ愛好家の多様性がNTAの運営に与える影響

世に多くある「... タンゴ同好会」はタンゴを愛好する人々が共にタンゴを聴き、タンゴを語るための文字通りの「同好」の人々の集まりである。そして、各々の同好会は大抵はプレイバック派を想定し、一部ダンス派も視野に入れた集まりと思われる。結果として、いずれの同好会もそのメンバーは本質的に同質的である。

NTA（日本タンゴ・アカデミー）は一般の同好会と同じ任意団体であるけれども、設立の経緯はそれらとは異なっている。

アルゼンチンには1996年に成立した「タンゴ法」に基づいて設立された国立タンゴ・アカデミー（Academia Nacional del Tango, ANT）がある。ANTの中核をなすのはACADÉMICO TITULARと呼ばれる、タンゴ研究その他に業績を残した人たちであり、定員がある。これに加えて、名誉会員、中間世代スタッフ、若い世代スタッフ、などからANTは構成されるが、国立組織であるので誰でも簡単に入れるわけではない [4]。

1997年中頃、日本でANTの提携団体が設立できないかというANTの会長であったオラシオ・フェレル氏の要請に基づいて設立されたのがNTAであり、その目的としてタンゴの調査・研究、内外情報の伝達、会員相互の親睦、若年層への普及が謳われている [4]。言っていることは些か堅苦しいが、実質的には一般の同好会と大差はなく、誰でも入会可能であり、その点でも一般の同好会と変わらない。異なるところと言えばプレイバック派、ライブ派、ダンス派、演奏家・歌手のいずれに属する人も等しくNTA会員として受け入れることである。換言すれば会員の各々がどのようにタンゴを愛好するかは問わない団体である。即ちNTAは原則として互いに異なるタイプのタンゴ愛好家の集まりである。

しかし実際にはこれまでのNTAの運営はプレイバック派的観点で進められてきたことは否定できない。それはNTA設立の尽力・奔走された人たちの多くがプレイバック派の代表とも言える大コレクターの方々であったことによるのであり、やむを得ないことでもあった。それでもNTA設立当初はメンバーの中にダンス派や演奏家・歌手の方々もかなり居られた。若い会員も現在よりは多かったように思う。また、ダンス派や演奏家・歌手、若手で途中入会される方々も何人か居られた。

ところが時が経つと共にダンス派、演奏家・歌手、若手会員は次々と退会され、ダンス派、演奏家・歌手、若手会員の新たな入会者も激減した。そうなった大きな要因はNTAがそれらの人々に特段のメリット・便益を提供できなかったことにあると言わざるを得ない。NTAとしても座視していたわけではなく、NTA主催のミロンガ・パーティー（それ自身は非常に盛況であった）など対応策を考えたが、入会者増・退会者減の点では大きな効果があったとは言えない。

もう一つの問題はNTAが外部の人々に「NTAは敷居が高い」という印象を植え付け、新規入会を躊躇わせているのではないかと、ということである。こういうことは筆者も実際に耳にしている。会員の一人である（株）ラティーナ社長の本田健治氏の「一番いけないことは若い者をコンサートに連れて行って「よかったらろう」と言えばいいのに、「今日のはタンゴじゃないよ」とベテランのタンゴファンが言ったらそこで終わっちゃいますよ。ファン個人としてはいいんだけど、タンゴ・アカデミーとしては控えるべきだと思いますね... 「えっ、あれを聴いて？」と馬鹿にしたような発言をする。そんなことを言われたらもう誰も寄ってこないですよ。若い連中をみんな育てて行くという気持ちにならないといけませんね。」という意見は傾聴に値する [5]。

かつて高橋忠雄氏がこれと似たようなことを高山正彦氏に向かって言われた、と聞いたことがある。「入会者をもっと勧誘せよ」と叫ぶだけでは問題は解決しないのである。

以上を総合すれば、NTAが直面している問題点（会員減、財政難など）はNTAのこれまでのプレイバック派的観点による運営がアルゼンチン・タンゴ愛好家の多様性にうまく対応できなくなったことに遠因があるというのが結論である。

NTAが取るべき戦略（提言）

アルゼンチン・タンゴ愛好家のタイプが異なれば、その各々がNTAに対して期待することも当然異なる。表2はプレイバック派、ライブ派、ダンス派、演奏家・歌手のそれぞれがNTAに対してどのような便益・メリットを期待するであろうかということとNTAがそれにどう対応できるであろうかということをまとめたものである。実際に調査した結果ではなく、こうなろうかと考えただけのものであるから完全でもないし網羅してもいない。以下、NTAの具体的対処戦略について考えてみた。

（1）IT技術の活用

NTAが表2のような多様な期待に万遍なく応えることは不可能であるが、一つだけこれだけは絶対に必要と言えることがある。それはメール（メールマガジンを含む）、ホームページ、スマホ、フェイスブックなどIT技術の全面的活用である。現在のNTA会員の中にIT無縁の人々がかなり居られることは筆者も十分承知している。それを承知の上で筆者は敢えて、IT技術を駆使することなくしてNTAの更なる発展はあり得ない、と言いたい。ある程度の割り切りが必要である。

	会員がNTAに対して期待する便益・メリット	NTAから見た課題・問題点
A. プレイバック派	1. レコード・CD・タンゴ、コレクション学に関する知識 2. レコード・コンサート 3. 機関誌の充実 4. 地方会員への便益提供	1. 会員の期待にはほぼ対応できている 2. 地方での活動の充実は課題として残っている 3. 役員を含む会員の高齢化の結果としての知識提供者、機関誌執筆者の減少
B. ライブ派	1. タンゴに関する知識	どのような知識が求められているかの調査不十分
C. ダンス派	1. ミロンガの開催 2. ミロンガ情報の提供 3. レコード・CD・タンゴに関する知識	1. 年1回では不足？ 2. 他の会の活動との差別化困難 3. どのような知識が求められているかの調査不十分
D. 演奏家・歌手	1. 演奏会への積極的参加 2. 演奏会のPR機会の増大	NTAの対応は不十分
E. 全般的問題	1. ホームページの充実 2. 高齢化への対応	1. ホームページはなお建設途上 2. 若手のタンゴ・ファンとの接点が無い

表2 アルゼンチン・タンゴ愛好家がNTAに対して期待することとNTAから見た課題・問題点

具体的には次のようなことが挙げられる：

- a. ホームページ（HP）を充実して、会員、非会員を問わず誰でもNTAの活動に関する殆どすべての情報をHPから入手することができるようにする。但し詳細な情報はパスワードを介することで会費を支払っている会員限定とする。
- b. 現在は機関誌に掲載されているタンゴ・セミナーやリンコン・デ・タンゴの報告、コンサート評、NTA役員会報告などをHPに併載すれば、全国の会員がそれらの情報を3ヶ月～半年待たなくとも入手・閲覧することができる。
- c. 演奏家・歌手である会員の直近のライブの予定などもHPを介して会員に知らせることができる。或はメール乃至はメールマガジンを利用すればもっと早く伝達できる。こういうサービスがあることが知れ渡れば演奏家・歌手のNTA入会増も期待できる。因みに会員の伊藤修作氏はご自身が経営されるタンゴ・バー「エル・チョクロ」でのライブ予定をフェースブック上にその都度公開されており、大変便利である（但し、伊藤氏と「友達」になる必要はある）。
- d. 現在はほぼ2週間前の通知の葉書が来るまでわからないタンゴ・セミナーやリンコン・デ・タンゴの予定も、それが決定された時点でHPに掲載されるならば、会員がそれぞれの予定を立てる上で大変便利になるであろう。NTA会長がNTAの行事予定をフェースブック上でアナウンスすることはいかがであろうか。
- e. 著名レコード店、中古レコード店のHPをNTAのHPにリンクさせれば、地方会員や新規会員にとって非常に便利になるであろう。
- f. HPに閲覧者からの質問やコメントを受け付ける欄を設ければ、NTA理事会と会員相互のコミュニケーションが更に促進されるであろう。但し、悪用を防ぐために現在のようにHPを開くためのパスワードは必要である。

HPは誰でも（子供でも）利用できるし、スマホでも閲覧できる。IT無縁を自負（？）する人たちもIT技術を毛嫌いせずにIT技術を駆使する方向で考え直してほしい。

一方で費用面についても検討が必要である。HPも全て無料で運用されているわけではない。どこまで費用をかけられるかが課題である。

(2) 機関誌の見直し

NTAに対する「敷居が高い」という印象は、それがすべてではなくとも、やはり機関誌、特にTangueando誌の内容に由来することは否定できないだろう。一案として次のような方策を考えた：

- ・Tangueando誌とTangolandia誌の役割分担を明確にする。
- ・Tangueando誌はNTAの活動報告（役員会報告、タンゴ・セミナーやリンコン・デ・タンゴの報告、ミロンガの報告、全国会員の集いの報告）を主体とし、これに解説記事や入門者向けの記事及びコンサート情報、コンサート評、CD評などを加える。これは各種学会・協会の学会誌・協会誌に例えることもできる。
- ・Tangolandia誌はタンゴに関する調査・研究、タンゴ人に関する評伝のような原著著作や重要文献の翻訳などに特化する。会員からの「エッセイ」のような投稿原稿もTangolandia誌に掲載する。これは各種学会・協会の論文誌におけるレター欄に対応すると考えればよい。
- ・誌名は必要なら変えればよい。日本語のサブタイトルを加えればもっと親しみ易くなるだろう。

(3) タンゴ・セミナーの改善

「タンゴ・セミナー」というタイトルはやはり堅苦しく、それが敷居を高くしていることは否めない。会員、非会員を問わず、誰にでも親しめるタイトルに改称した方が良いのではなからうか。セミナーの内容も現在は役員会でその都度決めているが、これについても一般の人も入り易いような狙いで年間計画を作成し、それに基づいて実行する方向に変えられないだろうか。可能ならタンゴ・セミナーに生演奏を取り入れるのも一案である。

(4) リンコン・デ・タンゴの改善

リンコン・デ・タンゴは今のところ出席者もまずまずで特に心配はないが、やはり「リンコン・デ・タンゴ」という名称はわかり難い。もっとわかり易い名称にできないものだろうか。

当然であるが、これは一案に過ぎない。安易に結論を求めず、立ち入った議論が必要である。

[1] 高山正彦、ポルテニア音楽同好会機関誌「Tango Argentino」昭和40年3月号、p.1

[2] 佐藤勝夫、Tangueando en Japón, No.36 (2015) pp.95-99

[3] 青木 誠、「ぼくらのラテン・ミュージック」、(株)リットーミュージック 1996年、pp.176-187

[4] Tangueando en Japón, No.1 (1998) p.1, pp.2-4, pp.6-8

[5] Tangueando en Japón, No.36 (2015) p.43

< 訂 正 >

Tangolandia 春号 (第32号) 28頁の「Arrepentido」の作曲者名を誤記しておりました。正しくは Florencio Ottaviano です。小林謙一様から懇切なご指摘を頂き、また同名異曲についても貴重なご教示を賜りました。御礼と共にご諒解を得て下記します。(編集部)

小生の手持ちの音源では「ARREPENTIDO」にはRODOLFO SCIAMMARELLA 作曲：詩と FLORENCIO OTTAVIANO (bandoneón) 作曲の2種類があります。

前者は1936年作曲、後者の作曲年は不明ですが JUAN MAGLIO の録音が1927年ですので、その頃の作曲かと推測しています。

手持ちの録音では、前者では

JORGE OMAR CON ORQ. DE FRANCISCO LOMUTO (1936)

CARLOS VARELA CON ORQ. DE ROBERTO FIRPO (1936)

ALBERTO MORÁN CON ORQ. DE ARMANDO CUPO (1955)

JORGE MACIEL CON ORQ. DE OSVALDO PUGLIESE (1967)

MARITA CANARO CON ORQ. DE ANTONIO CERVINO (?)

で、後者では

JUAN MAGLIO Y SU ORQ. TÍP. (1927)

しか見当たりません。

日本タンゴ・アカデミー 2016年上期活動実績

● タンゴ・セミナー (CLASE DE TANGO)

- ◎ 第94回セミナー：3月6日(日) 全国会員の集いの日、西村秀人講師の「来日タンゴ楽団の記録」と題して映像と解説入りの講演が行われた。
- ◎ 第95回セミナー：5月8日(日) 信濃町の東医健保会館において開催された。講師は大澤寛副会長で「好い唄のタンゴを楽しみましょう」と題して歌入りの30曲が紹介された。

● 東京リンコン・デ・タンゴ

- ◎ 第86回リンコン：1月19日(火)
コメンテーター：飯塚久夫 出演：Sayaca
- ◎ 第87回リンコン：3月29日(火)
コメンテーター：吉岡達郎、杉山滋一 出演：ユリ・アスセナ
- ◎ 第88回リンコン：5月17日(火)
コメンテーター：大澤寛、齋藤富士郎 出演：アルモニカ・アカデミア

● 関西リンコン・デ・タンゴ

- 5月22日(日) 神戸の「サロン・ド・あいり」で開催
コメンテーター：吉澤義郎、宮本政樹 出演：タンゴ・グレリオ+上堂尚子 (C1)

● 役員会・編集会議

* 1月25日(月) 役員会

1. 会員動静報告：現在会員数173名
2. 入出金状況報告
3. 「タンゲアンド・エン・ハボン」第37号発行準備状況報告
4. 「タンゴランディア」2016年春号入稿状況報告
5. 上期行事に関する計画立案
東京リンコン、タンゴセミナー、関西リンコン、納涼大会、東北リンコン
6. 2016年期役員・実行委員の選任
会長：飯塚久夫
副会長：高場将美、大澤寛
理事：杉山滋一、福川靖彦、弓田綾子、西村秀人、宮本政樹、脇田富水彦、池永博威、
笠井正史、中村尚文
監事：山本幸洋
実行委員：鈴木一哉、吉田義之、山本雅生、吉澤義郎、吉岡達郎、鈴木啓子
佐藤勝夫
名誉会長：島崎長次郎
7. 全国会員の集いの実施計画立案

8. 日本タンゴ・アカデミーのこれからに関する討議、意見交換等
- * 2月26日（金）役員会
1. 会員動静報告：現在会員数175名
 2. 入出金状況報告
 3. 「タンゴランディア」2016年春号進捗状況報告
 4. タンゴセミナー、東京リンコン、関西リンコン、東北リンコンに関する実施立案
 5. 日本タンゴ・アカデミー年間行事の詳細立案
 6. ホームページ更新に関わる計画立案
- * 3月6日（日）全国会員の集い
- 東京浜松町のメルパルク東京にて開催、詳細は別掲レポート参照
- * 4月1日（金）役員会
1. 会員動静報告：現在会員数176名
 2. 入出金状況報告
 3. 「タンゲアンド・エン・ハポン」第38号については会員・非会員の別なく広く投稿を求める方針を打ち出した。
 4. 「タンゴランディア」2016年春号についてはレポートに割くページを極力控える方針を打ち出した。また、ライブ情報はホームページが復活次第、そこに移管する。
 5. ホームページは山本幸洋委員を中心に（株）ラティーナ本田大典氏の協力を仰いで作業を早める。所要資金は役員からの寄付金を投入する。また、過去に発刊された機関誌に掲載された論文等を精選し、ホームページに掲載するように取り計らう。
 6. ミロンガパーティーは9月22日（木・祝日）千代田区一番町の「いきいきプラザ・カスケードホール」で開催する。ダンスデモはGYU、生演奏はメンターオ五重奏団を予定する。
- * 5月10日（火）役員会
1. 会員動静報告：現在会員数177名
 2. 入出金状況報告
 3. 「タンゲアンド・エン・ハポン」第38号は7月末発行予定で作業中
 4. 「タンゴランディア」2016年春号は4月末発行済
 5. 次のタンゴセミナーは9月11日（日）開催予定

訃報

かねてから療養中であられた米山宏さんが去る7月1日逝去されました。

クモ膜下出血で享年82歳。Tangolandia 誌に「忘れ得ぬタンゴの人々」を連載（2009年秋号から2012年春号まで）頂きました。謹んでご冥福をお祈りします。

（編集部）





タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

レポート：宮本 政樹

第93回タンゴ・セミナー

2015年12月13日

今年聴いたタンゴから

今年、心に響いたタンゴ 12月生れの巨匠の共演

清水 裕

- 1 TACONEANDO (靴音高く)
(Pedro Maffia – José Horacio Stafforani)
歌) カルロス・ガルデル (1890年12月11日生まれ) 1931年録音
演奏) フランシスコ・カナロ楽団
- 2 LA CUMPARSITA (ラ・クンパルシータ)
(Geraldo Hernán Matos Rodríguez – Enrique Maroni – Pascual Contursi)
演奏) ドナート＝セリージョ楽団
歌) アグスティン・マガルディ (1897年12月1日生まれ) 1929年録音
- 3 QUÉ ALEGRÍA! (何たる喜び!)
(Eustaquio Laurenz)
演奏) フリオ・デ・カロ (1899年12月11日生まれ) 1930年録音
- 4 14 DE DICIEMBRE (12月14日)
(Pablo Echimu – Alberto Huser)
演奏) ファン・ダリエンソ (1900年12月14日生まれ) 1961年録音
- 5 CORAZONEANDO (コラソネアンド)
(Osvaldo Pugliese)
演奏) オスバルド・プグリエーセ (1905年12月2日生まれ) 1958年録音



今年、心に残ったタンゴ

森 正樹

- 1 MALICIOSA (意地悪な女) フリオ・デ・カロ楽団 (1928年録音)
(Luis Petrucelli) RCA Víctor TA-4805
- 2 MI COTORRITO BOHEMIO (気ままな小部屋) フランシスコ・ロムート楽団 (1929年録音)
(M. Vega – Lito Bayardo) AMP TC-1015
- 3 VALSECITO DE ANTES (昔のいとしいワルツ) ファン・ダリエンソ楽団 (1937年録音)
(Antonio Sureda) RCA Víctor TA-4803
- 4 AQUELLA LOCA (あの妙な女) ロベルト・フィルポ楽団 (1930年録音)
(C. Camerota) CTA-5004
- 5 VIEJITA MÍA (私のおふくろ) フランシスコ・カナロ楽団 (1927年録音)
(Ernesto Di Cicco) APCD-6512

ラ・クンパルシータの名迷盤を訪ねて

“落穂ひろい” ～以前のセミナーで取り上げなかったSP

島崎長次郎

戦後の登場で話題になったオルケスタから

- | | | |
|---|------------------------------------------------|---------------------------|
| 1 | フェリシアーノ・ブルネリー楽団
FELICIANO BRUNELLI Orq. | Víctor 68-0053
G: 1951 |
| 2 | フランシスコ・ラウロ六重奏団
FRANCISCO LAURO 6to. | Víctor 60-2112
G: 1950 |
| 3 | トリオ・ギターラス・アルヘンティーノ
TRÍO GUITARRAS ARGENTINO | Víctor 68-2188
G: 1954 |

欧米録音を聴く

- | | | |
|---|--------------------------------------|-----------------------------|
| 4 | タニ・スカラ楽団
TANI SCALA Orq. | Odeón 281742
G: 1939 |
| 5 | エドゥアルド・ビアンコ楽団
EDUARDO BIANCO Orq. | Telefunken 43101
G: 1939 |
| 6 | ザ・カスティリアンズ
THE CASTILIANS Orch. | Columbia M20
G: 1934 |

日本録音を聴く

- | | | |
|---|--------------------|---------------------------|
| 7 | テイト・ニュー・タンゴ・アンサンブル | Teichiku 15127
G: 1935 |
| 8 | 江戸川蘭子 | Victor J54507
G: 1938 |

“輝けるタンゴの時代”の演奏から

- | | | |
|----|------------------------------------------------------------------|-------------------------|
| 9 | コンフント・デ・エストゥディアンテス・デ・デレーチョ
CONJUNTO DE ESTUDIANTES DE DERECHO | G: 1930 |
| 10 | ファン・ダリエンス楽団
JUAN D'ARIENZO Orq. | Electra 791
G: 1928 |
| 11 | ドナート=セリージョ楽団
DONATO=ZERRILLO/A.MAGALDI<12吋> | Brunswick 1A
G: 1930 |





タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

レポート：笠井 正史

第94回タンゴ・セミナー

2016年3月6日

来日タンゴ楽団の記録

コメンテーター：西村 秀人

日本タンゴ・アカデミー（以下NTA）2016年の全国会員の集いは、昨年と同じ東京浜松町の「メルパルク東京」で開催された。午前の第1部はタンゴ・セミナー、午後は生演奏つきの懇親会で、北は北海道から南は九州まで全国各地から会員が集まり、今年も盛大な集会となった。

第1部のセミナーは西村秀人氏の担当で「来日タンゴ楽団の記録」と題して16ミリフィルムに残された希少映像が紹介された。中には音声のない映像もあったので、西村氏が該当する音源を調整してつけるといった労作もあった。

このセミナーで取り上げられた曲目は次の通りであった：

1. “ラ・クンパルシータ” 1965年11月来日のキンテート・ア・ロ・ピリンチョの演奏
2. “パリのカナロ” 1967年11月来日のキンテート・グロリアの演奏
3. “月下のコンサート” 1967年4月来日のアルマンド・ポンティエル楽団の演奏
4. “白いカンドンベ” 1965年8月来日のオスバルド・プグリエーセ楽団の演奏
歌はホルヘ・マシエルとアベル・コルドバ
5. “思い出” 1965年8月来日のオスバルド・プグリエーセ楽団の演奏
6. “エル・チョコロ” 1965年6月16日NHK放送のキンテート・レアルの演奏
7. “ラ・プニャラーダ” 上記と同じ放送で紹介されたキンテート・レアルの演奏

次は1961年12月に来日したフランシスコ・カナロ楽団の記録映画「日本のカナロ」から8曲：

8. 司会の高橋忠雄氏のオープニング
9. “街角” グロリアとエドゥアルドのダンスつき
10. “華やかなりし頃のミロンガ” グロリアとエドゥアルドのダンスつき
11. “パリのカナロ” 楽団演奏
12. “たそがれのオルガニート” グロリアとエドゥアルドのダンスつき
13. “トルタ・フリータ” グロリアとエドゥアルドのダンスつき



演奏するアストロリコ四重奏団

14. “ガウチョの嘆き” キンテート・ピリンチョの演奏
 15. “メドレー（場末のバンドネオン～カミニート～ムンジンガ～パハ・ブラーバ）”
 ここまでが「日本のカナロ」からの映像でフィナーレとなったが、おまけとして
 16. “両親の家”が1980年来日のカルロス・ガルシアとタンゴ・オールスターズの演奏で紹介された。

日本タンゴ・アカデミー 2016年全国会員の集い

午後に入ってから第2部は、まず飯塚久夫会長の挨拶で始まり、杉山滋一理事による平成27年度収支報告と平成28年度予算の紹介が行われ、いずれも異議なく承認された後、本年度新任の役員が紹介された。この後首都圏以外の全国各地から参加した会員が壇上で紹介され、簡単な挨拶が行われた。その後はいよいよ懇親会で、古くからNTA会員として在籍している門奈紀生率いるアストロリコ四重奏団の演奏に入り、途中の休憩をはさんで16曲が披露された。演奏曲目は次の通りで、この中4曲はNTA会員の歌手Sayacaの歌が入った。

演奏曲目：

1. “パトテロ・センチメンタル”
2. “夢の中で”（エンスエニョ）
3. “我が悲しみの夜”
4. “エル・チョコロ”（歌） Sayaca
5. “トレンサス”（歌） Sayaca
6. “帰らぬ旅路”（シン・レトルノ）
7. “ロス・マレアードス”
8. “クラベル・ロホ”
9. “エル・トロエスマ”
10. “絆”（ロス・ピンクロス）
11. “カミニート”（歌） Sayaca
12. “スール”（歌） Sayaca
13. “回想”（レコルダシオン）
14. “我が人生のすべて”（トーダ・ミ・ビーダ）
15. “仲間たちが踊るように”（パ・ケ・バイレン・ロス・ムチャーチョス）

いつもながらアストロリコ四重奏は寡黙なリーダーの門奈紀生をバイオリンの麻場利華、コントラバスの滝本恵利、ピアノの平花舞依と3人の美女が取り巻く華麗な演奏が展開されたが、MC兼任の麻場利華はトークの合間に必ずCD宣伝を忘れない辺りは流石であった。



演奏する門奈紀生さん



歌うSayacaさん

日本タンゴ・アカデミー 平成27年度収支報告書 単位：円
(2015年 1月 1日～2015年12月31日)

***収入の部**

前期繰越金	2,242,295	(内 前会費158名 ¥2,217,000)
会費、入会金	401,000	2015年会費、中途入会など 1月 1日以降入金分
特別会費	279,500	懇親会参加費
〃	402,500	ミロンガ参加費
〃	8,000	セミナー・ビジター参加費
〃	146,000	リンコン、雑収入など
期中収入小計	1,237,000	
<u>当期収入合計</u>	3,479,295	
前受年会費	2,199,000	2015. 12. 31まで入金済2016年分入会金・会費 156名分
<u>*収入の部合計</u>	5,678,295	



***支出の部**

事業費	1,639,517	懇親会、セミナー、リンコン、ミロンガ、Web 費用など
機関誌発行費	1,503,753	4回発行、印刷、発送、編集企画会議費用など
会議費	83,820	理事会開催会場費など
事務局運営費	147,833	会員名簿、会員証、広報案内文書、コピー・発送費など
<u>*支出の部合計</u>	3,374,923	

収入支出差額	104,372
<u>前受け年会費</u>	2,199,000
<u>*次期繰越金合計</u>	2,303,372

平成28年(2016) 1月20日

監査の結果、適正かつ正確であることを認めます。

監事 脇田 富水彦 監事 山本 幸洋 

日本タンゴ・アカデミー 平成28年度予算書

(単位：円)

(2016年 1月 1日～2016年12月31日)

***収入の部**

前期繰越金	104,372	
前受年会費	2,199,000	平成28年分(156名)
小計	2,303,372	
年会費	266,000	2016年会費 1月 1日以降入金分
特別会費	487,500	懇親会、セミナー、リコン、ビザ会費など
当期収入合計	753,500	

収入の部合計 3,056,872**支出の部**

事業費	1,570,000	懇親会、セミナー、リコン、HPWeb 費用など
機関誌発行費	1,275,000	4回発行、印刷、発送、編集会議費用など
会議費	85,000	理事会開催会場費など
事務局運営費	100,000	会員名簿、案内文書作成、ハガキ封筒など
当期支出合計	3,030,000	

支出の部合計 3,030,000**次期繰越金 26,872**



タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

レポート：池永 博威

第95回タンゴ・セミナー

2016年5月8日

好い唄のタンゴを楽しみましょう

(脚韻 = rima と様式美にほんの少しだけ触れながら)

コメンテーター：大澤 寛

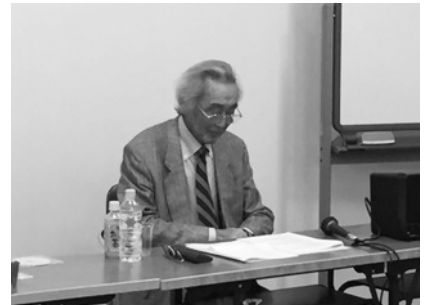
「タンゴはよく聴くけれども、唄のタンゴはどうも苦手です」というタンゴファンは少なくありません。その大きな理由の一つが言葉の壁ではないでしょうか。そんなタンゴファンの悩みに応えた今回のセミナーのテーマでした。大澤氏から、2曲 (Alma de payaso と Afiches) の歌詞と唄の曲 30 曲が例示されて、これを聴きながら唄のタンゴを楽しく聴く心構えについてレクチャーがありました。

レクチャーの主題を纏めると次の通りです。もともとタンゴの唄は、スペイン語の歌詞の意味が分からなくても楽しく聴こえるように書かれています。その鍵は、唄の様式美と脚韻に隠されています。様式美とは洗練された手順や形式に存在する美しさのことで、脚韻 (rima) とは歌詞の中で同じ音が響きあうことをいいます。

多くのタンゴの歌詞は 4 小節からできています。このさい、第 2 小節と第 4 小節の歌詞が同じであれば、様式美によって聴く人に安らぎを与えます。具体的には歌詞の 1 番、2 番、3 番まで歌ってもう一度 2 番に戻って歌い終わるということです。一方で、複数の詩行の末尾の単語の最後の音節のアクセントが置かれた母音が揃っていたり (これを“類音韻” = rima asonante という、例：amor (愛) / dolor (悩み))、さらに母音も子音も揃っていたり (これを“同音韻” = rima consonante という、例：vida florida (華やかな人生))、あるいは同じ詩行の二語またはそれ以上の語で同音が重なると (これを“中間韻” = rima interna という)、脚韻によって心地よく聴こえるからです。レクチャーは「唄のタンゴを聴くときには、無理に言葉を追わないで、詩の母音を追うだけで十分に楽しむことができます。もっと唄のタンゴを聴いてみて下さい」という大澤氏の言葉で締めくくられました。

セミナーの参加者は、会員 38 名、ビジター 3 名、計 41 名でした。当日の出席者から、情感込めて歌う歌のタンゴは全身に語りかけてくるようで吸い込まれました、唄のタンゴが好きになりました、などの声が聞かれました。唄のタンゴの愛好者が増えるのを予感させるセミナーでした。

セミナーで流れた 30 曲は次の通りです。



コメントする大澤氏



話を聞くアカデミー会員

- | | | | | |
|----------------------------------------------------------------------|------|--------------------------------------------------|--------------------------------|-----------|
| 1. 「Alma de payaso 道化師の魂」
Orq.) Francisco Canaro | 1930 | m.) Raúl Saraceno
c.) Roberto Maida | l.) Antonio Pérez | gr. 1937. |
| 2. 「Ríe, payaso 笑えよ、道化」
Orq.) Juan D'Arienzo | 1929 | m.) Virgilio Carmona
c.) Mario Bustos | l.) Emilio Falero | gr. 1959 |
| 3. 「Calla, bandoneón 黙ってくれよ、バンドネオン」
Orq.) Solistas de D'Arienzo | 1944 | m.) Carlos Lázzari
c.) Osvaldo Ramos | l.) Óscar Rubens | gr. 1977 |
| 4. 「La última curda 最後の酔い」
Orq.) Aníbal Troilo | 1956 | m.) Aníbal Troilo
c.) Edmundo Rivero | l.) Cátulo Castillo | gr. 1956 |
| 5. 「El bazar de los juguetes 玩具屋」
Orq.) Miguel Caló | 1941 | m.) Roberto Rufino
c.) Alberto Podestá | l.) Reynaldo Yiso | gr. 1941 |
| 6. 「La limosna 施し」
Orq.) Alfredo De Ángelis | | m.) Juan José Guichandut
c.) Julio Martel | l.) Horacio Sanguinetti | gr. 1949 |
| 7. 「Canzoneta カンソネタ」
Orq.) Osvaldo Pugliese | 1951 | m.) Erma Suárez
c.) Jorge Maciel | l.) Enrique Lary | gr. 1954 |
| 8. 「El último organito 最後の流しオルガン」
Con orq.) | 1948 | m.) Acho Manzi
c.) Susana Rinaldi | l.) Homero Manzi | gr. 1977 |
| 9. 「Organito de la tarde 黄昏のオルガニート」
Orq.) Emilio Barcarce | 1923 | m.) Cátulo Castillo
c.) Alberto Marino | l.) José González Castillo | gr. 1947 |
| 10. 「A la luz del candil 街灯の灯影で」
Orq.) Osvaldo Pugliese | 1927 | m.) Carlos Vicente Geroni
c.) Miguel Montero | l.) Julio Navarrine | gr. 1954 |
| 11. 「A mis manos 俺の両手に」
Orq.) Alfredo Gobbi | 1955 | m.) Alfredo Gobbi
c.) Alfredo del Río | l.) Julio Camilloni | gr. 1955 |
| 12. 「Afiches ポスター」
Orq.) Atilio Stampone | 1956 | m.) Atilio Stampone
c.) Roberto Goyeneche | l.) Homero Expósito | gr. 1972 |
| 13. 「Acquaforte 銅版画」
Con gtr.) | 1931 | m.) Horacio Pettorossi
c.) Agustín Magaldi | l.) Juan Carlos Marambio Catán | gr. 1931 |
| 14. 「Cuando un viejo se enamora オジサンが恋をする時」
Orq.) Carlos Di Sarli | 1942 | m.) Rodolfo Sciammarella
c.) Roberto Rufino | l.) Manuel Romero | gr. 1942 |
| 15. 「Jacinto Chiclana (人名)」
Orq.) Ástor Piazzolla | 1965 | m.) Ástor Piazzolla
c.) Edmundo Rivero | l.) Jorge Luis Borges | gr. 1965 |
| 16. 「El viejo vals あの古いワルツ」
Orq.) Francisco Rotundo | 1951 | m.) Charlo
c.) Enrique Campos y Floreal Ruiz | l.) José González Castillo | gr. 1951 |
| 17. 「El adiós 別れ」
Trío Rositango) | 1938 | m.) Maruja Pacheco Huergo
c.) Ivana Fortanali | l.) Virgilio San Clemente | gr. ? |
| 18. 「Negra María 黒いマリア」
Orq.) Lucio Demare | 1941 | m.) Lucio Demare
c.) Juan Carlos Miranda | l.) Homero Manzi | gr. 1941 |

19. 「Milonga del soldado 兵士のミロンガ」
 1963 m. y l.) Horacio Guarany
 Orq.) Osvaldo Pugliese c.) Alfredo Belusi + Jorge Maciel gr. 1963
20. 「San José de Flores (地名)」 1935 m.) Armando Acquarone l.) Enrique Gaudino
 Orq.) Osvaldo Pugliese c.) Alberto Morán gr. 1953
21. 「Cuando era mía mi vieja お袋のいた頃」
 1963 m.) Pascual Mamone l.) Juan Bernardo Tiggi
 Orq.) Leopoldo Federico c.) Julio Sosa gr. 1964
22. 「El bulín de la calle Ayacucho アヤクーチョ通りの下宿の小部屋」
 1923 m.) José y Luis Servidio l.) Celedonio Flores
 Orq.) Aníbal Troilo c.) Francisco Fiorentino gr. 1941
23. 「Silueta porteña ブエノスアイレスの影法師」
 1936 m.) Juan Ventura y Nicolás Luis Cúccaro
 l.) Orlando D'Aniello y Ernesto Nolli Orq.) Francisco Canaro c.) Roberto Maida gr. 1936
24. 「Cotorrita de la suerte オウムのお告げ」
 1927 m.) Alfredo De Franco l.) José De Grandis
 Con gtr.) c.) Carlos Gardel gr. 1927
25. 「Una canción 唄ひとつ」 1953 m.) Aníbal Troilo l.) Cátulo Castillo
 Orq.) Argentino Galván c.) Horacio Deval gr. 1953
26. 「Un boliche 酒場」 Orq.) Aníbal Troilo c.) Roberto Goyeneche gr. 1958
27. 「La cantina 小さな酒場」 1952 m.) Aníbal Troilo l.) Cátulo Castillo
 Orq.) Aníbal Troilo c.) Jorge Casal gr. 1954
28. 「Tabernero 居酒屋の親爺」 1927 m.) Miguel Cafre y Fausto Frontera
 l.) Raúl Héctor Costa Oliveri Orq.) José Basso c.) Francisco Fiorentino gr. 1949
29. 「Abuelito お祖父ちゃん」 1926 m.) Alberto Laporte
 l.) Eduardo Trongé + Carlos Cabral Con gtr.) c.) Carlos Gardel gr. 1926
30. 「La cumparsita ラ・クンパルシータ (con recitado por Luis "Negro" Mela)」
 1916 Orq.) Osvaldo Pugliese
 c.) Carlos Guido y Jorge Maciel gr. 1959

付記：AFICHESの第1小節について、韻を示すと次の通りです。

- | | |
|-------------------------------------------------------|-------------------------------|
| Cruel en el cartel | ・ 1行目と2行目の末尾cartelと3行目末尾 |
| La propaganda manda, cruel en el cartel | papelが脚韻、 |
| Y en el <u>fetich</u> e de un <u>afich</u> e de papel | ・ 3行目のfetich e とafich eは中間韻 |
| Se vende la <u>ilusi</u> ón | ・ 4行目末尾ilusi ónと5行目末尾coraz ón |
| Se rifa el <u>coraz</u> ón | が脚韻、 |
| Y apareces <u>t</u> ú | ・ 6行目末尾t úと7行目末尾juventudと |
| Vendiendo el último jirón de <u>juventud</u> , | 8行目末尾cruzが脚韻、 |
| iCargándome otra vez,la <u>cruz</u> ! | ・ 9行目末尾coraz ónと10行目末尾rincón |
| iCruel en el cartel, te ries <u>coraz</u> ón! | が脚韻、 |
| Dan ganas de balearse en un <u>rinc</u> ón. | |

「東京リンコン・デ・タンゴ」



レポート：福川 靖彦・笠井 正史

第86回

2016年1月19日 原宿「クリスティー」

第86回東京リンコンは、2部構成のプログラムで、年の初めに当り飯塚久夫会長自らのセミナーに始まり、後半はNTA会員である人気歌手Sayacaのリンコン初登場で新春幕開けに相応しい華やかなリンコンとなった。参加者は、タンゴ・アカデミー会員43名、非会員6名ゲスト1名の総勢50名。

第1部「変革のタンゴ」

コメンテーター：飯塚久夫

タンゴが第3黄金期を迎えるまでの変遷と、現在なお進行中の「変革のタンゴ」について飯塚会長独自のコメントを加えながら、1927年から1965年に至る次の11曲を紹介した。

1. “マラ・フンタ” (1927) フリオ・デ・カロ
2. 傷跡 “シカトリーセス” (1930) カルロス・ディ・サルリ
3. “ホテル・ビクトリア” (1935) ファン・ダリエンソ
4. “ノスタルヒアス” (1936) チャルロ
5. “ペルカル” (1943) ミゲル・カロー
6. “さらば草原よ” (1949) ウーゴ・デル・カリル
7. “それでも君を愛す” (1956) ルシアーノ・レオカータ
8. “愛せしが故に” (1962) オスバルド・プグリエーセ
9. “最後のコーヒー” (1963) フリオ・ソーサ
10. “ハシント・チクラーナ” (1965) アストル・ピアソラ
11. 夢の中 “エンスエニョス” (1964) キンテート・リアル



第2部「今宵はタンゴと共に」歌：Sayaca

NTA在籍のベテラン歌手でありながら、今回リンコン初登場のSayacaの歌で、次の5曲とアンコール1曲が披露された。Sayacaは普段は生バンドで歌っているが、この日は慣れないカラオケ伴奏、然も聴く方はNTAというプロが相手なので大変緊張したと言っている。また平素はタンゴ以外のお客の注文もあり、必ず1-2曲はジャズやボサノバの曲を入れるのであるが、尊父の大澤寛さんの厳命もあり、タンゴの古典曲を中心にしたとのことであった。



1. “エル・チョコロ”
2. “ロス・マレアードス”
3. “チキリン・デ・バチン”
4. “ウノ”
5. “ミロンガ・デ・アヌンシアシオン”

そしてアンコール曲として“シルエータ・ポルテーニャ”でお開きとなった。

第87回 2016年3月29日 原宿「クリスティー」

第87回の今回は、3部構成のプログラムで、レココンと現役会員歌手によるライブを鑑賞した。参加者はタンゴ・アカデミー会員40名、非会員4名（オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダから寺内美紀幹事長以下3名を含む）、ゲスト1名の総勢45名。

第1部「パチヨを語る」

コメンテーター：吉岡達郎

第1部は毎回四日市から参加される吉岡達郎氏で、自ら「ファン・マグリオ・パチヨ陶醉会」を主宰される程の無類の「パチヨ好き」で知られているが、今回は「パチヨを語る」と題して次の3曲を紹介された。

- (1) “わが母に” A MI MADRE
- (2) “ラ・プラタ川のほとり” ORILLAS DEL PLATA
- (3) “三色すみれ” EL PENSAMIENTO



第2部「リンコン・タンゴの歴史」第3回 1940年代前期

コメンテーター：杉山滋一

第2部は恒例の杉山滋一氏による「タンゴの歴史」で、今回はその3回目を迎え、1940年代の黄金期に入り、先ずはこの年代前期から次の13曲が紹介されたが、単なるレコード紹介ではなく、その歴史的背景や亜国の政治経済情勢まで話が及んだ曲目解説であった。

- | | | |
|---------------------------|-------------------|-----------------|
| (1) “CHIRUSA” | 演奏：ファン・ダリエソ楽団 | 歌：アルベルト・レイナル |
| (2) “CHARLEMOS” | 演奏：カルロス・ディ・サルリ楽団 | |
| (3) “TODA MI VIDA” | 演奏：アニバル・トロイロ楽団 | |
| (4) “AHORA NO ME CONOCÉS” | 演奏：アンヘル・ダゴスティーノ楽団 | |
| (5) “EN ESTA TARDE GRIS” | 演奏：マリオ・マウラノ楽団 | 歌：リベルター・ラマルケ |
| (6) “MALENA” | 演奏：ルシオ・デマーレ楽団 | 歌：ファン・カルロス・ミランダ |



- (7) “AL COMPÁS DEL CORAZÓN” 演奏：ミゲル・カロー楽団 歌：ラウル・ベロン
- (8) “JUNTO A TI” 演奏：カルロス・デイ・サルリ楽団 歌：アルベルト・ポデスター
- (9) “CICATRICES” 演奏：ファン・ダリエンス楽団 歌：エクトル・マウレー
- (10) “MONEDA DE COBRE” 演奏：リカルド・タントゥーリ楽団 歌：アルベルト・カスティジョ
- (11) “UNO” 演奏：アニバル・トロイロ楽団 歌：アルベルト・マリーノ
- (12) “FAROL” 演奏：オスバルド・プグリエーセ楽団 歌：ロベルト・チャンネル
- (13) “LA CUMPARSITA” 演奏：アルフレド・デ・アンジェリス 語り：ネストル・ローディ

第3部 「ユリ・アスセナ」

第3部は当会会員でもある歌のユリ・アスセナのライブでご本人の用意してきたCD伴奏で語りつきの4曲が披露された。

- (1) “三年過ぎて” FUERON TRES AÑOS
- (2) “小さな鈴” CASCABELITO
- (3) “忍耐” PACIENCIA
- (4) “最後のコーヒー” EL ÚLTIMO CAFÉ

この後、「オートラ！」に応じてお得意の“SE DICE DE MÍ”（私の噂）を身振り、手振り、小道具？使いで披露し、拍手喝采の中に第87回を終えた。

今回はオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダの若い現役メンバーが3人来てくれたことで、参加者の平均年齢が幾分引き下げられ、雰囲気的にも若返った感じであった。



第88回 2016年5月17日 原宿「クリスティー」

第88回の東京リンコンには雨天の中、タンゴ・アカデミー会員28名、非会員2名、ビジター2名、ゲストとしてアルモニア・アカデミアから3名、総勢35名が参加した。

第1部 「Lucio Demareを聴こう」

コメンテーター：大澤寛

- (1) “En un rincón”（あの片隅で）Héctor Artola 作曲
 - (2) “Mañana zarpa un barco”（明日は船出）
 - (3) “Mañanitas de Montmartre”（モンマルトルの夜明け）
 - (4) “Ropa blanca”（白い服）Alfredo Malerba 作曲
 - (5) “Luna”（月）
 - (6) “Tal vez será su voz”（あなたの声かしら）
 - (7) “Malena”（マレーナ）
- （1曲目と4曲目を除いて全てLucio Demareの作曲）



第2部 「米国のタンゴ楽団」

コメンテーター：齋藤富士郎

米国各地で収録された8曲を紹介した。何れも、本格的なタンゴの名曲を米国内で地域的に活躍している楽団の演奏で、恐らく本邦では初公開ともいえる内容のものであった：



(1) “Racing Club” 演奏：Alex Krebs Tango Sextet (ポートランド)

(2) “Garufa” 演奏：Trío Garufa (サン・フランシスコ湾岸地域)

(3) “Nueve de julio” 演奏：Qtango (アルバカーキー)

(4) “Libertango” 演奏：Triunfal (デンバー)

面白いことに、ロシアの民族楽器バヤンとバラライカを使用している

(5) “La yumba” 演奏：Mandrágora (ミネアポリス)

(6) “El andariego” 演奏：QuinTango (ノース・バージニア)

(7) “Maipo” 演奏：Orquesta Sin Trabajo (ボストン)

オルケスタと言っているが実際は四重奏団

(8) “Zum” 演奏：Héctor Del Curto (ニューヨーク)

H.デル・クルトはかつてオスバルド・プグリエーセ楽団で第四バンドネオンをつとめていた経験のある亞国人

第3部 アルモニカ・アカデミア

ふだんは埼玉県でハーモニカでタンゴを演奏しているアルモニカ・アカデミアが、東京リンコンに初出場。今回は会主の小山實氏とお弟子さんの星野正雄氏、井原欣二氏のお二人が一人ずつ演奏される形で次の7曲を披露された。

(1) “ア・メディア・ルス” (星野正雄氏)

(2) “フェリシア” (星野正雄氏)

(3) “ア・ラ・グラン・ムニェカ” (井原欣二氏)

(4) “ラ・クンパルシータ” (井原欣二氏)

(5) “サンタ・ルシアの酒場嬢” (小山實氏)

(6) “バンドネオンの嘆き” (小山實氏)

(7) “エル・ウラカン (台風)” (小山實氏)



演奏する星野正雄氏



演奏する井原欣二氏



演奏する小山實氏

この後、「オートラ！」に応じて小山会主が「タンゴ以外も手掛けておりますので…」と断って、ガーシュウインの「サマータイム」をサービスされた。ハーモニカ演奏風景を間近に見ることは滅多にないことであるが、小山氏が説明されたように、この楽器は本来的に半音階の出ない楽器であるため、何本かキーの異なるハーモニカを手にして演奏しなければならず、かつて誰もが子供時代に吹いていたような単純なものではないことに目覚まされた一幕であった。

第27回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 鈴木 忠昌 (姫路市) —

第27回関西リンコン・デ・タンゴは2016年5月22日（日）神戸三宮サロン・ド・あいりで開催。神戸は快晴、先週15日（日）は神戸祭りです。今日は普通の日曜日に戻った駅前通りを眺めながら会場へ。

出席者はNTA会員14名、ビジター18名、合計32名。うち遠方からは四国2名、山口1名、奈良1名が参加。珍しいところではアストロリコ楽団から4氏（門奈、麻場、平花、滝本）が第2部出演・星野氏の応援？を兼ねて参加された。会場はほぼ満席となる盛況。

13:00 司会・山本雅生氏の挨拶で会はスタート。

第1部 映像で見るタンゴ 13:10～

吉澤氏提供、エリカ・デイ・サルボ（ビオリン）八重奏団の2005年ロシア・ツアーの映像。デイ・サルボは2007年民音で来日しているので、その2年前の映像ということになる。映像はダンスに一点集中してこれだけを追う。マエストラのビオリン以下演奏陣は、音はすれども姿は全く見えない。歌手のみ映像に出る。

曲目は新旧のタンゴ、ミロンガ、バルス。これをバックに5組のダンサーが交替で、ひたすら踊りまくる。この映像を見ると1980年代世界的に大流行したダンス・ショー「タンゴ・アルゼンチーナ」を思い出す（大阪公演は1987年）。曲とダンスに合わせ演奏スタイルが変わるが、リズムのはっきりした明快なものが多く、踊りやすく、聴きやすい。

第2部 TANGO GRELIO+NAOKO 演奏会 14:30～

グレリオは結成して6年経過、知名度も上がり関西中心に活動中。バンドネオンは最近腕を上げ、風格も出てきた星野氏。ギターはクラシック・ギターの米坂氏。タンゴはこのデュオに限られるので演奏を聴くことは少ない。終りの方数曲では新企画、上堂氏のクラリネットが参加する。バンドネオンとギターは相性がよいが、これにクラリネットがどうからむのか？

演奏はリズム感のある「エル・チョクロ」、ハーモニーのよい「レクエルド」、交互にソロを取り合う「プレパレンセ」と様々の表情をみせる。9～11とアンコール曲ではクラリネットが入りトリオとなる。タンゴ・デ・アンテス調（9）、folklore調（10）、新旧タンゴ（11、アンコール）とおもむきは違うが、クラリネットが違和感なく夫々に溶け込んでいる。グレリオが新しい境地を開拓するか見守りたい。

最後にCDの情報。ファースト・アルバムは2013年「デステ・エル・アルマ」。これに続く2作目を現在制作中。今回はピアソラをメインにトロイロ、ガルデルなどの作品を予定している。今日の演奏曲では「下町のロマンス」を収録する。こちらでもグレード・アップした演奏が確認できる筈だ。

第3部 エストリビージョ・カントール 15:25～

解説はNTA本部からお招きした、宮本政樹理事。同氏はタンゴのレコ・コン、生演奏、ダンスと守備範囲広く、活動されている。当会には3回目のご出席となる。今回は1930年前後を中心に、エストリビージョ入り楽団演奏を特集した。古典タンゴ・ファンには聴きのがせないプログラム。

まず、アカデミック？ に当時のタンゴ曲の構成、エストリビージョのあり方など、基本事項の説明から入る。続いて、懐かしいOTV「メルセ寺院の鐘」から、超有名プロビンシアノス「ラ・クンパルシータ」まで10曲を一気に聴かせる。1937年の演奏あたりは「どうかな？」という感じもあるが、これは選曲の余裕なのか、お好みなのか？ 宮本氏は、言葉数少なく、ポイントを押え、簡潔に古典タンゴ、エストリビージョの魅力に熱く語られた。又第3部の名演10曲をCDにコピーして配布された。助かります。

まとめとしては「ビオリン・ソロ、歌、バンドネオン・バリエーション、三者のバランスのとれたものが名演奏につながる」ということだろうか。10曲目「ラ・クンパルシータ」が終ると、会場から拍手が入る。黄金時代のタンゴの魅力を再確認する1時間余りであった。

16:40 山本氏終了宣言。写真撮影の案内。

16:50 恒例、吉澤氏の段取りで、出席者、出演者全員集合。記念写真を撮る。

17:00～ 慰労を兼ねて懇親会を開催、有志19名が出席する。バルの気分で、内外タンゴ界の話題、友人・知人の近況から、舛添東京都知事の政治資金問題まで論点はさまざま。中には人生の潤滑油になる話もあり、雑然としているが面白い。所用のある方から順次退席、19時頃に解散した。

* 関西リンコン・デ・タンゴ今後の予定

次回 第28回：11月13日（日）

次々回：2017年5月21日（日）

会場はいずれもサロン・ド・あいり。

多数のご参加をお待ちしています。

***** 第 1 部 *****

映像で見るタンゴ SOLO TANGO EL SHOW RUSSIA TOUR 2005 180 吉澤義郎
ÉRICA DI SALVO Y SU OCTETO

- | | | |
|---|---------------------|-------------|
| 1 | ADIÓS NONINO | (Piazzolla) |
| 2 | A MIS VIEJOS | (Di Salvo) |
| 3 | CONTIGO QUIERO IR | (Fresedo) |
| 4 | EL PORTEÑITO | (Villoldo) |
| 5 | UNA NOCHE DE GARUFA | (Arolas) |

6	MI BUENOS AIRES QUERIDO	(Gardel / Le Pera)	Canta	Roberto Minondi
7	CANDOMBE	(Canaro)		
8	BOEDO	(De Caro)		
9	DERECHO VIEJO	(Arolas)		
10	GARÚA	(Troilo / Manzi)	Canta	Claudia Panone
11	MILONGUEANDO EN EL 40	(Pontier)		
12	COMME IL FAUT	(Arolas)		
13	NARANJO EN FLOR	(Hnos. Expósito)	Canta	Claudia Panone
14	GALLO CIEGO	(Bardi)		
15	VENTARRÓN	(Mafia / Staffolani)	Canta	Roberto Minondi
16	ZUM	(Piazzolla)		
17	ACQUAFORTE	(Catán / Pettorossi)		
18	RUBIAS DE NEW YORK	(Gardel / Le Pera)	Canta	Roberto Minondi
19	DESDE EL ALMA	(Melo / Manzi)		
20	A EVARISTO CARRIEGO	(Rovira)		
21	ROMÁNTICA	(Di Salvo / Ch. Fabbri)		
22	BORDONEO Y 900	(Ruggiero)		
23	VERANO PORTEÑO	(Piazzolla)		
24	LA CUMPARSITA	(Matos Rodríguez)		
25	TANGO DIABLO	(Piazzolla)		

***** 第 2 部 *****

素晴らしい演奏を「聴く・見る・感じる」 TANGO GRELIO+NAOKO

以前にも来て頂いて素晴らしいTANGOを聞かせて下さった「タンゴ・グレリオ」にクラリネットの「上堂尚子^{かみどう}」さんを加えた初めての演奏を楽しむ。

演奏 バンドネオン 星野俊路
ギター 米坂隆弘
クラリネット 上堂尚子

曲目 1 エル・チョコクロ
2 アラバル・アマルゴ
3 ラ・トランペーラ
4 レクエルド
5 プレパレンセ
6 最後のコーヒー
7 エル・ポージョ・リカルド

- 8 下町のロマンス
 9 オテル・ビクトリア (トリオ)
 10 ミロンガ・トリステ (トリオ)
 11 リベルタンゴ (トリオ)
 アンコール 12 ラ・クンパルシータ (トリオ)

***** 第 3 部 *****

“エストリピージョ・カントール”

古典タンゴに秘められた 16 小節の侘びと寂びの味わい 069 宮本 政樹

- | | | | |
|----|-----------------------------------|-------------------------------------------------|-------|
| 1 | CARILLÓN DE LA MERCED (メルセ寺院の鐘) | (Enrique Santos Discépolo) | 1931年 |
| | 歌) エルネスト・ファマー | オルケスタ・ティピカ・ビクトル | |
| 2 | MENTIRA (嘘) | (F.Pracánico-Celedonio Esteban Flores) | 1931年 |
| | 歌) カルロス・ラフエンテ | アドルフォ・カラベリ楽団 | |
| 3 | NUNCA (決して) | (Antonio Sureda-Celedonio Esteban Flores) | 1930年 |
| | 歌) プリンシペ・アスール | フランシスコ・ロムート楽団 | |
| 4 | NOCHE DE INVIERNO (冬の夜) | (José Luis Padula-Enrique Cadícamo) | 1937年 |
| | 歌) リタ・モラーレス | (ワルツ) オルケスタ・ティピカ・ビクトル | |
| 5 | RECUERDOS DE PARÍS (パリの思い出) | (Mario Canaro-Carmelo Santiago) | 1937年 |
| | 歌) ロベルト・マイダ | フランシスコ・カナロ楽団 | |
| 6 | VAMOS, CHE (さあ行こう) | (Guillermo V.Otheguy) | 1928年 |
| | 歌) アントニオ・ブグリオーネ | オスバルド・フレセド楽団 | |
| 7 | A TU MEMORIA MADRECITA (母さんの思い出に) | (Alberto Consentino) | 1933年 |
| | 歌) ルイス・ディアス | (ワルツ) ロス・プロビンシアノス楽団 | |
| 8 | EN UN RINCÓN DE CAFÉ (喫茶店の片隅で) | (Gabriel Clausi-Francisco Laino) | 1929年 |
| | 歌) カルロス・ビバン | ファン・マグリオ・“パチョ” 楽団 | |
| 9 | VIEJO CIEGO (盲目の老人) | (Sebastián Piana, Cátulo Castillo-Homero Manzi) | 1928年 |
| | 歌) チャルロ | フランシスコ・カナロ楽団 | |
| 10 | LA CUMPARSITA (ラ・クンパルシータ) | (Gerardo Hernán Matos Rodríguez) | 1934年 |
| | 歌) ロベルト・ディアス | ロス・プロビンシアノス楽団 | |

春の芸術祭2016 オルケスタYOKOHAMA

2016年5月5日 横浜市開港記念会館

宮本 政樹

第一部 日本タンゴ界の魁 池田光夫

オルケスタ横浜のテーマ曲、昔懐かしいMETA FIERRO (がんがん行こう) の演奏が会場に流れてから、齋藤一臣の挨拶。50年前頃、日本にまだタンゴが根付いていない時代にいち早く本当のタンゴをやった男、池田光夫が日本のタンゴ界に先駆けた演奏の功績を讃えたタンゴコンサートとして開催。池田光夫が演奏していた曲をご令嬢の池田みさ子をピアノの特別ゲストとして招いて、オルケスタ横浜とのジョイント演奏である。日本のタンゴを強調していた池田光夫が最初にライブで演奏した懐かしい「赤い靴のタンゴ」(古賀政男曲)からスタート。次にNTA名誉会長の島崎長次郎が登場し、50年前の日本のタンゴ全盛時代の時代背景を語り、当時池田光夫が活躍していたオルケスタNHK、オルケスタ・サンテルモでの



演奏に言及し、池田みさ子に仕事を離れた家庭での父親像について、インタビュー。池田みさ子曰く「仕事場の厳しさとは異なり、家庭では怒られた事もなく、ほんとうに優しい父親でした。演歌の大好きな父親でした」と。2曲目は「チャイナタンゴ」(服部良一曲)。戦前の大陸歌謡の一つで年配の方には懐かしい。専光秀紀がめずらしいコルネット・バイオリンを聴かせる。ラッパのような音を金属に反響させて出す音色が中国風の雰囲気醸し出す。フリオ・デ・カロの弟が所有していたという貴重なもの。3曲目は石川さゆりの歌でお馴染みの「津軽海峡冬景色」(阿久悠作詞、三木たかし作曲)。4曲目は池田光夫自作の曲で「二人だけの夜」。昭和52年にルベン・ファレスのバンドネオンに感動して作曲したという。池田みさ子が父親の作曲した曲を残すために自分の楽団で2枚目のCDのレパートリーにした。「日本人が作って日本人が演奏し、それを世界の方に聴いていただきたい」と。

第一部後半はピアノが池田みさ子から、いつもの齋藤晶に交代。「古賀政男にまつわるタンゴ」として、池田光夫が大事に思っていた古賀政男が、文化交流の一環として藤原義江の斡旋で、昭和の初めに船でアルゼンチンに渡った時に、ふる里を想う曲として「たれか故郷を想わざる」のような本場アルゼンチンのタンゴを取り上げて構成。1曲目は、アスセナ・マイサニの故郷を想う曲「ブエノス・アイレスの詩」LA CANCIÓN DE BS.AS. (A.Maizani- O.Cúfaro-M.Romero合作) 2曲目は「メルセ寺院の鐘」CARILLÓN DE LA MERCED (E.S.Discépolo) 古賀政男がディセポロに会ってセンチミエントについて、日本の音楽のせつなさタンゴの持っているせつなさを語り合ったという。来年の横浜の開港記念会館100周年に寄せて、この曲をピアニストの齋藤晶が日本語で作詞。「山手、丘の上CARILLÓN DE LA MERCED」歌は若い藤田翔。3曲目は「愛しき故郷」TIERRA QUERIDA (Julio de Caro) フリオ・デ・カロがブラジルなどに演奏旅行した時に、故郷を想って作曲した曲。

ダンスがAraki & Mayumi。4曲目の「たれか故郷を想わざる」は「バイア・ブランカ」BAHÍA BLANCA (Carlos Di Sarli)。望郷の念にあふれた美しいメロディーはオルケスタ横浜が最も得意としている曲。ダンスが若手のAKITO & aia。5曲目は「タンゲラ」TANGUERA (Mariano Mores)。古賀政男はマリアノ・モーレスに会った。モーレスは荒城の月をイメージしてタンゲラを作曲。この後池田光夫の奥様が紹介され壇上に登場し、花束の贈呈。「池田光夫のタンゴを聴いて、あらためて惚れ直した」と。

第二部 バイオリン&ギター タンゴ・デュオ 飯泉昌宏 (ギター) 専光秀紀 (バイオリン) —アストル・ピアソラの組曲「タンゴの歴史」HISTORIA DEL TANGO—

タンゴの歴史の上で、まだバンドネオンやピアノが登場しない時代は、ギターやバイオリンやフルートの小編成でタンゴを演奏していたが、ここでは当時の演奏スタイルのギターとバイオリンの2台の楽器のみで、ピアソラが作曲した組曲「タンゴの歴史」HISTORIA DEL TANGOの全曲を披露した。この曲はピアソラ自身は録音しなかった曲で、全部で4楽章から構成された組曲である。原曲はフルートとギターの組み合わせであるが、クラシックの室内楽としても知られた名作。タンゴの各時代のスタイルをピアソラが捉えたタンゴの創作。ただ昔のタンゴ・ファンにはなかなか理解しえないところがあり、メランコリックな神秘性から激しいリズムへの展開も従来聴きなれた古典タンゴの感性からは捉えにくいであろう。ただ飯泉昌宏と専光秀紀の演奏の技術は高く評価でき、繊細で微妙な音色は聴きごたえがあり、譜面を見ない自由で伸び伸びとした演奏スタイルは見ていても気持ちが良い。

1. 1900年の酒場 BORDEL 1900
2. 1930年のカフェ CAFÉ 1930
3. 1960年のナイトクラブ NIGHT CLUB 1960
4. 現代のコンサート CONCERT D'AUJOURD'HUI

第三部 LOS MUCHACHOS CON FUNYI

～フンニをかぶった男たち～

フンニというのはタンゴの男性ダンサーが中折れにかぶっている帽子で、そのカッコ良さがタンゴのひとつのシンボルになっているという。司会役の齋藤晶の挨拶では、二度のタンゴ黄金期はいずれも二度の世界大戦と前後して盛んになっており、現在は世界中でタンゴが発展している第三期黄金時代を迎えているが、歴史は繰り返すという警えから、今や戦争前夜ではないのかと説明、どっと笑いが起きる。タンゴの二面性で、フンニの帽子のシャープな



カッコ良さとその背景にある暗い時代を描いてみようとしたのが第三部の企画構成である。「横濱TANGO」は齋藤晶が作詞し、LA ÚLTIMA COPAの曲で藤田翔がレシタードを入れて元気よく歌う。「・・・横濱TANGOは俺の街、俺の愛、いつまでも変わらずに蒼く輝きつづけていく・・・」と。Araki とAKITOは フンニの帽子をかぶり、ミロンガ (MUCHO, MUCHO) とワルツ (DESDE EL

ALMA) をカッコ良く踊り、演奏よりもダンスの方が拍手が多いのは今のご時世か。「秋の綺想曲」では池田達則が見事な指捌きでバンドネオン・ソロを聴かせ、アンコールの「ジェラシー」では専光秀紀のバイオリンのソロ演奏がひと際目立っていた。

- | | |
|--------------|----------------------------------------|
| 1. 夜明け | EL AMANECER |
| 2. 横濱TANGO | LA ÚLTIMA COPA 作詞：齋藤 晶 歌：藤田 翔 |
| 3. もっとたくさん | MUCHO, MUCHO (ミロンガ) ダンス：Araki & Mayumi |
| 4. 心の底から | DESDE EL ALMA (ワルツ) ダンス：AKITO & aia |
| 5. ラ・クンパルシータ | LA CUMPARSITA |
| 6. 秋の綺想曲 | CAPRICHIO OTOÑAL バンドネオン・ソロ：池田達則 |
| 7. 弔辞 | RESPONSO 作詞：齋藤晶 朗読：藤田翔 ダンス：Araki/AKITO |





日本タンゴ・アカデミー
LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPON

日本タンゴ・アカデミー(NTA)がおくる

第6回 **ミロンガ パーティー**

NTA presenta
MILONGA y CONCIERTO



●演奏 メンターオ5重奏

●ダンス・デモ GYU




2016年 9月22日(木・祝)

●時間 18:30~21:30 (開場18:00)

●場所 **いきいきプラザ 一番町** カスケードホール
(102-0082 東京都千代田区一番町12 TEL: 03-3265-6311 地図は裏面にあります)

●参加費 **2,500円** (要事前申込み)

主催: 日本タンゴ・アカデミー
後援: (株)ラティエナ 一般社団法人日本アルゼンチンタンゴ連盟

お問合せ・お申込み

●宮本 TEL: 090-4002-2571 E-mail: nochero-soy@cafe.email.ne.jp

●弓田 TEL: 080-1080-9179 E-mail: aya-yumita@alpha.ocn.ne.jp



神戸の夜を彩った「深夜のタンゴ喫茶店」

あるタンゴ馬鹿が経験をした

「ラジオ番組」への挑戦と顛末記

山本 雅生

1999年（平成11年）3月発行の「タンゲアンド誌」第3号愛好家インタビューで石川浩司さんにお話を訊いて頂いた中で、概略は新聞の記事を含めて書いて頂いていますので“何をいまさら！”と思ったのですが島崎名誉会長を始め、大澤編集長、果ては弓田理事からも強力な要請があったので後期（末期）高齢者の怪しげな記憶を基にでっち上げる失礼をお許し下さい（特に女性には弱いので決心をした）。

事の始まりは1994年（平成6年）7月9日に「ラジオ関西CRホール」で行った神戸ポルテニア音楽同好会主催のタンゴコンサートがきっかけであった様です。

出演は舩松伸男先生と古い仲間達の「TRÍO BONARIA」

バンドネオン：舩松 伸男

バイオリン：古橋 幸

ピアノ：大塚 典

と云うトリオの演奏会でありました。



画：角井康二さん
（お顔写真の替りとして提供されたもの）

ラジオ関西には失礼かもしれませんが、会場の下見に行った時は怪しげな大道具などが所狭しと積み上げられており“こんな処で？”と云う感じだったのですが、会場の担当者の方がチャンと整理をすると云う約束で決めたのでした。当日は綺麗に整理され舞台も出来上がって大変雰囲気の良い会場に仕上がっていて、安心をしました。解説者の末広光夫さんを始めジャズ等のポップス音楽がメインの「ラジ関」でのタンゴコンサートですので、関係者の方達もたくさん聴いておられた様でした。

そして1995年（平成7年）1月17日早朝あの忌まわしい阪神淡路大震災に見舞われたのでした。その後「ラジ関」のスタジオを覗いて見たら仮設の建屋の中でそれは戦争の様な凄まじい混乱の中、被害の状況などを怒鳴っていた事を思い出します。

そうこうするうち1998年の夏、お世話になった「ラジ関」の勸角^{かんかく}さんからの電話で1998年10月から1999年3月までのワンクール（6ヶ月間）放送時間の空きが出来たので30分の番組をやらないか？とのお話が入ったのでした。その時間はスポンサーが無いので出演料は払えなくて全くのボランティアになるとのお話でした（我々の様な素人のオッサンに出演料など出す馬鹿は何処にも居ないのが当たり前ですが、..）。

天から降ってきた様なこんな機会は一生無いと思って飛び付きたいと思ったのですが、一寸待てよ6ヶ月もやるとは荷が重いと考えると、古くからの友人で神戸でのタンゴの活動もずっと一緒にやってきた「芝野大兄（故人）」がいるではないか!! と思いついて、早速相談をした処「マカシトケー！」

と云う心強い返事があったので引き受ける事にしたのでした。

そこでどの様な番組内容にするか？ と云う相談になって

- 1 タイトル名は 「深夜のタンゴ喫茶店」とする
- 2 テーマ曲は カフェ・ドミンゲス 演奏 アストロリコとする
- 3 曲数は 毎回6曲を基準に最終曲に「ラ・クンパルシータ」を入れる
- 4 司会・解説は 芝野史郎とし、最初と最後は山本雅生が務める
- 5 毎回2曲は 関係者をお願いをしてゲストとして出て頂く

と云う様な事で、清水の舞台から飛び降りる事にしたのでした。その時期「ラジ関」の社屋は中央区ハーバーランド内の「神戸情報文化ビル」に移転（1996・8）をしていたのですが、私達の大事なタンゴを録音するのに使ったスタジオは旧社屋に有った仮設スタジオでした。怪しげなレストランの抜け殻の様な所に録音用のデスクが有り、その横に1m×2m位の箱が有って、録音デスクの前には祝迫さんいわいさこと云うベテランのディレクターが座って素人の私達に指示を出してくれたのです。隣の箱（防音扉と録音デスクの見えるガラス窓）が有って、小さな机と向かい合わせに椅子が有り奥の方にメインの出演者が、向かい側にゲストとなる仲間が座って真ん中のマイクに向かってお喋りをする、と云った塩梅になっていました。

机の上には「カフ」と呼ばれるスイッチが有って、それを入れたり切ったり、ディレクターの祝迫さんと「指差」をし乍ら進めていくのですが、初めて経験をする素人には中々それがタイミングよく出来なくて、外にいる連中（我々の仲間の様な素人に何が出来るのか？ と見に来ていた「ラジ関」の職員）に何度も大笑いをされてその都度やり直しをしたものです。

「海に見える放送局AM神戸がお送りをする“深夜のタンゴ喫茶店”、アストロリコのカフェ・ドミンゲスのメロディーと共に今夜も神戸ポルテニア音楽同好会の企画・構成によりまして開店いたします。私はマスターの芝野史郎です」と云うオープニングのセリフは第5回11月2日放送分からで、局の方達のアドバイスで始まったのでした（それ迄は「タンゴファンの皆さん今晚は・・・」と云っていた）。芝野氏は度々「一寸他所では聴けない様なタンゴの名曲の数々を、貴重な録音でお楽しみ下さい」とも云って居ました。この「一寸他所では聴けない、、、」とは芝野大兄の面目躍如たるものでした

「あんな猪を捕まえて入れるような檻の中に放り込んでおいて何処に海が見えるんや!!」と思ったのですが、ハーバーランドに有る新設の放送局を見学した時、成程と納得をしたものです（それは素晴らしい!!）。放送をした回数が26回、ゲスト席に座ったのは延32名、紹介をした曲数が162曲でした。録音は放送の約1週間位前のお昼から始まり、2～3回分を録音したのですが、初めは取り直し等もあって大変でした（今聞き直してみると緊張の余り声も上ずっていたのが、回を重ねると上手くなっています）。

(以下は6月7日に編集部全員が集まって山本さんから預かったテープを聴いて取り纏めたものです。紙数の関係からプログラムの全てを紹介出来ないのが残念ですが、出来るだけ当時の雰囲気伝えようとしたものです)

山本さんが述べて居られるように、この放送は「神戸ポルテニア音楽同好会」の企画・構成によるものであり、第1回と最終26回には枢軸メンバーである5人の方々と芝野史郎氏の全員が登場しておられます。第1回と最終回のプログラムを掲載します。第1回の顔ぶれからは既に宮本さん、秋葉さんそして芝野さんが鬼籍に入られており、20年の歳月を物語っています。

(第1回) 1998年10月5日(月) 25:00 ~ 25:30 山本雅生が放送開始の挨拶

全員出演

	曲名	演奏	歌手	
山本雅生	ヌエベ・デ・フリオ	ロス・トゥバ・タンゴ		
上田 登	レクエルド	○・プグリエセ (来日3回目)		
宮本協和	ラ・ウルティマ・コパ	○・プグリエセ		
角井康二	デカリシモ	ギドン・クレーメル		
秋葉光夫	エル・ディスティンギード・シウダダーノ	ロス・プロビンシアーノス	A・モラン	
芝野史郎	ラ・クンパルシータ	ロベルト・フィルポ		1916・9



山本雅生



上田 登



宮本協和



秋葉光夫



芝野史郎

第2回からは毎回ゲストが登場されて、それぞれのお気に入りの曲目の披露や趣向を凝らした番組作りを行って居られます。第2回にはお二人とも鉄道ファンであられる芝野さんと山本さんが描写曲「エル・エスピアンテ」(機関車)と「ポフ・ポフ」(蒸気が出る音“シュッシュッポッポ”)を紹介され、第5回のリクエスト集では日本の作品「夕映え」(昭和25年 北村維章)がO. T. コンパニエーロス(名古屋のタンゴバンド)で取り上げられました。

第7回の女性歌手特集にはマリア・デ・ラ・フエンテの「エル・チョコロ」、スサーナ・リナルディの「メロディア・デ・アラバル」、リリアナ・バリオスの「ポル・ウナ・カベーサ」やパトリシア・ノラの「ノスタルヒアス」に並んで藤沢嵐子のブエノスアイレスで収録された未発売の「モノ・ア・モノ」が紹介されています。第12回はゲストの門奈紀生さんが「レクエルドス・デ・ボエミア」をバンドネオン四重奏(A. ピアソラ、L. フェデリコ、R. メデーロス、A. リオス)で取り上げておられます。

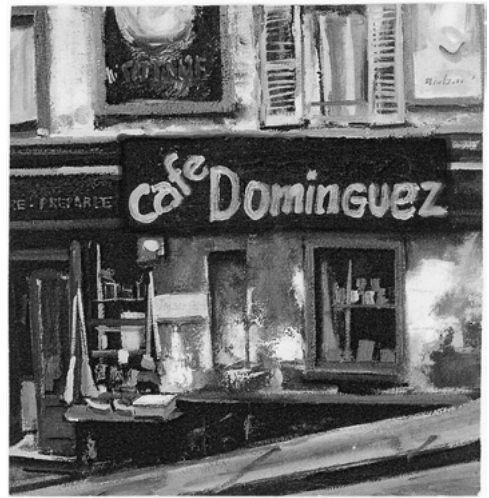
第13回ではとても珍しい「ガト・ドルミロン」すなわち「猫踏んじゃった」のスペイン語版が柚木秀子さんの歌で紹介されています。CD化はされておらず、何処かのライブでファンが録音したも

のでしょうか？ スペイン語の歌詞は高場将美さんによるものですが、とにかくテンポが早くて最初は歌詞とメロディーが合わず、当時の柚木さんはとても苦心されたそうです。

また第14回には麻場利華さんがこれも珍しい「あのね」をウーゴ・バラリス五重奏団の演奏で紹介しておられます。

様々の趣向の一つが第21回の岩崎宏之とタンゴ・コスモスの演奏「エル・アコモード」の中に幾つの有名曲が取り入れられているかを当てるというクイズ。正解はバンドネオンで「エル・パニユエリート」、バイオリンで「バイア・ブランカ」、ピアノで「センチミエント・ガウチョ」バイオリン+ピアノで「エル・アマネセール」そしてピアノで「ラ・クンパルシータ」でした。

毎回の進行役（喫茶店にちなんで“マスター”）を務められた芝野さんのコレクションから「ラ・クンパルシータ」希少盤が紹介されるのですが、第1回放送のロベルト・フィルポの1916年9月録音に始まり、第2回はJ. M. パチョの同じく1916年録音、珍しいものではディキシランド風のジャズバンドであるライ＝ノラン・イス・キンテート（第5回）、ハワイアンギター二重奏のロス・ルーテス（第15回）、さらにブラジルのコーラスグループであるジュリーとフランドリアン（第18回）等々。勿論有名楽団ではフィルポの1928年録音（第9回）、O. T. ピクトルの1926年録音（第11回）、1928年のダリエソのラ・クンパルシータ初録音（歌はC. ダンテ）（第17回）そしてご造詣の深かったドナート・セリージョが2回（第23・24回）オルケスタ・ティピカ・ブルンスウィックが2回（第25・26回）など語り尽くせないものがあります。また芝野さんの数度の訪亜時のタンゲリーア訪問のお話などを掲載し切れないのが誠に残念です。



画：角井康二さん
（番組のテーマ曲をイメージしたもの）

番組に空きが出たとは言え、そして時間帯は深夜であったとしても、現在では想像もつかない幸運をラジオ神戸（この当時は既にラジオ関西でしたか？）が運んで来てくれたものです。そしてその幸運の前髪をしっかりと掴んだ神戸ポルテニア音楽同好会の皆さんの実力と、その後の番組構成への努力に深い敬意を捧げるものです。それにしても“古き良き時代”を偲ばせる貴重な記録をご提供頂きました山本さんに厚く御礼申し上げます。

最後に毎回ゲストとして登場された方がたのお名前を第2回から順にご紹介します。

（敬称略）

山本雅生、上田登、山本雅生、第5回はリクエスト集、宮本協和、角井康二（女性歌手特集）、秋葉光夫、山口富造、角井康二、平井かほる、門奈紀生、大塚功、麻場利華、第15回はリクエスト集、鈴木忠夫、井上潤、山本雅生・上田登、山本雅生、上田登、宮本協和、永田保、角井康二、秋葉光夫

(第26回・最終回) 1999年3月29日(月) 山本雅生が放送を終えてのお礼と挨拶

	曲名	演奏	歌手
山本雅生	ヌエベ・デ・フリオ	アルミンダ・カンテーロス	M・パス
上田 登	ア・ロス・アルティスタス・プラス ティコス	O・プグリエセ	
宮本協和	ウン・レクエルド・ナダ・マス	F・カナロ	
角井康二	アディオス・ノニーノ	舩松伸男とロス・アセス・デ・ オーサカ	
秋葉光夫	オテル・ピクトリア	キンテート・レアル	
芝野史郎	ラ・クンパルシータ	O・T・プルンスウィック	

以上の様に素人の「オッサン」達が悪戦苦闘をし乍ら、楽しい半年を過ごす事が出来たのでした。丁度60歳前後、まだ仕事を持っていた時で、上手く合間を見つけて集まりトンチンカンを繰り返し乍ら最終回の収録を済ませた時は安堵の気持ちと残念な気持ちが交錯をして複雑な思いが胸中を駆け巡りました。

それにしましても芝野大兄の持つタンゴへの情熱と博識、膨大なコレクションの中からの選曲で凝縮された見事な選曲はこれだけの回数では物足りなかったのではないかと申し訳ない気持ちでいっぱいです。そして20年と云う月日は環境を変えるのに十分な時間で有りまして、この中に登場をした仲間達の中から鬼籍に入られたのが山口富蔵さん、秋葉光夫さん、芝野史郎さんそして宮本協和さんと4人もおられます。残った者たちもお医者さん通いが最大の仕事になって暮らしているのが実情です。

会員の皆様には何の参考にもならないローカルの思い出話を見て頂きまして申し訳なく存じます。島崎長次郎さん・飯塚会長・大澤先生・弓田綾子さんには何かとお世話になり、背中を押して頂きまして厚くお礼を申し上げる次第であります。

最後に一つだけ私事で紙面を汚させて頂く我が儘をお許しください。

第1回と第26回(最初と最後)私がお挨拶をさせて頂きまして、その時に掛けさせて頂いた曲が「ヌエベ・デ・フリオ」(7月9日)だったのですが、タンゴファンとしましては当然の記念日であることは皆様よくご存じの事ですが、実は私の老妻(現在要介護2)の誕生日と云う事で勝手に私情を入れさせて頂いたのです(ごめんなさい!!)。



数に纏わるタンゴ 雑感

(前篇)

小林 謙一 (横浜市)



タンゴを始めとしてミロンガやワルツなど、所謂ポルテナ音楽には多くの数に関する曲がある。そもそも私がタンゴに数に纏わるものがあるとの認識を持ったのは、高山先生によるところが大である。昭和28～29年当時はタンゴにもそれまでのタンゴとは違った新しい風が溢れていて、特にラジオでもタンゴの番組が流れるようになっていた。またDeccaブランドのLP盤 Argentine Nightで、Osvaldo Puglieseの演奏が流れ、当時の同好会、研究会では争って取り上げる時代でもあった。其の頃のある夜、何時ものように桜台の先生のお宅に集まってタンゴを聞かせて頂いていた時、先生が「ところでタンゴを数の順番で言ってご覧」と我々に言われた。我々とは、小野正孝さん、ルカス・荏君と私の3人。急に問題を出されて首を捻ったが、1はUnoです。2はParadosがあります。3はえ～と、4はえ～と、となかなか進まない。7はSiete Palabrasがあるな。9はNueve de julioだ。など言い合っていたものの、10までの全部を揃えることが出来なかった。私などは、当時はスペイン語の知識は皆無で、タンゴの曲名を覚えるのがやっとの状態で数の勘定も10までで、序数などはまだ意識の外だった。それでもなんとか3人は知恵を出し合って、5を除いては揃えたように記憶しているが、5については全員「解」が出てこずに、降参したところ、先生は「5はSilencioだよ」と言われた。どうしてですか？ との我々の問いに先生は「Silencioの詩を読んでご覧。5人の息子を戦場に出した母親の嘆きだろうが」と言われた。これが、私が数に関するタンゴのタイトルを認識した最初であって、未だに鮮明に頭に残っている光景である。少々こじつけではとの感があったにせよ、もっと勉強して沢山タンゴを聞かねばとの思いに駆られたものだった。

今回は雑感として、あまり数の順番には囚われずに、話を進めてゆきたい、先の話のついでに数の[5]ではLA NÚMERO CINCO (Orestes Cúfaro-Reynaldo Yiso) がある。

これは大澤 寛氏の訳詩に触れて一層心に残るところとなった感動のタンゴで、病床にあるサッカー少年が応援するチームの選手から憧れの5番のユニホームを贈られるというもの。手持ちの音源にはAlfredo Gobbi c/Jorge Maciel (G: 1951) しかないが、Macielの歌が感動的である。サッカーと言えばEL ONCE GLORIOSO (Carlos Enrique-Luis César) があって、私の不確かな記憶では、サッカーチーム“El Huracán”の栄光の11人に捧げた曲と記憶している。これも音源はEdgardo Donato c/Luis Díaz (G: 1929) しか手持ちにないがDonatoの演奏振りが鮮やかだ。

サッカー用語に関してはLA PRIMER GOAL (Alfredo Fattorini-Miguel Bonano-Horacio Pettrossi) が頭に浮かぶ。しかし、これはサッカーの用語を使いながら、実は同じゴールでも恋のゴールを意味していて憧れの恋人と初めてのキスに辿りつく難しさを歌ったもので、サッカーとは本来的に無関係なので、こんなタイトルは思い出したものの空振りとなったということ。因みにCarlos Gardelの音

源ではタイトルのgoalをgolと正規のスペイン語で表示している。(G:1933)

また序数のタンゴで頭に浮かぶのはQUINTO AÑO (Osvaldo Tarantino-Juanca Tavera) や QUINTA EDICIÓN (Sebastián Piana-Homero Manzi) で前者はOsvaldo Pugliese c/Adrián Guidaで初めて知ったが、後にRaúl GareloでのRoberto Goyenecheも聞いて、歌手それぞれの味を好ましく感じたものだ。後者はO. T. V. が取り上げているが、これは新聞の第五版と言う意味だそうだ。6番目ではSEXTO PISO (Roberto Nievas Blanco-Homero Expósito) があるが、EL ONCEを作曲したFresedoがEL SEXTOをその前に発表していた (Orq. Típ. Select=1920) のをあとで知った。6回目のインターンのダンスパーティーを記念して作曲したものだろう。9番目ではLA NOVENA (Miguel Bonano-Alfredo Bigeschi) が録音も多く、お馴染みのタンゴだが、同様宗教絡みと思われる曲EL NOVENO MANDAMIENTO (Armando Acquarone) があって、これはモーゼの十戒の九番目の戒律に触れたものではと推測している。数や序数に関する曲は後述のように沢山見受けられるが、心から感動するようなものはそう多くはない。

しかし数字の [2] ではANOCHE A LAS DOS (Raúl de los Hoyos=Roberto Cayol) やDOS AMORES (Antonio y Gerónimo Sureda) が秀逸であろう。前夜の2時に起きた刃傷騒ぎに男を庇う女心を歌った最初の曲も、2番目の彼女への愛と母親の愛の狭間にあって苦しむ男心を歌う詩は誠に切ない。男性なれば一度は覚えのあるところではないだろうか。インストルメンタルで感動したのはPARA DOS (Osvaldo Ruggiero) が最初だが、加えてチェロ奏者Enrique Lannooが師と仰ぐ二人、Osvaldo PuglieseとEduardo Roviraに捧げたA MIS DOS MAESTROSは私の心には大変印象深く残っている。その他DOS GUITAS (Juan D'Arienzo) やCOMO DOS EXTRAÑOS (Pedro Laurenz-José María Contursi) も良く知られるところだが、ワルツのUN CIELO PARA LOS DOS (Ángel Cabral-Enrique Dizeo) も小生の好みの曲である。

[3] では26曲ほどが小生のファイルにあるが、FUERON TRES AÑOS (Juan Pablo Marín) が最初に浮かび上がる。加えてÁngel Vargasの名唱が懐かしいTRES ESQUINAS (Ángel D'Agostino-Alfredo Attadía-Enrique Cadícamo) やTRES ESPERANZAS (Enrique Santos Discépolo)、またJuan Guidoの演奏でのTRES CHUPETES (Guillermo Cavazza-Reynaldo Pignataro) が、また意味は良く判らないが何となくダイスの賭け目を連想するTRES Y DOS (Aníbal Troilo) も面白い。

[4] では14曲ほどだが、面白いのは同名=異曲にCUATRO PALABRASがあって、Luis Rubinstein作曲のものとMiguel Buchinoのものとがあり、前者はMercedes Simone, Charloが、後者ではErnesto FamáがFrancisco Canaroの伴奏で、Héctor MauréがJuan D'Arienzoの伴奏で歌っている。また故石川浩司氏がCDのライナーで解説されていたVALE CUATRO (Ernesto de la Cruz) を、「このMaffiaの演奏はタイトルの4ペソの値打ちを遥かに凌いでいる」との大変機知溢れる文章に感心させられたものだ。

[5] は数が少なく前述のLA NÚMERO CINCOの他は4曲ほどだが、*1=BOLICHE DE CINCO ESQUINAS (Leopoldo Díaz Vélez), *2=CINCO DE OCTUBRE (Juan Carlos Caviello), *3=A LAS CINCO EN PUNTO, *4=DEL UNO AL CINCO (Horacio Salgán) がファイルにある。

* 1 =Armando Lacava c/Ángel Vargas, * 2 =Juan Carlos Caviello, * 3 =Armando Pontier c/Hernán Salinas, * 4 =Horacio Salgán, Nuevo Quinteto Realの録音がある。

* 1 はTRES ESQUINASと同様に古い酒場を懐かしむ内容。* 2 の10月5日がCavielloにどのようなインパクトを与えたのかは不明である。CavielloがRoberto Firpoの誕生日を祝ってDIEZ DE MAYOを作曲しているのを思い出して、同日生まれのmúsico達を調べたがCavielloとの関係がわからないのでバンザイした。* 3 はともかくとして* 4 は給与というか報酬の支払い期間を言うのだそうで、ついたち（1日）から5日までに受け取る制度だったようだ。

[6] も数は少なく4曲ほどしか見当たらない。SEIS DIAS (Bernardo Manuel Sucher)、DE SEIS A SIETE (José Canet)、TRES, SEIS, DIEZ (José Razzano-Cátulo Castillo)、SEIS HERMANOS RÁPIDOS DEDOS EN EL GATILLO (Juan Cedrón-Raúl González Tuñón) がある。複数の数字が含まれるのは、[3] にも [5] にもここでも現れるのだが、一応該当する数字があるということで、夫々に含めることとした。

[7] では9曲ほどが見られるが、Juan MaglioのSIETE PALABRASは比較的早く東芝からLPが出ていたので馴染み深い。他にはA LAS SIETE EN EL CAFÉ (Armando Baliotti-Carlos Giampe)、DE SEIS A SIETE (José Canet)、FUERON SIETE AÑOS (Roberto Rufino-Cresansio Gamana)、NO SON SIETE...SON CATORCE (Armando Baliotti-Luis Díaz)、SIETE LÁGRIMAS (Enrique Maciel-Héctor Pedro Blomberg)、SIETE LEGUAS (Teófilo Lespés-Carlos Waiss)、SIETE MUJERES (Ernesto Cardenal-Alfredo Bigeschi)、UN DOMINGO SIETE (Andrés Linetzky) などがある。この中の LEGUASは昔の距離の単位ということで、スペイン、アルゼンチン、チリ、メキシコ、パラグアイで用いられるが、国によって異なる。スペインでは5572メートルと「西和中辞典」に出ているが、タイトルの由来は不明である。

[8] ではMAÑANA A LAS OCHO (Andrés Falgás-José María Contursi)、ESTÁN SONANDO LAS OCHO (Juan Jarenza) の2つしか見当たらない。

[9] ではトップにNUEVE DE JULIO (José Luis Padula) を上げねばなるまい。歴史的な関連からすればVENTICINCO DE MAYO (5月25日) に触れない訳にはゆかないが、これにも同名=異曲があってJosé Luis Padula作曲とEduardo Arolas作曲がある。前者にはFrancisco Canaro c/Roberto Maida (G1938) が、後者にはArolasの自作自演盤 (G1913) とCuarteto del Centenarioの快演があって、この日本ビクターからのLP: RMP-5048 (S) で初めてCuarteto del Centenarioの存在を知ったのだが、Bs Asで3枚ばかり彼等のLPを見つけて求めることが出来たのは幸運だった。話を戻すとNUEVE PUNTOS (Francisco Canaro) も、ONDA NUEVE (Ástor Piazzolla) も見つけられた。

[10] ではDIEZ DE MAYOは既に触れたが、他にはDIEZ AÑOS (Cayetano Puglisi-Manuel Fernández-Pascual de Gregorio)、TRES, SEIS, DIEZ (José Razzano-Cátulo Castillo) がファイルにある。後者ではFrancisco Lomuto c/Carlos Galarce (G1945) しか手持ちには無いが、前者ではJuan D'Arienzo c/Jorge Valdez (G1958) とCanaroが当時の売れっ子歌手二人に、それも4日違いで競わ

せているのが面白いところだ。(Ada Falcón=1934.02.17, Ernesto Famá=1934.02.21)

[11] ではOsvaldo Fresedo作曲のEL ONCEは余りにも有名で録音も数多いが、MISA DE ONCE (Juan José Guichandut) はGardelの歌が素晴らしいので直ぐに好きになったタンゴ。他にはEL TREN DE LAS ONCE (Horacio Sucena)、MUÑECA DE ONCE (Ernesto “Titi” Rossi-Juan Pomati) があるが、常打ちのカフェテリアの場所をタイトルにしたCALLAO ONCE (Javier Mazzea) など興味深いタンゴもある。またchamaméにKILOMETRO 11 (T. Cocomarola-C. J. Aguer) などがある。

[12] はLAS DOCE DE LA NOCHE=vals (Mabel Wayne) があってRosita QuirogaとLidia Bordaがそれぞれ録音を残している。

[13] では1913年を意味するEL TRECE (Alberico Spátola) が良く知られているところだが、他にもCarlos Posadas作曲のそのものズバリのTRECEがJuan Maglio (G1913) であるが、もう一度聞き比べが必要だ。

[14] ではEL PENADO CATORCE (Agustín Magaldi-Pedro Noda-Carlos Pesce) がMagaldiの歌でも、歌無しでのJulio de CaroやOrquesta Típica Brunswickでも大変感動的などころを聞かせてくれる。「曲が良ければやはり演奏も良くなるもの」と故大岩祥浩先生が良く言われていたが、このタンゴではMagaldiのそっくりさんのAlberto Margalまではまだしも、EchagüeやIriarteでは、どうも雰囲気の違いすぎて小生には馴染めない。他にはCATORCE PRIMAVERA (Eduardo Conte-Julio Navarrine)、NO SON SIETE,...SON CATORCE (Armando Baliotti-Luis Díaz)、CATORCE DE DICIEMBRE (Pablo Antonio Hechin) がある。12月14日は日本では赤穂義士の討ち入りが思いつくが、彼の地ではFrancisco Canaroの命日でもある。しかし、ここではJuan D’Arienzoの誕生日を祝うD’Arienzo讃歌で、D’Arienzoのオーケスタの演奏と共にHoracio Palmaのrecitadoが大変印象的などころを聞かせる。曰く：

「ある年の12月14日、Juanが、この世にやって来た。広い心とセンチメンタルなviolínを携えて。貴方の音楽はタンゴに輝きを与え、この町のアイドルになった貴方を、人はリズムの王様と呼ぶ」。

[15] ではAlberico Spátolaが同じように1915年QUINCEを作曲しているし、Agustín Minotti作曲のワルツにはVALS DE LOS QUINCE AÑOSが、またLuciano LeocataのY...YO TENÍA QUINCE AÑOSというタンゴもある。

[16]、[17]、[18] では夫々1曲ずつで、EL 16 (Alberico Spátola)、LA CHICA DEL 17 =pasodoble (Juan Durán)、QUIEN TUVIERA 18 AÑOS (Guillermo Barbieri) がファイルにある。

[19] はファイルにないので、[20] に飛ぼうと思ったが、ここで [0] にも [1] にも及んでいないのに気がついたので戻ることにする。

[0] ではCERO A CERO (Roberto Firpo-Juan Caruso)、CERO AL AS (Arturo Gallucci-

Francisco Bohigas)、FORTÍN CERO=milonga (Ernesto Baffa-José Colángelo)、BUENOS AIRES HORA CERO (Ástor Piazzolla)、CORRIENTES BAJO CERO (Aldo Queirolo-Roberto Chanel) 位しか見当たらない。

[1] では、冒頭に触れたように、高山先生の前で、UNOが在るといったのだが、Mores-Discépoloのこの大作は数を表すのではなく、「人は」として捉えているので、ここでの数のジャンルの一つには取り上げない。

また「1」を含む曲はざっと見ただけで軽く250曲を超え、とても其の全部に触れることは出来ないし、徒らに紙面を費やすだけになるので、UN-UNO-UNA-ÚNICOを含むタイトルの順に、一応知られているところなどを列挙することに留めたいのでご了承頂きたい。

UN COPETÍN (Juan Maglio)

instrumental=Juan Maglio (1912,1927), Juan Polito, Julio de Caro, Rafael Rossi.

Con canto=Juan Maglio/Carlos Viván (1930), Ángel D'Agostino/Ángel Vargas (1941) Rubén Cané (1952), Enrique Rodríguez/Roberto Flores と録音は多いほうである。

UN LAMENTO (Graciano de Leone) instrumental=Carlos di Sarli,

Los Virtuosos, Roberto Firpo cuarteto, Leopoldo Federico, Miguel Villasboas

con canto=Ángel D'Agostino/Á. Vargas, Osvaldo Pugliese/J. Maciel と多くがとりあげている。

UN MOMENTO=vals (Héctor Stamponi)

con canto=Aníbal Troilo/Raúl Berón, Carlos Buono/Luis

Cardei, Horacio Salgán/Roberto Goyeneche, Pascual Mamore/María Viviana, Lágrima Ríos con guitarras

instrumental=Leopoldo Federico-Hugo Rivas, Omar Torres と歌われているほうが多い。

UN PLACER=vals (Andrés Alietti-Vicente Romero)

instrumental=Aníbal Troilo, Juan D'Arienzo, Orq. típ. Los Provincianos, Quinteto Víctor, Miguel Villasboas, Río de la Plata, Sexteto Mayor, Juan Cambareri, Cuarteto Punto y Taco, Cuarteto Palais de Glace, Felipe Antonio, Troilo-Grela, Juanjo Domínguez-Julio Pane, Osvaldo Montes-Ciro Pérez, O. Montes-Aníbal Arias.

Con canto=Carlos Lafuente con O. T. V., Francisco Fiorentino y Ricardo Ruiz con José Basso, Floreal Ruiz y Alfredo Belusi con José Basso. と圧倒的にinstrumentalが多いが、ギター絡みの演奏が目立つ。

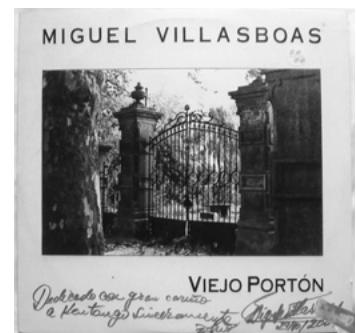
UN TANGO PARA CHAPLIN (Alfredo Gobbi-Fernando Salas)

Alfredo Gobbi/Alfredo del Río, Luis Stazo/Graciela Susana

UN TANGO PARA MI VIEJA (Enrique Alessio-Reynaldo Yiso)

Alberto Echagüe con Juan D'Arienzo, con Jorge Dragone, Héctor Soler con Joaquín do

Reyesと、この2曲は録音は少ないが、人に関するタンゴであることと、タイトルが好ましいので...



UN TROPEZÓN (Raúl de los Hoyos-Luis Bayon Herrera)

con canto=Carlos Gardel, Armando Moreno con Enrique Rodríguez, Sofía Bozán con Francisco Pracánico, Julio Sosa con Leopoldo Federico, Alfredo Belusi con Osvaldo Pugliese y Osvaldo Requena, Ernesto Restano con Puglia-Pedrosa.

instrumental=Francisco Canaro, Roberto Firpo, Juan Maglio, Osvaldo Fresedo, Héctor Varela, Juan Cambareri.

大作だけあって、1927年発表すぐに、Carlos Gardelが、そしてOdeónを代表する五大楽団が録音を競ったが、何故かFrancisco Lomutoは未録音である。歌良し、演奏良しだが、何と言ってもタイトルが素晴らしい。人生には沢山の躓きがあるが、乗り越えてきた躓きの如何に多いことか。

UNA CANCIÓN (Aníbal Troilo-Cátulo Castillo)

con canto=Héctor Mauré, Raúl Iriarte, Agustín Irusta, Roberto Rufino, Roberto Goyeneche, Jorge Casal, Horacio Deval, Roberto Moral, Mario Lagos, Mario Alonso, Alfredo Belusi, Jorge Maciel, Nelly Vázquez, Rosanna Falasca, Susana Rinaldi

instrumental=André, Cuarteto Aníbal Troilo (Dir : José Colángelo)

圧倒的に歌われる録音が多いのは、メロディーもさることながら、Castilloの詩の力によるところが大だからだろう。何時までも歌い継がれる名曲の一つ。

UNA CARTA PARA ITALIA (Santos Lipésker-Reynaldo Yiso)

Francini-Pontier c/Roberto Rufino

私にとっては、戦後いち早く日本Victorの青盤で紹介された印象深いレコード。後にÓscar Alonso のラジオ放送からの収録と思われる盤を入手して懐かしく思い出した。

UNA FIFA (Ángel Villoldo-Antonio Polito)

Juan Maglio (1913), Quinteto Criollo Tano Genaro, Adolfo Pérez “Pocholo”, Armando Pontier, Carlos di Sarli, José Basso, Miguel Caló, Los de Antaño, Los Señores del Tango.

馬、特に競馬についてのタンゴは数多いが、それこそ本命の古典の大作だろう。

UNA LÁGRIMA TUYA (Mariano Mores-Homero Manzi)

con canto=Aníbal Troilo/Edmundo Rivero, /Jorge Casal. Bachicha/José Durante, Francisco Canaro/Mario Alonso, Juan Canaro/Héctor Insúa, Mariano Mores/Enrique Lucero, José Basso/Francisco Fiorentino y Ricardo Ruiz, Pascual Mamone/María Viviana y Luis Linares, Los Cinco Latinos con canto, Víctor Buchino o Martín Darré/Susy Leiva.

instrumental=Cristóbal Herrero, Banda de la Fuerza Aérea Argentina.

これも随分流行したタンゴで、歌謡タンゴだけあって歌ものが多い。Juan Canaro/Héctor Insúaは1954年の初来日当日の日本劇場での思い出深い録音。アルゼンチン空軍軍楽隊も珍しい。

UNA NOCHE DE GARUFA (Eduardo Arolas)

Eduardo Arolas (1913), Vicente Greco Quinteto (1914), Adolfo Pérez “Pocholo”, Carlos di Sarli, Ciriaco Ortiz sexteto, Florindo Sassone, Juan Maglio, Ricardo Luis Brignollo, Ricardo Tanturi, Los Astros del Tango, Miguel Villasboas, Los Tubatango,



Típica Armenonville. Quinteto Pirincho, José Libertella quinteto guardia vieja.

Arolasの処女作と言われるだけあって格調高い演奏のオンパレード。

UNA NOCHE EN LA MILONGA (Guillermo del Ciancio)

手持ちにはFrancisco Canaro c/Ada FalcónとRoberto Firpo y su orq. típ. の2種類しかないが、何れも甲乙つけ難い名演、名唱であり、聞くたびに溜息をつくタンゴである。

UNA VEZ (Carlos Marcucci-Lito Bayardo)

O. T. V. c/Ortega del Cerro

UNA VEZ (Osvaldo Pugliese-Cátulo Castillo)

Osvaldo Pugliese c/Alberto Morán, Armando Cupo c/Alberto Morán, Alberto di Paulo c/Nelly Vázquez, Fulvio Salamanca c/Luis Roca.

同名=異曲で、後者の方がお馴染みかも知れない。しかしO. T. V. も良い味ですぞ。

UNO Y UNO (Eduardo Pereyra-J. A. Ferreiro)

Carlos Gardel

UNO Y UNO (Julio Pollero-Lorenzo Juan Traverso)

Francisco Canaro c/Charlo, Armando Pontier c/Raúl Berón, José Canet c/Gloria Díaz, Carlos Suárez c/Juan Carlos Godoy.

これも同名=異曲だが、タイトルの意味は競馬用語で、単・複を夫々一枚ずつ購入する買い方だそう。高場将美氏の「タンゴのスペイン語辞典」に掲載されていて、貴重な、有り難い資料の宝庫である。

BAJO UN CIELO DE ESTRELLAS=vals (Enrique Francini-Héctor Stamponi-José María Contursi)

Miguel Caló c/Alberto Podestá, Aníbal Troilo c/Francisco Fiorentino, Luis Borda c/Luis Cardei, Vale Tango.

昨年12月9日Alberto Podestáが亡くなった。このワルツは彼の処女録音(1941.03.12)であった。冥福を祈りつつ取り上げた次第である。

BALADA PARA UN LOCO =balada (Ástor Piazzolla-Horacio Ferrer)

Amelita Baltar con Antonio Agri, Óscar Cardozo Ocampo, Aldo Saralegui etc

Roberto Goyeneche con Á. Piazzolla, Virginia Luque con Ómar Valente, Rosanna Falasca con Lito Escarso, María José Mentana con Neo Tango, Graciela Susana con Orq. típ. Porteña, Ranko Fujisawa con Orlando Trípodí

instrumental=Osvaldo Pugliese, Ernesto Baffa cuarteto, Juanjo Domínguez, André

名手の歌の数々を聞くと、かねて思うことだが、タンゴは日本人には歌うのは難しい（嵐子さんを除く）との思いが強い。タンゴを愛する気持ちに差はないと思うのだが、やはり食べ物の差か？ 私の偏見か？

LA LUZ DE UN FÓSFORO (Alberto Suárez Villanueva-Enrique Cadícamo)

Aníbal Troilo c/Alberto Marino, Horacio Salgán c/Edmundo Rivero, Orq. Típ. Porteña c/Roberto Goyeneche, Osvaldo Requena c/Floreal Ruiz, Jorge Valdez, Roberto Pansera c/Néstor Fabián, Ómar Torres c/Raúl Gallardo.

二人の恋は束の間のマッチの炎だった。僅かしか続かなかった恋は、星の瞬きのよう... と昔

の切ない思い出を振りかえるCadicamoの詩が美しい。心を揺するタンゴだ。

MAÑANA ZARPA UN BARCO (Lucio Demare-Homaro Manzi)

Lucio Demare c/Juan Carlos Miranda, Horacio Quintana, Carlos di Sarli c/Roberto Rufino, Mario Demarco c/Jorge Sobral, Osvaldo Requena c/Floreal Ruiz, Juan Carlos Cirigliano c/Raúl Lavié, Alberto Bianco con orquesta.

Demare-ManziのコンビではMalena (1942) が突出して取り上げられるが、この頃のこの二人は誠に素晴らしい曲を世に問うている。Negra María (1941), Mañana zarpa un barco (1942), Tal vez será su voz (1943), Solamente ella (1944) など、息の合ったコンビの力が見てとれる。

SOY UN ARLEQUÍN (Enrique Santos Discépolo)

con canto=Ignacio Corsini, Carlos Dante, Francisco Fiorentino, Charlo, Roberto Goyeneche, Azucena Maizani, Ada Falcón, Tania, Lita Morales, Virginia Luque

instrumental=Carlos di Sarli, Francisco Canaro

母以外は女性を認めなかったと言われる、如何にも鬼才Discépoloらしいタンゴ。雌伏を重ねて前年に作曲したEsta noche me emborrachoが空前のヒットとなり、Discépoloは一躍タンゴ界の寵児となった。世に媚びず、冷徹に世間を直視し、己の道を真っ直ぐに歩いたDiscépoloのこのタンゴは作曲同年(1929年)一斉にCorsini, Fiorentino, Charlo, Maizani, Falcón などに挙って録音された。

CONTAME UNA HISTORIA (Eladia Blázquez-Mario Isquinandi)

Osvaldo Pugliese c/Adrián Guida, Hernán Salinas, Carlos García c/Rubén Juárez, Jorge Dragone c/Elizabeth Figuerosa.

女性らしい潤いを持ったタンゴ。最初にGuidaの歌を聞いて惹かれるものがあった。

MADRE HAY UNA SOLA (Agustín Bardi-J. De Vega)

con canto=Ángel D'Agostino c/Ángel Vargas, Florindo Sassone c/Jorge Casal, Francisco Canaro c/Carlos Gardel (アフター・レコーディング)、Charlo, Ada Falcón, Roberto Florio.

instrumental=Los Astros del Tango.

昨今の母親像はかなり変わってきたが、少なくとも我々までの時代においては母は無償の愛情を与えてくれる存在であった。崇高な母親の愛情に包まれ、育まれてきた子供なら、長じても虐待とは無縁になるはずである。

POR UNA CABEZA (Carlos Gardel-Alfredo le Pera)

con canto=Carlos Gardel, Enrique Dumas, Argentino Ledesma, Rubén Juárez, Guillermo Galvé, Alfredo Fernández, Daniel Cortés, Virginia Luque.

instrumental=Leopoldo Federico, Pablo Hager, Las Rositas Trío, Vale Tango, Conjunto Punta Popa.

タイトルは競馬用語の「首の差」だが、何時も首の差で女性を失う男の悲劇を歌っているようにも思える。とにかくアルゼンチンではいまだに大変流行っているタンゴで、タンゲリアでは定番の登場曲の一つではないだろうか。何処に行ってもこればかり聞かされるので嫌いになったというのは同行のご夫人の言。

POR UNA MUJER (Enrique Maciel-Enrique Maroni)

Héctor Mauré, Carlos Almada.

POR UNA MUJER (Enrique Rodríguez-Enrique Cadícamo)

Enrique Rodríguez c/Armando Moreno

POR UNA MUJER (Enrique Mario Francini-Carlos Bahr)

Francini-Pontier c/Julio Sosa

POR UNA MUJER (Juan Rodríguez)

Francisco Canaro c/Charlo

POR UNA MUJER (Pedro Polito)

Celia Gámez

同名=異曲が珍しく五つも数える一番多いタイトルのようだ。

QUIERO VERTE UNA VEZ MÁS (Mario Canaro-José María Contrusi)

con canto=Héctor Mauré, Jorge Ortiz, Fernando Díaz, Héctor Darío, Alberto Morán, Luis Scalón, Ernesto Rondo, Siro San Ramón, Dora Davis, Libertad Lamarque

instrumental= Francisco Canaro, Adolfo Berón

最初これに出会ったときは、何と女々しいタンゴであることよ。とあまり共感出来ないところがあったが、年を重ねるにつれ、またラテン系の男の生き様などに触れるにつれ、それ程の違和感がなくなった。歌手の顔ぶれを見てもやはりこれは男の歌である。

SERÁ UNA NOCHE (José Tinelli-Manuel Ferradás Campos)

Mercedes Simone, Susy Leiva, Lidia Borda

Óscar Alonso, Luis Cardei, Carlos Almada, Roberto Maida, Aldo Calderón, Óscar Ferrari, Jorge Maciel, Roberto Goyeneche.

Mercedes Simoneの歌が余りにも切なく哀愁に満ちて耳に残っていたので、他に歌う歌手も当然女性が多いだろうと思い込んでいた。今回ファイルを開いてみて愕然とした。第一印象が人に影響する強さが如何に強いものが、心を左右するかが、良く判った一例であって大いに反省させられた。

SÓLO SE QUIERE UNA VEZ (Carlos V. G. Flores-Claudio Frollo)

Aníbal Troilo c/Floreal Ruiz, Ástor Piazzolla c/Aldo Campoamor, Jorge Dragone c/Héctor Mauré, Baffa-Berlingieri c/Roberto Rufino, Carlos Buono c/Raúl Lavié, Carlos Galván c/Luis Cardei, Daniel Berardi c/Horacio Molina.

私の手持ちでは全て男性歌手のみの録音である。Carlos Floresは私の大好きな作曲家であり、其の作品には優れものが多い。歌ものではLa Cautiva, Melenita de oro, Andate con la otra, A la luz del candilが、歌無しでもLa traición, Llorando en el andénなど、思わず頬が緩む嬉しさがある。

EL ÚNICO LUNAR (Juan Carlos Cobián)

SENTIDO ÚNICO (Ástor Piazzolla)

Únicoを数の概念に入れてよいものか迷ったが、それも「有りか」と思って追記した。

以上、駆け足で、かつ独断と偏見で取り上げてきたが、これからは [20] 以上のタイトルを思いっくままに取り上げてゆく。

(Tangueando誌 第39号につづく)

大貫孝三氏の死を悼む

泉谷 隆男 (横浜市)



本年1月に宇都宮在住で元NTA理事の大貫孝三氏が亡くなり、その追悼文を依頼された。本来なら大貫さん（以後こう呼ばせて頂く）の永きにわたるタンゴ界との関わり、特に地方でのタンゴ普及や、NTAへの思い、並びに理事としての活動、ダンスの腕前などに触れるべきだろうが、私はそのあたりのことに通じていないので、個人的な思い出が中心の単なる交遊録となることをお断りしておく。

大貫さんに初めて会ったのは、1986年7月、その年の水曜会のタンゴツアーの顔見世会だった。湯沢さんと中西環江さんが首都圏に住むツアー参加者を集めて顔見知りにし、スケジュールや注意事項を説明する目的の集まりだった。私を含めてほとんどの人がアルゼンチン旅行は初めての体験だったから大勢集まった。口数が少ない参加者の中で大貫さんだけが能弁で、中西さんと旧知の間柄でタンゴ界に通じている様子が窺えた。

水曜会ツアーでは、或る日バンドネオン製作者のマリアーニさん宅の庭でアサード・パーティーがあった。ロベルト・ルフィーノ、カトゥロ・カスティージョ夫人などのタンゴ関係者も出席していた。近所の人たちも来ていて、その中の17歳の少年に大貫さんが話しかけ傍に居た私が通訳をやらされた。大貫さんは初対面の人に言葉巧みに話しかけ好印象を与える人であるのに対して、口数が少なくコワオモテの私は損をする。帰国後、彼から大貫さんと私に手紙が来て文通が始まり、大貫さんへの手紙の翻訳も私が引き受けた。その中の一通で「Kozo（大貫さん）は初めて会ったのに昔から識っていた人のように思えるが、Ángel（私）からはそんな感じが伝わってこない」と書いてあった。それを私が訳す羽目になった・・・とほほ。

この1986年のツアーがきっかけとなって、参加者の中の何人かで（大貫さんの他に現在NTA役員宮本さん、会員の森さん、元会員の足立さん、溝口さんなど）タンゴ交遊仲間が出来て、大貫さんはいわば長老だった。そのグループが、バルガス会、ノチェーロ・ソイの会の原点となった。2012年にバルガス会設立20周年記念として宮本さんの発案で究極の10曲選という企画があった。大貫さんの究極の10曲は下記の通りだった。

1. El adiós Orq. Edgardo Donato 2. Sur Orq. Aníbal Troilo canta : R.Goyeneche
3. Leyenda rea Orq. Juan Guido 4. Mano a mano Orq. Francisco Lomuto
5. Loca Orq. Juan D'Arienzo
6. ¿Se lustra, señor? canta : Ángel Vargas con Orq. E. Delpiano
7. Recuerdo Orq. Osvaldo Pugliese 8. Irupé Orq. Roberto Firpo
9. Tristes horas Orq. Francisco Canaro 10. Adiós Argentina Orq. Francisco Canaro

遡って1991年にも棺桶に入れる20曲選というのをやっているが、その時の大貫さんの選曲とは違っている点がある。DonatoのEl adiósは不動のトップ曲だが、好きだったRodolfo BiagiのEl recodo、Adolfo CarabelliのMentiraが外れている。また大貫さんの通称Eduardoの元になっているArolasの曲も1曲も入っていないのは意外である。Ángel Vargasについては、1991年ではOTV伴

奏のAdiós Buenos Airesを選んでいるが、2012年は¿Se lustra, señor? に替わっている。その理由は、拙書「バルガス歌詞集」でこの曲の歌詞を読んで江戸の下町の人情漸に通じるものを感じたからだ、と本人から説明があった。長いタンゴ人生の時々で、好みや関心の対象が変わってくるのは、誰にでもあることだろう。

大貫さんは、宇都宮の材木を商う旧家の出で森林組合の理事長の要職につき、その一方で宇都宮タンゴ同好会を主宰し、社交ダンスの教師や審査員で多忙を極めていた。マイカーのリアウインドウには、La Vida Es Un Tangoと書いた紙が貼ってあった。私は宇都宮の子会社に1年半ほど出向していた時期があったので何回かお宅を訪ねて品の良い奥様にも会っている。結婚して最初に驚いたのは毎日出勤前にどんなに慌ただしくても必ずタンゴを何曲か聴いてから出かけることだったというから、若い頃から相当なロコだったようだ。レコードもさることながら、来日したタンゴアーティストのサイン入り色紙がご自慢のコレクションだった。宇都宮の行きつけの飲み屋に連れていってもらい痛飲したことが再々あったが、その中の何軒かには自慢の色紙が壁に有って、サインをもらった時のことを得意げに同席の客と私に話していた。

仕事でよく上京していたが、常時タンゴがある店ということで、四谷のDALIに立ち寄ることが多かった。宇都宮にはタンゴの店が無かったが、私が赴任中に中心街から外れた場所にLa Cumparsitaという大貫さんも知らない店を見つけた。ドアにステンドグラス風のバラの絵と共に店名が横文字で入っていて、これはタンゴの店だと意気込んでNTA会員宇都宮さんと3人で出かけたが、結果はがっかりだった。店のママが言うには、客の一人が「店名は、バラという意味のLa Cumparsita にすると良い」と言ったのでこんなドアにしたの……。タンゴには全く関係なかった笑い話です。

大貫さんとは3回一緒にアルゼンチンへ行った。大貫さんがアルゼンチンのフォルクローレにも興味を持っていた時期の2回目の旅行では、グループ本隊とは別行動でサルタへフォルクローレを聴きに行ったことが思い出される。タンゴは本妻、フォルクローレは二号だと称していた。その後タンゴだけに戻った時には、真面目な顔をして浮気はやめたと行って、何も知らない人を驚かしていた。3回目の旅行ではソリストス・デ・ダリエソの歌手Gutiérrezとの会話で通訳をやらされた。またチャカリータ墓地で散策する時間があり、女流バンドネオン奏者 Paquita Bernardoの単独の墓を見つけたと得意げに言った。私もたまたま、作詞家Celedonio Esteban Floresの単独の墓を見つけていたので対抗できた。大貫さんは毎回これが最後だと言いながら、アルゼンチンを8回（私と同じ）訪れている。

大貫さんはNTA前会長の島崎さんと「中南米音楽」社の故中西さんをタンゴ界での兄貴分だと言って尊敬していた。横浜ポルテニヤ音楽同好会に島崎さんを初めてゲストとして招いたのも、確か、私が大貫さんを介してお願いしたと記憶している。昨年秋にその島崎さんから大貫さんが入院していて相当悪いと聞いて、お見舞いに行った。体力が無くなり、話をするのがやっとならであった。それでも時々イヤホーンでタンゴを聴いているとのことで、最後にタンゴの話ができて良かったと思っている。

葬儀には前日に私の持病が出て、参列が叶わなかったのが心残りであるが、奥様の配慮で前述の10曲選の曲がCDで流されたと聞いている。バルガス会での宮本さんの企画力が役に立ったということだ。宇都宮赴任中に何かとお世話になり、タンゴ界の事情について色々教えてもらった大先輩には心から感謝している。最後にドナートのエル・アディオスを聴いてタンゴ人生を全うされた大貫さんが、天国で「早くお前もこっちへ来い」と言っているかも知れないが、もう少し待ってもらうことにする。

世界にタンゴを拡めた稀代の策士 ルイス・スターソを悼む

山本 幸洋

ロックが好きで、ジャズを知り、ファンクやR&Bにはまっていた1987年、タンゴ・アルゼンチーノが話題になっていた。同じ頃、ブライアン・フェリーという英ロック・シンガーの『ベイト・ノワールBête Noire』というアルバムが好きだったのだが、このフランス語タイトル・トラックにタンゴの雰囲気があった。何年か後になって判ったのだが、雰囲気を出していたのはルイス・スターソとホセ・リベルテラのバンドネオンそれにマリオ・アブラモビッチのヴァイオリンだった。タンゴ・アルゼンチーノは83年にパリで初演だから、フランス好きなフェリーのこと、きっとショウを観てアルバムに取り入れたに違いない、アール・ヌーボー～アール・デコ時代のフランス～パリの香りとして。だから、結果的に最初に好きになったタンゴ人のひとりがルイス・スターソであった。編集部はそんなこととは知らずに私にスターソの追悼文を依頼してきたのだから縁とは全く異なるもの、である。

ルイス・スターソは1930年ブエノス生まれ。48年にプロとなり、翌49年にルシオ・デマレー、アルヘンティーノ・ガルバン両楽団のバンドネオン奏者となる。ガルバン楽団で、終生の師として敬うガルバン（そのことをガルバン本人は知らなかったらしいが）、盟友となるオルランド・トリポディと出会う。アルベルト・マリーノ、アルベルト・モラン、アンヘル・バルガスらの伴奏楽団を経て、59年にアルフレード・デ・アンジェリス楽団の第一バンドネオン奏者となり、並行してロベルト・ゴジェネチェの伴奏も行った。ここまでは、いわば修行の身。オスマール・マデルナの後任としてミゲール・カロー楽団のピアニストとなっていたトリポディと双頭で、65年にロス・7（シエテ）・デル・タンゴを結成する。

シエテは、ピアソラ型キンテート+歌手二人という編成で70年代初頭まで活動した。快適なテンポでありつつ奏者の個性を活かした魅せる編曲、特にエクトル・オルテガのエレキ・ギターに特長があり、小編成なのに歌もフィーチャーし、歌曲であろうとなかろうと豊かな歌心がある、そんなコンフントである。若き日のフェルナンド・スアーレス・パスのプレイも聴きものだ。トリポディとはセンスがあっていたようで、シエテ前後に「エントレ・ドス」「アフエクトウオサメンテ」を共作し、特にモダンな名曲「エントレ・ドス」はシエテにカロー楽団、セステート・マジョールで取り上げられている。なお入手が比較的困難なシエテの録音は、EMI/Euro EU19006で20曲がCD化（2006年）されている。

セステート・マジョールは73年結成、ホセ・リベルテラとの双頭楽団で、シエテとは異なりインスト専門である。陰影に富みハイブrouなセステート・タンゴに対し、魅せるために演奏技術を駆使するセステート・マジョールという対比だ。タンゴなんて知らなくてもマジョールの演奏を聴けばタンゴって良い！と思わせるのだから、外国で人気が出るのも解る。だから、マジョールがタンゴ・アルヘンティーノやタンゴ・パッションの母体となったのは当然であるし、80～90年代はピアソラとともに大使級の働きをした音楽家といえる。その根底にあるのは、ブエノスへの、タンゴへの敬愛であろう。フリオ・デ・カロをシーンに登場させた75年の企画盤『Los 14 de Julio De Caro』や、パ

りに開店したブエノス風のタンゲリーアにあやかった 83年作『De Café de los Angelitos a Trottoirs de Buenos Aires』など、こういう発想が素敵だと思う。芸術家肌のトリポディと活力の塊リベルテラ、盟友二人の個性を活かして、世界にタンゴを拡めた稀代の策士がスターソであった。

ルイス・スターソ関連のおもなアルバム (LPを中心に)



London LLS-14507



同 LLS-14510



同 LLS-14515



Sudisco SD15010



東芝 EMI EOP-81041



EMI Odeon 6812



同 6324



東芝 EMIEOS-80998



EMI 6946



同 6294



同 6525 CBS 20.552 (1984)



ビクター音産 VIP-7206 (1976)



ロス・シエテ・デル・タンゴ～セステート・マジヨールのメンバー変遷

Los 7 de Tango	bandoneon	piano	violin	bajo	guitarra	voz	voz
London 14507 1965	Luis Stazo	Orlando Tripodi	Fernando Suarez Paz	Mario Monteleone	Hector Ortega	Olga Delgrossi	Lalo Martel
London 14510 1966	↓	↓	↓	↓	↓	Gloria Belez	↓
London 14509 1967	↓	↓	↓	↓	↓	Beatriz Beban	Roberto Echagüe
SuDisco 15010 1969	↓	↓	Osvaldo Rodriguez	?	↓	Beatriz Queiro	↓
			Tomas Giannini(bn)				
Sexteto Mayor	bandoneon	bandoneon	violin	violin	bajo	piano	
EMI6735 (EOP-81041) 1973	Luis Stazo	Jose Libertella	Fernando Suarez Paz	Reynaldo Nichello	Omar Murtagh	Armando Cupo	
EMI 6812 1975	↓	↓	Mario Abramovich	Mauricio Mise	↓	↓	
EMI 6324 1976	↓	↓	↓	↓	Kicho Diaz	Juan Mazzadi	
EMI 6533 (EOS-80998) 1977	↓	↓	↓	↓	↓	↓	
EMI 6946 1979	↓	↓	↓	↓	↓	↓	
EMI 6294 1981	↓	↓	↓	↓	↓	Oscar Palermo	
EMI 6525 1983	↓	↓	↓	Eduardo Walczak	↓	↓	

(パレルモ～ワルサーク入団まで)

モニカ・ランデール



ルイス・スターソ

エルネスト・バッファ追悼

西村 秀人

エルネスト・バッファが4月11日に亡くなった。2月3日に歌手アルバ・ソリス、2月12日に歌手ファン・カルロス・ゴドイ、3月15日にバンドネオン奏者ルイス・スタソ、4月13日にはピアノ奏者・作曲家マリアーノ・モーレス、5月1日にはバンドネオン奏者ファン・カルロス・カビエージョが亡くなっており、今年はやたらと訃報が多い。

エルネスト・バッファが残した音源、特に自己の四重奏団結成（1972年）以降については、本誌の連載「現代タンゴ群像（1955～1990）」の第1回で取りあげた。録音の詳細についてはぜひバックナンバーをご参照いただければと思う。

筆者が最初にエルネスト・バッファの音楽を聞いたのは、たぶんポリドールの日本盤LP「ブエノスアイレスの心情(原題“A nivel porteño”）」だったと思う。タンゴを聞き始めて間もなかった私には、バイオリンなしの四重奏はややサウンド的に地味であり、「ラ・クンパルシータ」は入っているものの、半数が自作という内容も地味に思えたようで、あまりはっきりした印象は残らなかった。しかし1987年に初めてブエノスアイレスを訪れて以来、常に彼の姿は「エル・ビエホ・アルマセン」にあり、いつでも「間違いない」ブエノスアイレスの音を聞かせてくれた。その時はたいがいウバルド・デ・リオ（ギター）、息子のガブリエル・デ・リオ（エレキベース）とのトリオで、実にリラックスした雰囲気、歌手の伴奏もさらっとこなしていた。

ほどなく（たしか1995年）最初で最後の来日を果たし、志賀清とオルケスタ・ティピカ東京の東京公演に単身ゲスト参加していつものレパトリーを披露した。バッファは家族の都合で長期に家を空けられなかったそうで、ほとんど海外公演をしなかった。そういう意味でバッファが日本に来たのはかなり奇跡的だったと思う。

その後場所を変え、久しぶりに再会した「カーニョ・カトルセ」に出演しており、当時はカルロス・ブオーノ率いるハウスバンドにゲストが次々加わる形のショーだったが、そこにはオスバルド・ベリンジェリも出演しており、バッファのパートの最後でベリンジェリが加わって、往年のバッファ＝ベリンジェリの再現で1曲「B.B.」を演奏、そのままバッファが抜けてベリンジェリのパートになる、という演出はなかなか素晴らしかった。結局この復活したカーニョ・カトルセは数年しかもたなかったが。

1953年にレオポルド・フェデリコの独立によってオラシオ・サルガン楽団のトップ・バンドネオンとなって一躍その存在を知られるようになり（当時のあだ名は「タンゴ界のカーク・ダグラス」）、サルガン楽団解散後はアニバル・トロイロ楽団へ移籍、折りしもトロイロの体調不良が目立つようになった時期で、第2バンドネオンのアルベルト・ガルシアがコロンビアに行ってしまうからは、バッファがトロイロの代わりをつとめることも少なくなかった。1968年、トロイロ楽団の同僚オスバルド・ベリンジェリ（ピアノ）と組んで、トリオとオルケスタで活動を開始、トロイロ楽団に籍を置い



たままでもトロイロは何も言わなかったが、トロイロの奥さんシータに最後通告を受けて2人とも退団。バッファ=ベリンジェリ名義のトリオやオルケスタのアルバムの他、ロベルト・ゴジェネチェやロベルト・ルフィーノの伴奏もつとめた（オルケスタ・ティピカ・ポルテーニャ名義にしたものもあった）。結局1971年で2人はたもとを分かち、バッファは以前レコーディング企画で「クアルテート2x4」として共演したこともあるウバルド・デ・リオ（ギター）、ベリンジェリのあとにトロイロ楽団に入ったホセ・コランジェロ（ピアノ）、エンリケ・フランチャーニ楽団の酒豪としても知られたラファエル・デル・バーニョ（コントラバス）の4名でクアルテートを結成する。以後随時オマール・バレンテ（ピアノ）、ロベルト・パンセラ（ピアノ）、ベリンジェリ（ピアノ）、キチョ・ディアス（コントラバス）、ドミンゴ・ディアニ（コントラバス）などデ・リオ以外のメンバーを替えながら、1990年代まで活動を続けた。

前回の記事執筆後に出たアルバムは2012年のMelopea CDMPV1230 “Pa’que aprenda el caprichoso”で、ロマン・ベルガニ（ギター）、ファン・アサル（ギター）、ホアキン・アルタベ（ギタロン）という3人の若手をバックにすでに弾きなれた名曲を中心に演奏している。全11曲中7曲は2010年の録音で、2012年に4曲を録音し追加して発表したようだ。全曲目を紹介しておく、

①パブロ ②赤・水色・白に捧ぐ ③バンドネオンの嘆き ④気まぐれ屋が学べるように ⑤踊り子（ダンサリン） ⑥チケ ⑦ラ・タブラーダ ⑧セロ砦 ⑨ラ・チョコカーダ ⑩ベ・ベ (B.B.) ⑪レスポンソ

今のところ、ラスト・レコーディングとなったのは2014年3月録音のセレクシオン・ナシオナル・デ・タンゴのトロイロ曲集“Troilo 100 años”に収録された「チケ」でのゲスト演奏ということになるだろう。

バッファの魅力はトロイロから受け継いだタンゴのエッセンスと、持ち前の明るさの絶妙なバランスにあるのではないだろうか。終盤に左右の手で同時にたくみに変奏を奏でる「不良仲間（マラ・フンタ）」も素晴らしいが、毎夜のようにタンゲリーア「ビエホ・アルマセン」で演奏していた、大衆演芸さながらのお決まり有名曲メドレー（さらば草原よ～ウノ～カミニート～ガウチョの嘆き～軍歌の響き～バンドネオンの嘆き）やカナロ作「ラ・タブラーダ」の楽しさが一番バッファの音楽の本質をよく表しているように思える。

私が一番よく聞いているバッファの録音は、3枚のアルバムに分散しているバッファ=ベリンジェリ=カバルコス・トリオの録音を1枚にまとめた自製のCDRだ。今もってアルバム1枚分しかCD化されていないのが残念だが、プグリエーセ・スタイルから離れた「N. N. (エネ・エネ)」とか、「クリオージョの誇り」「愛しき故郷」「ラ・プニャラーダ」など自由闊達なベリンジェリと、存在感たっぷりのバッファ、鮮やかな技巧を利かせるカバルコスという対比が素晴らしいバランス。この後のフェデリコ=ベリンジェリ・トリオとは同じ曲でも似て非なるところが実に興味深い。

その後のバッファ・クアルテートの若干金太郎飴的なサウンドも、リズムの良さにいつも楽しく聞いている。中でもポリドールでの2枚目にあたる“Bienvenido bandoneón” (1973年)は「パブロ」「パテティコ」「チケ」「ラ・カチーラ」「ラ・ジュンバ」といった最高のレパートリーを揃えていて、長年の愛聴盤となっている（これまたCD化されていないのだが）。

もはやオルケスタの活動場所が限られ、タンゲリーアさえ週末だけハウスバンドでやっているようなご時勢、バッファのような演奏家はもうあらわれようもないと思う。そうわかっている、どこのタンゲリーアにもバッファの姿がないのかと思うと、それはそれで寂しい。

マリアーノ・モーレス追悼

吉村 俊司（東京都杉並区）

私がマリアーノ・モーレスの名前を初めて意識したのは、まだタンゴを聴き始めて間もないころだった。家にあったオムニバスLP『これがタンゴだ！（第3集）』に収録されたモーレスの演奏による「アディオス・パンパ・ミア」の解説（高山正彦氏）の

ムシカ・ポプラールとしてのタンゴの進むべき方途について、ピアソラ以上にラディカルとも言える独自の立場を取るモーレスの見解を端的に示す演奏として、十分傾聴に値するでありましょう。という一文が非常に印象的だったのだ。もっともその時点では、そもそもピアソラとは何者なのかすらわかっておらず、ラディカルという言葉の強さだけが頭に残った。後年ピアソラを好んで聴くようになる、今度は彼の音楽のどこがピアソラ以上にラディカルなのか、ということがよくわからない。そんなわけで、私の中ではマリアーノ・モーレスと言えば真っ先にこの一文が浮かぶのだった。

さて、ラディカル問題の前にひとつ片付けておきたい問題がある。彼の生まれた年が、少し前の資料では1922年と書かれているが、最近の資料では1918年に統一されているのだ。おそらく新しい情報の方が正しいのだろう。そうすると今度は、彼の経歴を記した多くの文章に書かれている「14歳でプロのピアニストとして働き始めた」というのが怪しくなってくる。整理してみよう。

本名マリアーノ・マルティネス、1918年2月18日ブエノスアイレス生まれ。7歳の頃にピアノを習い始めるが、数カ月後に教師から「この子は才能も音楽への興味もないようだからこれ以上教えられない」と拒絶され、両親はピアノを売り払ってしまう。その後彼は両親に内緒で近所の雑貨店店主の妹にピアノを習いはじめ（何たる意欲！）、やがて音楽学校に入学（何たる才能！）。1929年、一家はスペインに移住し、彼はサラマンカ大学の奨学金を得るまでになる。しかしスペインの政治状況の悪化により1935年にアルゼンチンに帰国すると、翌年には父が亡くなり、7人兄弟の長男として一家を支えなければならなくなる。そんな折に見つけたのがコリエンテス通りのバー《ビセンテ》でピアノを弾く仕事で、これが彼のプロデビューとなる。つまり14歳ではなく18歳の時のこと。

一方で彼は同時期にルイス・ルビステインの音楽学校で学び始め、やがて同校の教師になる。歌手のモーレス姉妹と活動を共にし、《トリオ・モーレス》を名乗ったのもこの頃（妹のミルナは彼の将来の妻となる）。1938年にはアルゼンチンを訪れていた古賀政男氏と親しくなり、彼の楽曲をタンゴに編曲して演奏する仕事を請け負う。この時の報酬5,000ドルで彼はスーツ、シャツ、靴、ネクタイ等々全てを7つずつ買って、日替わりの出で立ちでコリエンテス通りを闊歩。人々の注目を集めたという。



おそらくこの時の彼の行動は、単なる目立ちたがりの気持ちによるものではない。ここまでの経験と苦勞で身につけた、自分をいかに魅せるか、いかに人々の話題に上り、人々に夢を売るか、という感覚のなせる技だろう。実際、翌1939年には彼の作曲した「青い小部屋」が大ヒット。さらにはフランシスコ・カナロ楽団にピアニスト兼アレンジャーとして参加し、彼は一気にスターの道を歩み始める。その音楽的な才能には疑いの余地はないが、スターとして振る舞うことでスターになった、という側面もあったのではないか。そして、スターとして人々に夢を与えることのお膳立てのためには自分の年齢をサバ読むことも必要なことだったのかもしれない。



さて、上述の通り、彼は1929年から1935年まで、すなわち11歳から17歳までの多感な少年の時期をスペインで暮らしている。実は、この時期まで彼はタンゴにはあまり興味がなく、1935年のガルデルの死がタンゴを聴くようになったきっかけだった。この経緯、少年期をニューヨークで過ごし、1936年に帰国してエルビーノ・バルダロの演奏をラジオで聴いて初めてタンゴに目覚めたアストル・ピアソラに似ていないだろうか。二人とも海外生活を経験し、タンゴ以外の音楽に先に触れてからタンゴに到達している。先にスターになったモーレスに対し、ピアソラは敬意と共感を覚えていたフシもある。何と言っても、ピアソラが最初に作った楽団の名前は《青の四重奏団(クアルテート・アスール)》。モーレスの「青い小部屋」(クアルテート・アスール)をもじった名前だったのだ。

最初からタンゴにどっぷり浸かっていた訳ではない二人だからこそ、タンゴを変えることに躊躇がなかったのかもしれない。しかしながら、その方法論についてはモーレスとピアソラは大きく異なっていた。何より楽曲としての新しさを追求したピアソラに対し、モーレスはメロディーに関してはあくまでわかりやすさを貫き、結果として「ウノ」「最後のコーヒー」「愛せしが故に」など極めて多くのヒット曲を生み出した。そのかわり、概ね従来のタンゴに使用される楽器から大きく逸脱することのなかったピアソラと違って、モーレスはタンゴが国際的に通用することを第一に考えた楽器編成を用い、リズム楽器やオルガン等を導入する一方でバンドネオン不要説を唱えたりした。このあたりが冒頭で引用した高山正彦氏の「ラディカル」という評につながっているのだと思われる。演奏と歌とダンスが一体となったショーを追求して、後年の《タンゴ・アルヘンティーノ》のようなタンゴ・ショーの先駆となった。自身がピアノを弾く際には派手な手さばきで観客を魅了した。華やかなファミリーとしてのイメージを提供し、アルゼンチン国民に夢を与え続けた。

アルゼンチン国外の多くのタンゴファンにとって、映画『アルゼンチン・タンゴ～伝説のマエストロたち(カフェ・デ・ロス・マエストロス)』で楽団を指揮する姿が彼の最後の勇姿だろう。まるで衰えることを知らないエネルギーに満ち溢れた姿からは、別れの日が来ることを想像するのは難しい。多くのファンにスターとしての存在感を示し、最期まで夢を与え続けてこの世を去ったマエストロ。その偉大さに敬意を表し、冥福をお祈りしたい。

高橋 トク子さん (杉並区) (タンゴ歌手)

聞き手 宮本 政樹

(2016年6月2日高橋トク子さんご自宅にて)

1 ピアノとオペラに憧れた泰明小学校の教員生活

— 東京生まれの東京育ち、チャキチャキの江戸っ子だってねえー。

高橋 京橋の生まれよ！ 喧嘩ッパヤイのが玉に瑕。卒業まぎわに「医者になれ！」と言われたが、親兄弟の反対を押し切ってピアノが弾きたいために小学校の音楽の先生になりました。あの名門の泰明小学校は爆撃を受け、校舎は丸焼け、教室には大きな爆弾のあと、床も窓ガラスもない。もちろんピアノもない校舎の授業で音声障害になりました。某音楽学校も戦災で焼けてしまって終戦後に小学校にピアノを2台持ち込んで同居して来ましたが、そこでは音楽も教えたり、教わったりしていました。

藤原歌劇団も戦災で小学校に同居して来た時に、藤原義江や有名なプリマ達のすばらしい声にすっかり魅了されてしまいました。帝国劇場での藤原歌劇団のオペラには年中楽屋から入れてもらい、夢中になってオペラを聴いていました。しかし音声障害をおこして、高い声ならいくらでも出るが低い声が出ないんです。某音楽学校の卒業演奏会では声が出ないからという訳にはいかないので、「ルチアの狂乱の場」というすごいハイソプラノの Aria を歌いました。また、年に一度の学芸会や中央区の連合でのイベントで、学校の代表で「シンデレラ」をやりました。作曲、脚本、歌と踊りも、自分で全部作って、今のミュージカルですね。当時の日本ではまだミュージカルが無い時代ですから、通常では考えられない番外編の企画と言われ、泰明小学校と大喧嘩になりました。学校側としては子供の学校劇には本格的なものは必要はないと。生徒や父兄からは喜ばれましたが、学校側から非難されたのでそれが原因で学校を辞めました。



— 喧嘩ッパヤイ性格と思った事は貫き通す頑固一徹さと正義感の強さは終始一貫しているようですね。

高橋 それから昭和27年、某音楽学校が新大久保に移転したので、そこに教えに行く事になりましたが、有名な偉い先生を多く招いたので、教えに来ないで休講が多いのです。昼間働いて夜勉強に来る生徒達だから可哀そうです。先生の授業がないから自習させられるので、皆私の自宅に来てしまう。15、6人が新大久保から歩いて来ます。ここ東高円寺でピアノの伴奏してあげていました。そして歌を習えば発表会をしたくなります。読売ホールで発表会をしましたら校長からクレームが

来て、「生徒を返せ！」と。生徒が可哀そうで、喜んで来ていましたから、1回だけ発表会をしてあげたんです。そこでは歌謡曲もあり、ピアノ独奏も、日本歌曲からオペラのアリアを歌うプログラムの豪華さ。校長代理が怒鳴り込みに来て「生徒を返せ！」。また喧嘩をしてこの学校も辞めてしまいました。

- それが「高橋ミュージック・アカデミー」の前身だったんでしょうね。随分昔の事で昭和27年ですか。いっその事、その時に「高橋ミュージック・アカデミー」を設立してしまえば良かったですね。その時に学校の先生もオペラ歌手もみんな諦めて失意の日々を過ごしながらも、タンゴへの道はもう少し先の事ですね？

2 タンゴ歌手への道

高橋 昭和28年頃、タンゴを勉強したいと思っていた頃、友達が高山正彦さんを探して下さって、習いに行ったらギターの人が3人、必要なくなった藤沢嵐子さんの楽譜を3人のギターで歌っていました。その頃前田美智子さんも入って来ました。藤沢さんの譜面は音が3度、4度低いのです。こちらはハイソプラノだから声が出ません。「タンゴを歌うのはソプラノじゃ駄目なんだ、そんなの成功する訳ねーんだよ」、「ソプラノで成功したのはリベルタ・ラマルケぐらいなもんだよ」、「藤沢さんが音を下げているんだから、この音にしなければダメだ！」と。それから発声練習をしてどうしたら低い声ができるか一生懸命研究しました。他の人は地声で歌いますが、私は地声で歌うと喉を壊すので、それが一番怖かったです。それから私は不愉快になって、行くのを止めました。友達にタンゴの新人コンクールがあるから受けてみないかと勧められましたが、タンゴは不快な思いをしていたから「イヤッ！」と。でもどんな人が来てるか聴きに行くだけでもと無理やり引っ張って行かれましたら、応募者の中にイヤな奴がいるじゃない！「ヨーシ、ヤッタルぜ！」

- 審査員は誰だったんですか？ 高山さんも入っていたんですか？

高橋 高橋忠雄さんとプロデューサーと坂本政一さん。高山さんはノータッチ、派閥が違うから。70～80人来てました。その中に高山さんに習いに来ていた人が3人ばかりいました。私は「A Media Luz」の楽譜を提出し、ポルテナのピアニストの鈴木雅晴さんの伴奏で歌い、第一次、第二次予選を通過した3名の歌を放送させて、一般からの人気投票をハガキで集計した結果、私が断トツで一位になりました。その時の表彰状がこれです（表彰状を見せてくれました）。そして審査

員であった高橋忠雄さんからのお声がかかり代々木上原のお宅に習いに行く事になりました。



高橋先生からは「他の人と同じ歌を歌わないように、特に藤沢さんとは違うレパートリーを」。最初に出された楽譜は「Te Odio」「No Te Quiero Más」「Niebla del Riachuelo」知らない曲ばかり。一度に5、6曲渡され、次のレッスンの1週間以内に、自分のキイに直して写譜をしてスペイン語で覚えるのは大変な事で、死に物狂いでやりました。少ししてからヤマハのレコード・コンサートでナマを入れましょうと言われて、最初に歌ったのが「El Llorón」と「Te Odio」、岩崎宏康さんのピアノ伴奏で。

＜参考のために、その頃歌っていた曲の一覧表から抜粋。今の歌手でもあまり取り上げないような曲やその頃でもまだ珍しい曲がたくさんある：「Abandono」「Anclao En París」「Barrio Reo」「Cara Sucia」「Canzoneta」「Caricias」「Chiquilín De Bachín」「Carnaval De Mi Barrio」「Cuando Caigan Las Hojas」「Charlemos」「Churrasca」「Cristal」「Cariño」「Cuesta Abajo」「Destello」「Esta Noche Me Emborracho」「Gloria」「Guitarra Guitarra Mía」「Desencanto」「Danza Maligna」「El Adiós」「Viejita」「La Copa Del Olvido」「Flor De Té」「Garganta Con Arena」「Lejana Tierra Mía」「La Pulpera De Santa Lucía」「Madame Ivonne」「Milonguita」「Milonga Del 900」「Memorias De Una Vieja Canción」「Negro」「Nada Más」「Por La Vuelta」「Pregonera」「Prohibido」「Quiero Verte Una Vez Más」「Romance De Barrio」「Silueta Porteña」「Silencio」「Sur」「Será Una Noche」「Sin Palabras」「Sombras Nada Más」「Te Quiero」「Taquito Militar」「Tomo Y Obligo」「Una Canción」「Volver」「Yo No Sé Qué Me Han Hecho Tus Ojos」「Y Todavía Te Quiero」などなど＞

— その当時としてはすごい曲ばかりやっていたんですね。これらが藤沢嵐子さんがまだレパートリーに入れてない曲として高橋忠雄さんが推薦してくれた曲なんですか？

高橋 いいえ、全部ではないです。高橋先生が教えてくれた曲と私が探して来た曲も入っています。そしていろいろ集めた歌詞と訳詩を書いたノートが全部で37冊あります。それで眼が悪くなって、眼科のお世話になりました。

3 日本のタンゴ黄金時代での活躍

— 昭和30年代に入って日本のタンゴ全盛時代を迎えますが、東京の繁華街にはたくさんの生演奏の音楽喫茶が出現しますが、ますます歌の仕事が忙しくなって来たんでしょうね？

高橋 そうですね。忙しくなりましたね。銀座の「白馬車」、新宿の「ラ・セーヌ」、渋谷の「プリンス」、上野御徒町の「金馬車」、新橋の「夜来香」と、ドレスと楽譜を入れた重い鞆を持ってあちこち飛び歩くのが日課となりました。毎日同じドレスで歌ってクビになった歌手が何人もいると聞いていたので、徹夜でドレスを縫ってはたくさんの衣装持ちの風を装っていました。この頃大学には次々とタンゴ・バンドが結成され、秋の大学祭にはゲストに招かれて若い学生さん達と共演して楽しい時代でした。高橋先生が聴きにきて下さって、坂本政一さんのバンドで歌っていたら「お尻引っぱたかれて歌っているみたいで、あなたのしみじみとした味が出ない」と。チャッチャカ・チャッチャカとリズムが速いから。先生からシモーネのレコードを2、3枚頂いて聴いていたらシモーネが気に入って、加年松城至さんからもシモーネの声に似ていると言われて、高橋先生もそれに乗ったようで、「トリオでいいから自分の専属楽団を作りなさい」と言われました。そしてバンドネオンとバイオリンとピアノの腕の立つ名手3人が私の専属のトリオとして集まって下さいましたが、忙しく準備をして動き始めた時に、突然、鳶に油揚げをさらわれたように、引き抜きで有名なあの楽団にメンバーを持って行かれてしまい、私のタンゴへの情熱は夢と消えてしまいました。争い事を好まぬ高橋忠雄先生はただ、黙って悲しげにご覧になるだけでした。当時のタンゴ界は油断も隙もない世界でした。オルケスタ・ティピカ・パンパやティピカ・コリエンテスの楽団でも名手が引き抜かれた話は有名です。

4 タンゴ衰退の時代からのカムバック

タンゴが衰退してきた昭和40年代末に高橋忠雄さんが亡くなり、そのお葬式に来た昔の仲間たちに久しぶりに会い、「トク子さんどうしたの?」と言われて、引っ張り出されてタンゴ界にカムバックしました。小沢泰さんのバンドに引っ張り出され、そこには岡本昭さん、京谷弘司さん、門奈紀生さんもおられましたね。新宿の「エル・パティオ」では小沢さんと岡本さん、仲間美枝子さんのトリオで毎月歌っていました。一番初めは京谷トリオでした。そして私の東高円寺のお店の「エストレジータ」の開店が平成元年です。ラテン・タンゴ歌手の佐野ジローさんの「エピキュール」のお店を買い取ったんですが、その頃から日本の経済状況の破綻でバブルがはじけて不景気になり、お店にお客が来なくて、9年間も赤字が続いた状態でした。一度も儲かった事はありませんでした。でもこのお店には色々な楽団が来て我々タンゴ・ファンを楽しませて下さいました。本場の楽団も日本の楽団もたくさん来ました。我々は夜遅くまで「ノチェーロス・ソーモス」。いい店でしたね。最終電車の時間まで夜遊びしていました。

高橋 毎月楽団の演奏がありました。本場の楽団ではラシアッティ、ホルヘ・アルドゥ、オマール・バレンテ、ウーゴ・パガーノ、エンリケ・クッチーニなどが懐かしいですね。日本の楽団も京谷さん、タンゴ・クリスタル、西塔辰之助とパンパとたくさん来ました。ダンサーのリバローラやカルロスとアリシアも遊びに来てお客さんと踊っていました。

5 高橋ミュージック・アカデミー

— 最初に高橋ミュージック・アカデミーを設立したのは、1970年代ですか？ 毎年「私達のリサイタル」としての発表会を開催していましたね。

高橋 そうですね、1975年がスタートの年です。タンゴの他にも、カンツォーネ、シャンソン、ラテン、クラシックの幅広いジャンルの歌のレッスンをしながら、楽しいコンサートを心掛けて27年間続けて来ました。タンゴを歌う人が約6割ぐらいで、出演者も会を重ねるごとに増え、会場も大きなホールが必要になり、中野公会堂や杉並セシオンなどで実施していました。伴奏楽団も坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニヤ、志賀清とタンゴ・モデルノス、平野洋輔とロス・タンゲーロス。それからバンドネオン奏者の京谷弘司さんや松波常雄クアルテートに演奏してもらいました。10年以上のベテランも1、2年の新人もおりますが、皆、楽しいリサイタルを目指して来ました。



1990年10月19日 高橋ミュージック・アカデミー「私達のリサイタル」

— 私も2年間だけその門下生としてお世話になりましたが、タンゴの歌い方における特に重要なポイントとはどんな事でしょうか？ 又練習方法で、心掛けることは何でしょうか？

高橋 タンゴを歌うにはまずスペイン語の発音が大事です。曲の意味内容を良く理解して、タンゴは3分間のドラマチックな構成になっているので、それをいかに上手に表現するかが重要です。その表現力によって歌が決まって来る。でも一にも二にも声です。そのためには発声練習です。その声の出し方が大事で、地声では喉を壊して歌が歌えません。きちんとしたお腹に力を入れて腹式呼吸による歌が理想です。タンゴはそれほど音域が広くないので、みんな安易に歌ってしまうと、タンゴの魂が入って来ない。言葉に気を取られてしまうと、そのほんとうの意味での深く潜んでいる魂を込めて表現する事は難しいです。

6 オープン・クラブ

又、高橋ミュージック・アカデミーとは別に「オープン・クラブ」を隔月に開催。歌や踊りの好きな方ならどなたでも気楽に自由に参加でき、会員制でもなく、師弟の関係もなく、「お茶とお菓子と音楽」の楽しいクラブです。新年会、クリスマス・パーティー、仮装パーティー、懐かしの童謡メドレー、ハワイアン・フェスティバル、フラメンコ、カラオケ大会など何でもありの毎回楽しい催しものが企画された集まりでした。だんだん拡がって来るとバンドを付けたり、コーラスが出来たりして規模が大きくなりました。そして仲間も増えてきて、横の繋がりも拡がって、世界が広がって行く事はいい事ですね。

7 ブエノスアイレスでの活躍

— 初めてアルゼンチンに行ったのは1983年ですね。随分歓迎されたでしょうね。

高橋 そうですね。テレビでは9チャンネルの「グランデス・パローレス」や11チャンネルの「ポティーカ・デ・タンゴ」の番組に、ラジオの放送局もライブハウスもあり、毎日時間に追われ体が休む暇もなく大変でした。ベバ・ビダルの「タコネアンド」ではトリオ・ジュンバの演奏で、ベバ・ビダルと一緒に肩組んで何曲も歌い、お客も熱狂してオトラ、オトラの連続で、深夜まで歌っていました。帰ってきたら、短波放送Reyにそのまま呼ばれて出演し5時過ぎに帰って来ました。「ポティーカ・デ・タンゴ」でも大歓迎を受けました。マリア・グラニーヤ、タニア、マリア・デ・ラ・フエンテ、エンリケ・ドゥマス等の錚々たるメンバーに感激。名司会者のレウマに手を取られてステージをひと廻りして、「ウノ」を歌い、フィナーレはタニアと腕を組んで「アディオス・パンパ・ミーア」を歌いましたが、私の思い出に残るものでした。モンテビデオの12チャンネルではビジャスボアスの演奏を聴き、私は振り袖姿でピアノの弾き語り「スール」を歌いましたが、長い振り袖が重かったです。ベリンジェリと初めてのレコーディングもしましたが、突然にスタジオに呼ばれて録音をしたので、十分な練習も出来ず、満足の出来る歌ではなく悔いが残りました。

— 1989年の2回目の旅行ではビルヒニア・ルーケに会ったり、「カサ・デル・タンゴ」でリサイタルを開



ルーケとドラゴネと一緒に

かれたそうですね。

高橋 ルーケの自宅に招かれてのホーム・コンサートでした。「エル・ディア・ケ・メ・キエラス」を二人で!! ルーケが高音のハーモニーをつけて下さったの二重奏。ルーケはお話の声も高いけれど、あれほど美しい高音が出るとは思いませんでした。感動しました。今は亡きルーケとの最高の思い出になりました。

「カサ・デル・タンゴ」ではドラゴネの演奏でリサイタルを開いていただきました。曲目はいつも歌い慣れている曲で、「エル・アディオス」、「イ・トダビア・テ・キエロ」、「ポル・ラ・ブエルト」、「レメンブランサ」、「カンソネータ」、「エル・ディア・ケ・メ・キエラス」など。最後にはエチャグエとラロックの息子たちと一緒に3人で「カミニート」を歌いましたが、すばらしい歌声の二世達でした。ちょうどその時にはブエノスに留学中の大学生の古橋ユキさんがドラゴネ楽団の一員としてバイオリンを弾いておりました。次の日にはルファンに飛び、リベル・トリオの歓迎を受けました。日本でもお馴染みのウーゴ・パガーノ (Bn) とエンリケ・クッチーニ (Pf) とルイス (Gt すでに故人となった) の3人は皆ルファンの出身で、1987年に新宿の京王プラザの「コンサート」でルーケの専属楽団として毎日演奏していたメンバーでした。ブエノスアイレスでは、加年松城至さんの紹介で「アカデミア・ナショナル・デル・タンゴ」のオラシオ・フェレル会長に御挨拶に伺い、そのビルの地下にある「カフェ・トルトーニ」で再びドラゴネ楽団とエチャグエとラロック二世達と共演しました。

8 日本タンゴ・アカデミーについて会員としての要望

— NTAの創立以来の会員で、セミナーにも出席されておられますね。メルセデス・シモーネの時やピアノソラ特集や、高場将美さん、大澤寛さんの歌の特集の時などに。アカデミーのセミナーやイベント、機関誌等についての御意見がありましたらどうぞ。

高橋 アカデミーの機関誌は大変格調高い専門的な記事が多いですね。あれはほんとにタンゴマニアじゃないと読んでも解らない事が多いようです。アカデミーの催しがある時はもっとくだけた、皆が楽しんで喜びそうな事をやるとか、一般の人がもっと参加出来る場面を作ったらどうでしょうか。今までのアカデミーの歴史があるから、硬いイメージの体質が入り難くしている原因かも。もっと自由な開放的でオープン・クラブのような雰囲気が欲しいと思います。

— お手を負傷されてまだ病院通いをされている時に、ご自宅に押しかけて、貴重なタンゴ人生のお話を聞かせていただいてありがとうございました。今年でおいくつになるか私は忘れましたが、これからもますます歌のご指導にご活躍される事を祈っております。



全国リレー随想（18）

バンドネオン VS アコーデオン 比べるとわかるバンドネオンの特徴

大河内 祐（東京都港区）

昨年9月ノチェーロ・ソイの例会で演奏をさせていただいた時、十数年ぶりに島崎名誉会長とお会いした。ほんの1年ほどでNTAから脱落してしまった私に「戻ってきてよ」という暖かいお声をかけていただき感激しました。その島崎さんから全国リレー随想に載せたいので何か書けという要請を受けました。随想という題名にこだわらず自由でいいとのことなので、やはり自分が一番関わってきた課題“バンドネオン”のことを書くことにしました。会員の皆様に私ごときが今更バンドネオンを語るのは申し訳ない次第ですが、ご参考になることが少しでもあれば光栄です。



ピアソラがインタビューに応じてバンドネオンの説明をしている映像がある。

「バンドネンは押し引きで音が違い、音の配列も一定でなく半音違いの音でもすぐ隣にあるとは限らない」といったライブでよく聞く説明だけで一寸がっかりしました。

然しライブなどでこれ以上の説明をするのは時間的制限もあり雰囲気壊すリスクもある。さりとてこの説明でバンドネオンの本質が伝わるとは思えない。

バンドネオンとアコーデオンが出現するまではコンセルティーナといういわば手動のハーモニカの様な手風琴が使われていた。楽器の左右についている輪っかに親指を差し込んで両腕で蛇腹を開閉する。音色は魅力的で一部の民族音楽でいまだに使われている。私は詳しくないので多くは語れないが、バンドネオンより2周りほど小さく、音ボタンは多いものでも左右合わせて36個ぐらい。従って、音量が小さい、音域が足りないか又は1ボタン2音とするため頻繁に蛇腹を開閉するなどの短所があると思われる（英国型とドイツ型、夫々にいろいろな仕様があり、例外があるかも知れない）。

メロディと伴奏を一人で演奏し、手軽に持ち運びもできる楽器はギターとコンセルティーナぐらいしかなかった。かれこれ200年前の時代だ。コンセルティーナの上をいく手風琴が待ち望まれていたのは想像に難くない。課題は音域を広げること、音量を増やすこと。

そこで登場したのがアコーデオン（1829）とバンドネオンだ（1835）。

アルゼンチンタンゴ演奏という切り口で両者の顕著な相違を取り上げてみたい。

(1) アコーデオンは右手を解き放った

音域と音量を増やすためには楽器を大きくし楽器の保持はコンセルティーナと違った方法を考えたのがアコーデオンだ。親指を解放すれば5本指全てが使えるのみならず、音ボタン（ないし鍵盤）の数と配置に関する制約がなくなる。アコーデオンの右手側はオルガンやピアノの鍵盤と同様になった訳だ（ボタン式のアコーデオンも音数と配置の制約から解放される）。然し蛇腹を開閉するためには左手を楽器に固定し、さらに楽器を体に固定させなければならない。ショルダーストラップで肩に吊って弾くのはアコーデオンが重いだけでなく、右手を自由にするためであったと思う。

これに対しバンドネオンはコンセルティーナより大きくしたが蛇腹の開閉にはあくまで両腕を使う。両腕だけで楽器を支え続けるのはさすがに重いので膝に乗せて弾く。親指はほぼ固定されるので音を出すためには残り4本の指を使うしかない。そして音ボタンは残り4本のうち少なくとも1本が届く範囲に並んでいなければならない。

(2) 和音ボタンの功罪

アコーデオンも左側は鍵盤でなくボタン式であることは一目瞭然だがバンドネオンとは大きな違いがある。一部のボタンを一つ押せば和音（ドミソ等の）が出るようにしたことだ。配列は和音ボタンもベースボタンも5度間隔としてある。これにより簡略的な伴奏は飛躍的に容易となる。然し、伴奏が“ズンジャチャ”の域を超えると途端に難しくなる。

和音ボタンがあることはアコーデオンと呼ばれる定義の基本条件だと理解している。

その為に内部の構造が複雑となり楽器が重くなるというのは短所の一つだ。

これに対し、バンドネオンは全て1ボタン1音なので和音を出す為には少なくとも二つ以上のボタンを押さねばならない。代わりに低音部もピアノやオルガンに一步近づいた和音選択とメロディが自由に弾けることを可能にした（100年以上経ってからアコーデオンにも左手にメロディ機能を追加したものがつくられている。難易度は知らないがバンドネオンほど自由にメロディ演奏ができるとは思えない）。

(3) “大は小を兼ねる” とはいえない

バンドネオンの重量6キロ弱に対し、41鍵120ベースフルサイズのアコーデオンは装備機能にもよるが10キロ前後、重装備のものはもっと重い。体積差は重量差ほどではないかもしれないが、アコーデオンは扁平なので高さがあり、座って弾けば座高の高い私でも顎に達する。これを肩に吊るといわば首枷をかけられた様なもので、楽器の保持は安定するものの、上半身の動きはかなり不自由である。この状態で蛇腹を開閉すると動きはスムーズでも緩慢にならざるを得ない。

一方バンドネオンの蛇腹の開閉ははるかに自由で状況に応じて右手でも左手でも両手でも開閉する。さらに膝を使っての開閉、踵を使ってのスタカットの強調などアルゼンチンタンゴに欲しい条件を備えている。

バンドネオンはコンセルティーナの長所を残しながら、短所を改良した楽器だともいえる。

コンセルティーナより2周りほど大きいボックス型であればアコーディオンに近い音量と音域が得られ、肩に吊るほど重くも大きくもならない。

(4) “スプーンの柄” の役割

開いた蛇腹を音を出さずに空気だけ抜く機能は全ての手風琴に必要で、アコーディオンでは左手側の片すみに小さなエアボタンとしてひっそりと存在している。蛇腹を開いた形で演奏を終える場合に音を出さずに閉じる為に使う。音を出しながらこれを使用することは先ずない。

一方バンドネオンの場合は右側にスプーンの柄の様な金属棒（レヴァー）として存在する。右親指が常に触れていて何時でも瞬時に空気抜きが可能だ。このお蔭で演奏中に開いた蛇腹を素早く閉じて、蛇腹の引き（開き）での演奏チャンスを増やし、押し（閉じ）の演奏を減らすことが可能となる。

バンドネオンの場合、蛇腹は引いた時の方が音の出る効率が良いことと、押し引きで音の配列が違うこともあり、“引き”を多用する。“合奏”の場合は特にこの傾向が強い。

(5) バンドネオンの音の配列は何故バラバラなのか？

これは“パソコンのキーボードのアルファベットは何故A, B, Cの順番通り並んでいないのか？”という疑問と似ている。整然と並んでいて覚えやすいことより、使い勝手を優先したのだ。キーのポジションを覚えてもある程度は練習しなければ音楽にはならない。ポジションは練習しているうちに自然に覚えられるということの様だ。

左右とも多用する中音域のボタンをなるべく真中に配置し、高音部と低音部は外側に配置してある。真中辺にあるボタンは4本指全てが届くので運指の選択肢が増える。配列はバラバラになるが、ジグザグ飛び石のまさに“獣みち”を行くが如き運指を可能にしている（私の場合は度々迷ったり転んだりするが）。

音の配列に関してもう一つの設問は押し引き異音、つまり同じボタンが押し引きで違う音程を出すことだ（尤も押し引き同音なボタンが左右合わせて11音あり、半音、1音違いも少なからずある）。

音域としては十分あるのに何故“押し引き異音”にしたのか、なぜ同音にできなかったのか？ 私には分からないが、バンドネオン開発の当時は、いろいろな理由があったに違いない。

押し引きで配列を変えたことによって“獣みち”が一つ増えたことになり、より多様な演奏を可能にしたことは確かだ。

尤もその為の代償は結果論ながら大きい。少し大げさに言うと、スペイン語、イタリア語、フランス語、ポルトガル語を全部一緒に習う様なものだ。左右、押し引き共通点があり、似ているが違う。始めてみたものの諦めてしまう確率、興味を持って話を聞いて尻込みする確率の高さはアコーディオンと比べるまでもない。

コンセルティーナの配列を参考にしたと伝えられているが、何れにせよバンドネオンの配列は天才的としか言いようがない。

(6) 蛇腹さばき

蛇腹は人体でいうなら、肺であり、呼吸である。然し、アコーディオンとバンドネオンの肺と息遣いは楽器の構造や形態などによって顕著な違いを生む。加えて配列の違いがそれぞれ特有な演奏スタイルを誘発すると思う。

アコーディオンの蛇腹さばきは主に左腕とそれにかかる楽器の重力によるものだ。

背丈や腕力などによる個体差はあると思うが楽器を弄ぶ様な演奏は難しい。

結果として軽いタッチのクールなスタイルが持ち味となる（ホットな演奏が出来ないということではない）。

バンドネオンの場合は両腕、両足、エアレヴァー、楽器の重力など全て蛇腹さばきに見えるので、むしろやり過ぎのリスクがある。然し、ハグレ良さとかネバリ強さなどが持ち味となり、アルゼンチンタンゴ独特のリズムや“ノリ”はバンドネオン独特の蛇腹さばきによるところが大きいと思う。

(7) 音色談義

ネオン好きにとって音色の違いこそ尤も重要な項目である。では音色の違いの源は何なのか？ リードの形状が違う（バンドネオンは長方形、アコーディオンは先細りの矩形）とか、リードの共鳴板（金属）の材質が違うからだとも聞いている。然しそれだけではあるまい。

原理は同じでも楽器の構造や形状が違うのであれば音色が違ってもおかしくはない。

私は“蛇腹さばき”の違いが音色の違いにも大いに関わっていると主張したい。

バンドネオンの音はオクターブ違いの2枚のリードからなっている。アコーディオンにもこれと同じリードの組み合わせがある。この音とバンドネオンの音を比較すると、ただプーっという音を出しただけではあまり差を感じない。タンゴ好きにとっては音色の差はタンゴを弾いたとき最も鮮明になると思う。“蛇腹さばき”がタンゴに合っているから音色の差をより強く感じるのではないだろうか？

アコーディオンといえば大概の方はヒヤラヒヤラとかジャラジャラした音色を先ずは思い浮かべるのではないだろうか？ これは複数のリードが鳴っていて中に調律（ピッチ）を少しずらせたリードも鳴っているからだ。この様なアコーディオン特有な音色は明らかにバンドネオンの音色とは違う訳だ。

oooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooo

アコーディオンとバンドネオンのシェア争いは汎用性と即効性からアコーディオンの圧倒的勝利で推移してきた。ポストコンセルティーナの潜在需要はやはり相当に大きかった。然しその需要はアコーディオンによって満たされていき、一時期バンドネオンは生産過剰に陥ったとのこと。

アルゼンチンタンゴにピアノが加わっていなかった時代メロディ担当はフルート、クラリネット、ヴァイオリンなど多彩であったが、リズム担当は主にギターだけだったと思う。手風琴はメロディ役もリズム役もこなせる重宝な楽器だ。然しコンセルティーナにはハンデキャップがあり、アコーディオンは高価である。そんな時期にバンドネオンが過剰在庫から安値で輸入されたのがきっかけで使われ始めたという説は十分納得できる。アルゼンチンのコンセルティーナ奏者にとってバンドネオンにそれ程抵抗がなかったということももうなずける。

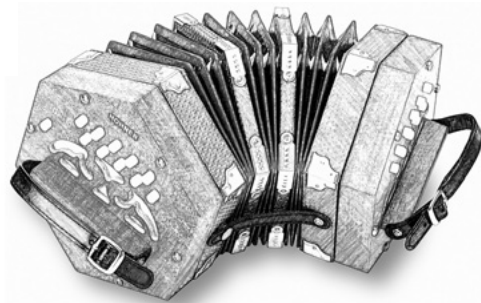
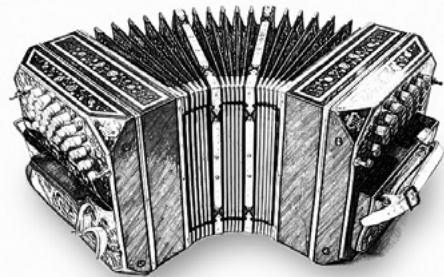
初期のタンゴに於けるバンドネオン演奏はご存じの通りのどかなものだった。然し、演奏技術習得とともにバンドネオン特有のものに変わってきたこともご存じの通りである。

バンドネオンがタンゴに向いていたというより、タンゴがバンドネオンに“にじり寄って”進化したというべきかもしれない。

もしバンドネオンが生産過剰に陥らず、安価で輸入されなかったら、どうなっていたらう。少し時間がかかったかもしれないが、タンゴにはやはりバンドネオンが選ばれていると思う。

随分とえらそうに書いてしまいました。私の場合は“書く”と“弾く”とではかなりの差があることを付記して随想に代えさせていただきます。

※次は香川県丸亀市の富田稔さんです。



クアルテート・デル・センテナリオ とその周辺

por 西村秀人

「古典タンゴ」はいつの時代にもタンゴの原点を示す作品群として、演奏においてもダンスにおいても尊重され続けているが、1959~60年頃に始まる「懐旧派コンフント」のブームは、一見懐古趣味のように見えて実は多様な方向性を持っていた。今回は1960年代以降の「懐旧派」の流れの中でもっとも「硬派」なクアルテート・デル・センテナリオとその関連グループをまとめておく。



センテナリオ四重奏団 (Cuarteto del Centenario) はその名の通り、アルゼンチンの建国100周年 (センテナリオ) の頃、1910年頃のスタイルを再現するグループである。本人のインタビューによれば1948年にギターのエドゥアルド・デル・バージェが作ったグループが最初のようなのだが、1960年代のリーダーは明らかにエミリオ・ブランカ (バンドネオン) であり、この辺のリーダーの推移はあまりよくわからない。実際の資料上で確認できるセンテナリオの活動の最も古いものは1966年、フロレンシオ・サンチェス劇場で行われた「ビジョルドの時代」という、アンヘル・ビジョルドが活躍した時代をテーマにした演劇作品に出演した時である。その時のメンバーはエミリオ・ブランカ (バンドネオン)、エドゥアルド・バージェ (ギター)、アンドレス・サゲッセ (バイオリン)、ホルヘ・スリブスキン (フルート) で、リーダーはブランカと記されている。ブランカはフアン・マグリオ・パチョそっくりのスタイルを持つ、古典タンゴを弾くために生まれてきたようなバンドネオン奏者だった。ここでの編曲はフランシスコ・テオドロ・エスポイトが担当していた。テオドロ・エスポイトは、パリにおけるタンゴ演奏の先駆者となったターノ・ヘナロ・エスポイトの弟で、1940年代には楽団を率いていたが、1960年代以降は1910年代の演奏スタイルの再現演奏で長くステージに立っていた人物である (ただし公式録音は残っていない)。この作品の成功を受けて、1966年12月1日にIONスタジオで記念レコードが録音され、オスカル・デル・プリオレのDUPUYレーベルからLPとして発売された。

“Tiempo de Villoldo – tangos y diálogos” (Dupuy DP-6002)

- A (1) El esquinazo (2) Filo criollo (3) Chiflale que v'a venir (4) Galleta doble (5) Tan delicao el niño (6) Don Pedro (7) Asunto serio (8) El choclo (9) Cuidao con los 50
- B (1) El torito (2) El rey del conventillo (3) El fogonazo (4) Yunta brava (レシタード)
(5) Yunta brava (演奏) (6) Bélgica -vals- (7) El terrible (8) La caprichosa (9) Los porteñitos

センテナリオ四重奏団の演奏はA1, 3, 5, 6, 8, 9, B1, 3, 5, 6, 8, 9ですべてアンヘル・ビジョルドの作品、残りは出演俳優の対話と独白である。B8にマリータ・バッタリアの歌が入る他はすべて器楽演奏。ビジョルドの殆ど今日演奏されない作品が入っているのが貴重だ。のちのセンテナリオの演奏よりもさらに時代の忠実度が高い。この後、グループはコロンビア・メデジンのタンゴ・フェスティバルに出演して好評を得、演劇を離れたところでも活動を続けることになったようだ。

本アルバムは後にShow Record LP3として再発、またPrensa OralレーベルでPO503 “Allá por el 900” として、本アルバムのセンテナリオ演奏曲のうち、Cuidao con los 50を除く11曲と、出所不明の “Ensueño” (アントニオ・スレーダ作のワルツ) を加えた12曲を収録したアルバムがある。

センテナリオは1969年RCAカムデン・レーベルで2枚目のアルバムを発表している。

RCA Camden CAL3242 “Tango del lejano Buenos Aires”

- A (1) El queco (anónimo) – Dame la lata (Juan Pérez) (2) A la larga (A. Rosendo Mendizábal)
 (3) Chiflale que v’a venir (Ángel Villoldo) (4) Venus (Alfredo Bevilacqua) (5) Montaraz
 (Vicente Greco) (6) Cordón de oro (Carlos Posadas)
- B (1) Bartolo (Francisco Hargreaves) – La patota (Carlos Minotti) (2) Que nene (Vicente Greco)
 (3) Muy... de la garganta (Manuel O.Campoamor) (4) Martín Fierro (5) Viento norte (Augusto Gentile)
 (6) El talar (Prudencio Aragón)

A3はファースト・アルバムでも録音している曲。他にレコードがあるのはA4, A6, B6ぐらいで、A5はずっと後にオスバルド・プグリエーセが録音している。バンドネオン、ギター、フルートとも同じメンバーで、バイオリンだけ交替して大ベテランのエンリケ・カントーレが参加している。

少し間があくが、1974～75年に録音された次のアルバムが3枚目になるはずで、歌手ワルテル・ジョンスキーが半数を歌っている。



Madrigal MP3011 “¡Soy tremendo!” Walter Yonsky con el Cuarteto Del Centenario

- A (1) Soy tremendo (Ángel Villoldo) (2) El morochito (Vicente Greco) * (3) Don Juan (E. Ponzio – R. Podestá) (4) La guiñada (Agustín Bardi)* (5) Quiero papita (6) Metufias o el arte de vivir (Ángel Villoldo)**
- B (1) Yunta brava (Ángel Villoldo) (2) Quien te iguala (A. Michetti)* (3) Don José María (Mendizábal – J.Portaña y Waiss) (4) Adiós Buenos Aires (Eduardo Arolas)* (5) El pechador (Ángel Villoldo) (6) La torcacita (José Martínez)

*印はセンテナリオ四重奏団の演奏のみ、**はエクトル・アコスタのギター伴奏でジョンスキーの歌。

メンバーは少し変わり、エミリオ・ブランカ（バンドネオン、リーダー）、エンリケ・マガルド（フルート、アレンジ）、アンドレス・サゲッセ（バイオリン）、エクトル・アコスタ（ギター）で、デル・バージェはここでは抜けている。ジョンスキーの歌入りの曲もA6を除き、センチナリオの伴奏だが、ほとんど他に歌われる機会のない珍しいレパートリーである。1974年から75年の録音とされており、このアルバムから4曲が先にDI395として発売されていたようだ。1995年にDiapasón DP155326としてオリジナル・ジャケットのままCD化されたが、録音年が書いていなかったため、当初新譜だと思われていた。

さらにやや間が空いて、1978年にRCA 2枚目のアルバムが出ている。

“Tangos patrióticos” (RCA Victor AVSP-4632)

- A (1) Acorazado Rivadavia (Ángel Villoldo) (2) El Sargento Cabral (Manuel Campoamor)
 (3) Tacuari (Juan Maglio) (4) Tucuman (José Luis Padula) (5) Reconquista (Alfredo Bevilacqua) (6) 25 de mayo (Eduardo Arolas) (7) Chacabuco (Carlos H. Macchi)
- B (1) Primera junta (Alfredo Bevilacqua) (2) Jorge Newbery (Luciano Ríos) (3) Independencia (Alfredo Bevilacqua) (4) Dos de línea (Pedro D. Sofía) (5) Tu sueño (Eduardo Arolas) (6) El arutillero (Eduardo y J. José Villegas) (7) Sarmiento (Augusto P. Berto)

LPタイトル「愛国的なタンゴ集」の通り、アルゼンチンの歴史上の英雄に捧げられた曲や独立時代のエピソードをテーマにした曲が集められている。共にダリエソのレパートリーとして知られるA4, B3以外はほとんど演奏される機会がなかった曲だ。メンバーはブランカとバージェの他、エウヘニオ・ナポリ（バイオリン）、エンリケ・マガルド（フルート）になっている。このアルバムは1980年に日本でRVC RMP-5048 (S)「独立－タンゴの創世記」として発売された。最初のリーダーはブランカだったはずだが、この頃から戻ってきたバージェがリーダーシップをとるようになったようだ。

翌79年、RCAで3枚目のアルバムを発売している。

“Tangos camperos” (RCA Víctor AVSP-4733)

- A (1) El fogón (Alfredo Bevilacqua - Carlos Minotti) (2) El carretero (J. José Villegas)
 (3) La huella (M; Aníbal Villanueva) (4) Martín Fierro (Domingo Greco) (5) El gaucho (Carlos G. Flores) - La cautiva (Juan Carlos Cobián) (6) El estribo (Vicente Greco) (7) El alero (Juan Maglio Pacho)
- B (1) Tradición (Diego Cordero) (2) La indiada (José Martínez) - La manada (Gerardo Metallo) (3) Don Segundo Sombra (Enrique Delfino-Julio Romero) (4) El resero (Raimundo Petillo) (5) Sentimiento criollo (Roberto Firpo) (6) El baqueano (Agustín Bardi) (7) General Roca (Carlos H. Macchi - Florencio J. Amaya)

いわゆる田園調のタンゴを集めており、タイトルだけではなく、メロディにも田園風の旋律が取り入れられた曲が多い。A3, A6, B4, B5, B6など1940～50年代によく演奏されていた曲もあるが、

1910年代の演奏スタイルで聞けるところがポイント。メンバーは前作と同じである。

さらに1980年にもアルバムを発表している。

“Tangos del Buenos Aires antiguo” (RCA Victor AVSP-4852)

A (1) La gaita (Arturo Bernstein) (2) El escobero (Ambrosio Radrizzani) (3) Canillita (No. 1) (Francisco Canaro) (4) El cebollero (Ángel Villoldo - Luis Negrón) (5) Cosa linda barata (Luis Teisseire) (6) Selección de tangos antiguos : El Negro Santos (Gabriel Rasáenz) - El Negro Raúl (Ángel Bassi)

B (1) El Tano Nicola (L. A. Bonnel) (2) La propina (José Quaranta) (3) El tamango (Carlos Posadas) (4) Selección de tangos antiguos : El botón (Carlos Minotti) - El incendio (Arturo De Bassi) (5) El gringo (René Lyaz) (6) Los cazadores (Domingo Santa Cruz)

昔のブエノスアイレスの社会風俗を現すような、職業・移民などが曲のテーマになっているものを集めている。A5は後にBar Exposiciónと改題された曲。これとA3, B3, B4の2曲目以外はほぼ知られていない曲である。このアルバムだけメンバー名が記されていないが、前作と同じではないかと思う。

その後、センテナリオ四重奏団はエル・ビエホ・アルマセンなどのタンゲリーアに出演するようになった。そして1987年、民音タンゴシリーズ18で来日したホルヘ・ドラゴネ楽団と帯同する形でセンテナリオ四重奏団は来日する。その来日記念盤が来日前に発売された。

「タンゴ創世記／センテナリオ四重奏団」(ビクター VIP-28149)

A (1) El trillador (Alejandro Rolla) (2) La cara de la luna (Manuel Campoamor) (3) Gran Hotel Victoria (Feliciano Latasa) (4) El porteñito (Ángel Villoldo) (5) El choclo (Ángel Villoldo) (6) El apache argentino (Manuel Aroztegui) (7) Unión cívica (Domingo Santa Cruz) (8) Papas calientes (Eduardo Arolas)

B (1) Independencia (Alfredo Bevilacqua) (2) Rodríguez Peña (Vicente Greco) (3) El flete (Vicente Greco) (4) El chamuyo (Francisco Canaro) (5) Matasano (Francisco Canaro) (6) Canaro (José Martínez) (7) La biblioteca (Augusto Berto) (8) Don Esteban (Augusto Berto)

メンバーが少し替わり、エドゥアルド・デル・バージェ (ギター) をリーダーとして、ニコラス・パラシーノ (バンドネオン)、ミゲル・アンヘル・タボアダ (バイオリン)、フェルナンド・キロガ (フルート) となった。有名曲が多くなり、よりショウアップされた感じのスタイルで、日本の大きなステージでも古典タンゴの楽しさを十分伝えていたと思う。

その後、経緯はよくわからないが、バンドネオンのニコラス・パラシーノが同じスタイルのグループを率い、「クアルテート・ビエホ・ブエノスアイレス」としてアルバムを1枚残した。

M&M TK13126 “Tangos de la guardia vieja” Cuarteto Viejo Buenos Aires

- CD (1) El apache argentino (Manuel G. Aroztegui) (2) Hotel Victoria (F. Latasa) (3) Unión cívica (Domingo Santa Cruz) (4) El trillador (Alejandro Rolla) (5) El choclo (Ángel Villoldo) (6) El flete (Vicente Greco) (7) La cara de la luna (Manuel Campoamor) (8) Canaro (José Martínez) (9) Chiflale que va a venir (Á. Villoldo – C. Pesce) (10) La compadrada del cometa (José Rodas) (11) Matasano (Francisco Canaro) (12) Independencia (A. Bevilacqua)

メンバーはニコラス・パラシーノ (バンドネオン)、マウリシオ・スピドフスキー (バイオリン)、フェルナンド・キロガ (フルート)、マテオ・クレスピ (ギター) の4人で、この来日数年後に「ソロ・タンゴ」の番組用にスタジオ収録された映像があり、かつて日本でもミュージック・エアでも何度か放映された。

初代リーダーだったバンドネオンのエミリオ・ブランカは1990年に70歳で亡くなっているが、ブランカは1973年に同じ傾向の六重奏団でレコードを1枚製作しているので、参考として記しておく。

“La mala vida – Tangos de la guardia” Sexteto De La Guardia, director : Emilio Branca

- A (1) Hacele el rulo a la vieja (Ernesto Zóboli) (2) Anda bañate (Juan Carlos Basavilbaso) (3) La paloma (José Guardo) (4) Ahí nomás (Manuel Campoamor) (5) El pardo Cejas (Prudencio Aragón) (6) Echale bufach al catre (José Manuel Tagle)
- B (1) Queco (anónimo) (2) A la luz de los faroles (Rosendo Mendizábal) (3) Nido de amor (Samuel Castriota-Juan Andrés Caruso) (4) Colorao (Eduardo Arolas) (5) La budinera (Ángel Villoldo) (6) La C. de La L... (Manuel O. Campoamor)

A5, B5, 6以外はほとんど他に録音のない曲ばかりである (B6はオリジナル楽譜に従った表記になっているが、「月の顔」La cara de la lunaのことである)。メンバーはエミリオ・ブランカ (バンドネオン) の他、フアン・ディ・レージョ (バンドネオン)、アンドレス・サゲッセ (元フアン・カナロ楽団、ホアキン・ド・レジェス楽団)、エクトル・アコスタ (ギター、元アドルフォ・ペレス・ポチョーロ楽団)、ラファエル・ラベッキア (フルート)、オスバルド・バルダーロ (バイオリン、かのエルビーノ・バルダーロの甥) である。

筆者は87年の日本公演のほか、80年代末にエル・ビエホ・アルマセンでもセンテナリオの演奏を聴いた (エル・ビエホ・アルマセンはダンスの伴奏で、バイオリン抜きの「トリオ・センテナリオ」だった)。「よし次〇〇いこう、じゃあバンドネオンからだ」といった中庭で演奏しているような雰囲気を演出した、楽しいステージであった。エドゥアルド・デル・バージェは5年ほど前まではギターを教えたりしていたようだが、その後については不明である。ニコラス・パラシーノはダリエンソ系の楽団でたびたび来日していたが、2009年に亡くなっている。

(アーティストの足跡(4))



フランシスコ・ロムート

FRANCISCO ROMUO

おい、お前よ!! 昔はなんとよかったんだろうね…

QUÉ TIEMPOS AQUÉLLOS, HERMANO!!

LOS GRANDES DEL TANGO誌

著：OSCAR D.ZUCCHI
訳：弓田 綾子

モダンな演奏でいつもタンゴ界をリードしていたピアノ奏者、作曲家、指揮者、そしてSADAICの会長にもなったフランシスコ・ロムート（愛称パンチョ）の足跡を辿ってみよう。

フランシスコ・フアン・ロムートは、1893年11月24日、パルケ・デ・ロス・パトリシオス（Parque de los Patricios）の極めてブエノス的な地区で生まれた。母親からピアノの基礎を学んだ後、サンタ・チェチーリア音楽学校で腕を磨いた。だが、苦しい家計を助けるため、彼の音楽への熱き思いに反して、音楽教育を中断せざるをえなくなった。

13歳のときパシフィック鉄道（Ferrocarril Pacífico）の通信技手として働き出したが、ピアノの練習だけは欠かさず、いつも心の中で踊る単純なメロディーを、五線紙に書き写していた。

1906年、彼の最初のタンゴを発表した。曲名は奇妙な「El 606（エル 606）」というものであって、これはバスの路線番号を意味するものではなく、ましてトトカルチョ（キニエラ）の予想番号でもなく、梅毒、一般に「チンチェ（chinche）＝ナンキンムシ」と言われている性病の特効薬のことであった。そのためか世に発表されたのは大分年月が経ってからだった。

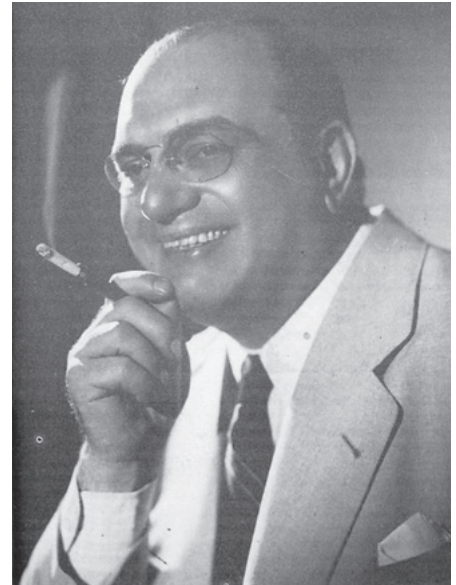
1908年に「パンチョ “Pancho”（Franciscoの愛称）」は、由緒ある「アベリーノ・カベサス（casa Avelino Cabezas）」や、翌年には、フロリダ（Florida）344の楽器店「レーモス（casa de música Lemos）」の店員になった。それらの店は今ではもうなくなっている。彼はいつも音楽の売り子としてショーウインドウの中で、新しく出版された曲を店のピアノで「試演」していた。

夜になると街灯に群がる虫のように、彼の奏でる魅惑的なピアノに音楽好きのブエノスっ子らが引き寄せられた。「Grandes tangos para piano（ピアノのためのタンゴの名曲）」やゆるやかなクリオージョのワルツ小曲、あるいは当時流行の二拍子の舞曲、ポルカなどが広く好まれた。その後彼は、アベニダ・デ・マージョ・イ・ペルー（Avda. De Mayo y Perú）の「タッジーニ（casa Taggini）」の店でも「試演者」として働いていた。

1910年、ピアノのソリストとなったが、すぐに以前の「試演者」となり、フロリダ通りの「カステイリオーネ（casa Castiglione）」の店員となった。

当時音楽の譜面は重要な商品価値があったため、作詞家や作曲家の権利が全く保護されないまま、非合法にそれら譜面が繰り返し出版され、販売されていた。

1915年、ロムートは作曲家としての名声を少しずつ広め出した。それらは皆タンゴの範疇の、ハバ



ネラを思わせる器楽曲で、彼の作曲家としての初期作品として、特徴付けるものだった。そして「El inquieto (落ち着きのない男)」「La rezongona (不平家の女)」を作曲し、フェレル - フィリポット (Ferrer-Filipotto) のティピカによってビクター・カムデン (北米) で録音した。

さらに同時期、フランシスコ・カナロの演奏でアトランタ・レコードで「Dardanelos (ダーダネルス海峡)」を録音した。

1916年、再びフェレル - フィリポットで「Río Bamba (リオ・バンバ)」「El chacotón (ひょうきん者)」をUSAビクター・カムデンで録音した。同年彼は、四重奏団を結成した。メンバーはバンドネオン、ペドリート・マフィア (Pedrito Maffia)、バイオリン、ライムンド・ペティージョ (Raimundo Petillo) とベルナルド・ヘルミーノ (Bernardo Germino)、ピアノは彼が担当した。ロムートがピアノのソリストに戻る1918年まで、このメンバーでカフェ・モンテレイ (café Monterrey) やアーティスティックなフェスティバル等に出演していた。

1918年、彼の作品はフランシスコ・カナロやロベルト・フィルポらに取り上げられ、ロムートの名を広く知られるようになった。「Sin dejar rastros (跡形もなく)」は即、カナロによってアトランタ・レーベルで録音した。

1920年、彼は「Quintaesencia (真髓)」「Flor del campo (野の花)」を作曲し、ロベルト・フィルポによって「Nacional (Odeón)」で録音した。そのお陰でロムートの名は不動のものとなり、まさしく騎士が叙任されるに等しかった。

1922年彼は、弟のエンリケとピアノとハーモニウム (リードオルガンの一種) のデュオを組んだりもした。ロムート25歳、エンリケは13歳だった。また、エクトル・ケサーダとのピアノデュオで、「ナショナル」レーベルによって、既出版の曲に彼自身の作品である2曲「Flor del campo (野の花)」と「Sin amor (愛なくして)」を加え、この4枚のレコードがロムートの初録音となった。1922年はロムートにとって重要な第一歩を印したのだ。彼は放送局L. O. X、ラジオ・クルトゥーラ、パレルモ放送局 (後にL. R. 10と呼ばれるようになった) やL. O. W. ラジオ・スーダメリカ、L. O. Z. ラジオ・ブルーサ等で、ピアノのソリストとして演奏活動をしていた。そしてロムートにとって大きな出来事があった。それは、駐フランス大使マルセロ・T・デ・アルベルがアルゼンチン共和国大統領に選出され、その凱旋帰国を祝うために、フランスで大成功したバンドネオン奏者で、あの「Una noche en el Garrón (ガロンの一晩)」を作曲したロムートの旧友マヌエル・ピサロに楽団の結成を依頼し、豪華な大西洋航海クルーズ船「Cap Polonio (カップ・ポロニオ)」号での華々しい航海演奏であった。メンバーは、マヌエル・ピサロとペドロ・ポリート (バンドネオン)、アヘシラオ・フェラサーノとミゲル・タンガ (バイオリン)、エチェベリー (ドラム)、ロムート (ピアノ) だった。また、別の公演旅行では、マヌエル・ピサロとペドロ・マフィア (バンドネオン)、アヘシラオ・フェラサーノとエステバン・ロバティ (バイオリン)、ロムート (ピアノ)、レオポルド・トンブソン (コントラバス) らとも演奏したが、時にはロムートはアルフォンソ・ラクエバと交代することもあった。



自宅できつろぐロムート

この航海は3回行い、その航海中に「La Tierra del Fuego (ラ・ティエラ・デル・フエゴ=南米南端部に位置する諸島)」を作曲し、彼の最初の楽団を結成した時に、この曲を「ナショナル」レコードで録音した。さらに、彼の不朽の名作の一つである「Nunca más (もう二度とは)」も作曲した。この曲は彼の手が病菌に感染した時、その手術を見事に成功させてくれた医師に捧げたのだ。内容は「もう二度とピアノは弾けない」との絶望的な気持ちを表現したのだった。後にオスカル・ロムートが歌詞をつけ、カルロス・ガルデルが、専属ギタリストのリカルドとバルビエリの伴奏で1924年に録音した。

ロムートは、自身の勉強のため、親友のフランシスコ・カナロの出演している「ロイヤル・ピガール」に出かけては、ピアノを弾かせてもらっていた。この事は良く音楽仲間が使うウンファルドで「安売り」と言われていたが、彼はそんな事は気にせず自身の研鑽のため続けたのだ。そして、1923年念願だった彼自身の楽団を結成した。そんな最中、父親が亡くなり、彼は家族の面倒を見なくてはならなかったが、幸い周囲の協力もあり、弟のエンリケ楽団をそっくり引き受け華々しくスタートしたのだ。エンリケはロムートより13歳も年下だったが、早くから指揮者として活動していた。

メンバーはアンヘル・ラモスとビセンテ・ロメオ (バンドネオン)、ロレンソ・オリバリ (クラシック畑出身) とエステバン・ロバティ (バイオリン)、アンヘル・コルレット (コントラバス)、弟のエンリケがピアノを担当し、ロムートは指揮に専念した。

後になって、あの“Chiqué”を作曲したバンドネオン奏者の、リカルド・ルイス・ブリニョーロが加わり、更にペドロ・ポリートが戻ってきた。ポリートはロメオと交代で演奏し、コントラバスにはコルレットに代わりビセンテ・ムタレーリが入り、ヌシフォール兄弟の一人がドラムに加わった。

ロムートの楽団は「エンパイア劇場」で、カシミール・アイン (バスク人) とルイスのタンゴバイレのための演奏活動をしたりして、彼の名声を大きく広めた。

1924年、彼の楽団は「ナショナル (オデオン)」レコードで、バンドネオン奏者ポリートの「Mal paso (悪い歩み)」、ロムートの「La Tierra del Fuego (ラ・ティエラ・デル・フエゴ)」など初回録音を含め、一連の録音を開始した。これらの録音のためにロムートはさらなるメンバーを募った。例えば、バイオリンが、後にジャズマンとして活躍したエドゥアルド・アルマーニ、バンドネオンにミノット、そしてピアノはロムート、アルベルト・カステジャーノスら錚々たる人たちが加わり、華々しく活躍をし、大きくその榮譽ある地位を不動のものとした。

同年、“パンチョ”ロムート楽団は、当時名を博していたマックス・グリュックスマン社系列



En un festival auspiciado por “Legión Extranjera” en el Salón Casablanca, una nutrida concurrencia da marco a las imágenes del maestro Lomuto y los animadores del mismo: Enrique Rando, Iván Caseros y Carlos Glnés (de izq. a der.). En primer plano, en el ángulo izquierdo, el destacado y sempiterno primer violín, Leopoldo Schiffrin, tío del hoy popular Lalo Schiffrin.



La orquesta de Don “Pancho”, de “punta en blanco” y con más músicos que de costumbre en un espectáculo al aire libre.

の映画館にも出演した。それらは「グラン・スプレンドイ (Gran Splendid)」、「プチ・スプレンドイ (Petit Splendid)」、「エトワール (Etoile)」、「ビジャ・クレスポのリボリ (Rívoli de Villa Crespo)」、「エレクトリック (Electric)」、「プラサ (Plaza)」、「セレクト・スイパッチャ (Select Suipacha)」等であった。当時は無声映画の時代で、フィルムを上映している間、三つのオルケスタで、「ティピカ (タンゴ)、ジャズ、クラシック」のジャンルの演奏をするが、時には一つのオルケスタでこのジャンルを演奏することもあった。

1925年頃からロムートは、映画館での演奏と並行しながら、カフェや劇場でもその活動を広げた。

夏季には上流階級の保養地マル・デル・プラタのクラブで演奏し、多くの観衆の喝采を浴び、大成功を収めた。何故なら、ロムートは常にその時代の社会的な関連性を見極めながら、自身のオルケスタの演奏スタイルを適合させていたのだ。そして、ロムートはアベニーダ・アルベアル・イ・タグレの上流階層が通うサロン「バラのパビリオン (El Pabellón de las rosas)」で、ティピカとジャズの二つのオルケスタを指揮し、夜の華やかなステージを飾った。この時期にはジャズが急速に広まりタンゴ楽団もサキソフォンやトランペット、クラリネットのミュージシャンを加えジャズも演奏していた。

実際、1925年に「ディスコ・ナショナル社」がティピカとジャズ楽団を分け、シミー (米国のラグタイム・ダンス) のコンクールでロムートは「ジャズ・バンド」として、その手腕を競った。そしてロムートは作曲家としても大いに名声を博した。「Rosas Rojas (紅いバラ)」を、アンドレス・セイトゥン (Andrés Seitún) の作詞で発表し、ガルデルがリカルドとバルビエリの伴奏で歌い「ナショナル・オデオン」で録音した。

1926年、ロムート楽団にバンドネオン奏者のダニエル・エクトル・アルバレスを加えシネ「プチ・スプレンドイ」で華々しく演奏し活動した。アルバレスは弱冠16歳だった。彼は痩せっぽちのため「Sardina (イワシ)」とあだ名を付けられ、皆から可愛がられていた。そしてロムートの右腕となり、自身のオルケスタを編成する1933年まで一緒に活動していた。

1929年、ロムートは自身の作曲した曲に初めて歌詞を付けた。「Cachadora (からかい好きの女)」でロムートが「パンチョ・ラグーナ (Pancho Laguna)」というペンネームで作詞したものだ。この曲をガルデルがパリで1929年、リカルド、バルビエリ及びアギラルの伴奏で録音した。さらに2か月後ブエノスでも、再度録音した。

1930年になるとLR 4 ラジオ・スプレンドイとLS 5 ラジオ・リバダビアでランチェーラ (民謡)「En la tranquera (A Mar del Plata yo me quiero ir) 柵の中で (マル・デル・プラタに行きたい)」を演奏しロムート楽団のそのモダンな風格ある演奏に大きな反響があり、まさに誰もが認めるタンゴ界の重鎮となった。やがてナショナル・オデオン・レーベルに所属してから6年後の1931年にビクターに移った8月6日、ランチェーラ「De pura cepa (生粋の)」と、タンゴ「Nunca más (もう二度とは)」の2曲から録音シリーズをスタートした。2曲ともフェルナンド・ディーアスとアルベルト・イラリ



El maestro Lomuto es reportado frente a los micrófonos de Radio El Mundo, en el programa "Tomando café con Avilés"; este último, popular comentarista, pianista y compositor, entre muchos éxitos, de la zamba "Los ojazos de mi negra".

オン・アクーニャのデュオが歌った。

1931年から1932年にかけてロムートは、LR 4 ラジオ・スプレندي、LRAラジオ・ナシオナル、LS 5 エクセルシオーレで演奏し、10月にはサルミエントの「サロン・アウグステオ (Salón Augusto)」でダンス・ミュージックにも精力的に演奏し、ロムートはタンゴもダンス音楽と捉えてリズムに重点を置いていた。1932年には、ボカ・ジュニオールス・クラブのサッカー・チームの選手達の壮行会を行った。このチームがモンテビデオに行き、モンテビデオのチーム、ナシオナルと対決するため、「ラ・クンパルシータ」を演奏



En mil novecientos treinta y dos, Francisco Lomuto presentó a su genial orquesta en el Teatro SMART... ¡Un lujo!

して送った。ロムートは夏季にはクラブ・マル・デル・プラタでの興業を繰り返し、彼の「オルケスタ・ティピカ・シンフォニカ (Orquesta Típica Sinfónica)」で、グアルディア・ビエハから現代のタンゴまで幅広く演奏し、夏の夜を華やかに飾った。また、ファン・P・フスト将軍の大統領時代はオリボス (Olivos) の大統領官邸で開催のダンス・パーティーでは、エドゥアルド・アルマーニのジャズバンドと共に演奏し喝采を浴びた。

1932年9月、ロムートは「テアトロ・スマート (teatro Smart)」で上映されたミュージカルコメディ「La vuelta de miss París (ミス・パリの帰還)」の劇中音楽の作曲担当者となった。脚本はアントニオ・ボッタとアルベルト・バジェリーニ、初演は同月29日、提供は「デアレッシ・カミーニャ・カプラン・セラノ (Dealessi-Camiña-Caplan-Serrano)」興業社であった。劇中、女優のイリス・マルガは、ロムートのタンゴ「Papanata (お人よし)」を初演した。同じく歌手のフェルナンド・デューアスもロムートのペンネーム「パンチョ・ラゲーナ」で作詞した「Aunque parezca mentira (ウソみたいだけど)」や、これも1932年のことだが、同じスマートの劇場でアントニオ・ボッタの別のミュージカルコメディ「La gran milanese nacional (アルゼンチンの偉大なミラノ女)」等をロムート楽団で歌い人気を博した。それと並行してロムート楽団は、セリート・イ・トゥクマンの「テアトロ・コロン (teatro Colón)」でのコンクール「La Fiesta del Tango (タンゴフィエスタ)」に、ペドロ・マフィア、エドゥガルド・ドナート、その他のオルケスタと、演奏、進行役で出演して好評を博した。

1932年11月1日、「デアレッシ・カミーニャ・カプラン・セラノ」社と共にモンテビデオに行き、ブエノスアイレスで成功したミュージカル「ミス・パリの帰還」を「テアトロ・ソリース (teatro Solís)」で初演し、再び大成功を収めた。

1933年にはスマートの舞台に戻り、同じ興業社でアントニオ・ボッタの新しいミュージカルコメディ「Descanso dominical (主の休息)」を上演し、その中で彼の有名な「Canción del Deporte (スポーツの歌)」と、大きな反響を呼んだロムート作曲ボッタ作詞のタンゴ「Si soy así (俺はこんな男さ)」を一般に公開した。数々の活動後、新たに「テアトロ・ブロードウェイ (teatro Broadway)」と有利な条件で契約をしてカルナバルのバイレを開催した。そこでは彼の指揮のもと、25人のミュージシャンによる大オルケスタで演奏した。そして8月には「ファン・サルシオーネ (Juan Sarcione)」社の興業でロムートは芸術監督となり、「音楽演劇大楽団 (Gran Conjunto de Música Teatralizada)」と

いう名で活躍し、エスメラルダ469の「シネ・テアトロ・モヌメンタル (cine teatro Monumental)」では「Su majestad el Tango (タンゴ陛下)」という曲目でショーを盛り上げ、まさに彼にとって紛れもない黄金期であった。

1935年ロムートは、退団したフェルナンド・ディアスの代わりの男性歌手を探すためオーディションを開催し、ホルヘ・オマールを迎えた。オマールはブロードキャスティングス社 (Cía. de Broadcastings) でデビューし、ラジオやクラブで歌い聴衆の心を惹きつけた素晴らしい歌手だった。



Quando en 1943 se desvinculaban los cantores Fernando Díaz y Jorge Omar, se organizó un concurso de cantores para cubrir sus plazas, siendo los cuatro semifinalistas seleccionados, de izq. a der.: Alberto Santillán, Carlos Galarco, Walter Cabral y Alberto Rivera.

1936年になり、ロムートのオルケスタは、フリオ・デ・カロ、リカルド・タントゥーリ、オスバルド・フレセド、ファン・カナロ、エドゥガルド・ドナート、及び彼らのオルケスタと共に一つの巨大な楽団を編成し、それらの指揮者が交代で指揮するという、異常とも言えるイベントを、フィエスタ・シェル・メックスで開催し、それをLR-1ラジオ・エル・ムンドのセレクション番組として20時から21時の時間帯に放送していた。ロムートは1937年頃までラジオに関わっていたが、その後国内北部各州へ巡演活動に入った。フワイ、ラ・リオハ、サン・ファン、トゥクマン、サンティアゴ・デル・エステーロ、最後にはパラグアイ領まで巡演した。ブエノスに戻るや再びラジオ・エル・ムンドでバルダーロ作曲、オスカル・アローナ作詞のタンゴ「Miedo (恐れ)」や、民族舞曲「Para Vigo me voy (ビーゴに行く = ビーゴとはスペイン北西部のポルトガル国境に近い都市)」、この曲をホルヘ・オマールとバンドネオンのルイス・シンケスがデュオで歌っているのが特色。そしてロムート作曲の「No cantes ese tango (そのタンゴを歌うな)」などを演奏した。ロムートにとってこの時期はラジオや映画にと華々しく活動した。そう、1937年はロムートの映画への初出演があった。ソノ・フィルム (Sono Film) スタジオで撮影されたアルゼンチン映画「Melgarejo (牧草地)」への出演で、監督はモリア・バース、キャストは、天才的な喜劇役者フロレンシオ・パラビチーニを筆頭に、メチャ・オルティス、ブランカ・デル・プラード、サンティアゴ・ゴメス・コウ他で、とてもモヌメンタルでその年の5月9日に公開された。映画のテーマ曲はホルヘ・オマールが歌っている。ロムートはこの年に作曲家サイラ・カニコバと結婚した。

ロムートの活躍は華々しく1938年8月にはブエノスアイレス市内のシネ・セレクト (cine Select) で、ショー「La Historia del Tango (タンゴの歴史)」を公演したり、映画やラジオへの出演と大活躍だった。同年9月6日公開された「Muchachas que estudian (学ぶ女子)」の中で、女優で歌手のカルメン・デル・モラルはロムートのタンゴ「Como las aves (鳥のように)」「Tango amigo (友なるタンゴ)」を初演した。2曲ともマヌエル・ロメロの作詞で、ロムートのオルケスタの伴奏で、ビクターで録音した。しかし、ロムートは、彼のビクター7のレコードアルバムでは、これらの歌詞で最初の曲はマリア・テレサ・グレコが歌い、後の曲はロムート楽団に戻っていたフェルナンド・ディアスの歌で録音、登録した。また、ゴリードの作詞、ロムートの作曲「Mala suerte (不運)」はいつの時代にも演奏され続け未だ人気を博している。

1942年、歌手のホルヘ・オマール、フェルナンド・ディアスと共にモンテビデオを再訪し、2月14

～22日にテアトロ・ソリスのカルナバルで演奏するや直ぐにブエノスに戻り、イボ・ペライとアントニオ・ボッタのコメディ「Mujeres peligrosas (危険な婦人たち)」を演奏した。その後ロムートの夫人、F. カナロ、モーレスらと第12回国際作家会議に出席のためワシントンに行った。帰国後暫くは国内で活動していたが、1947年4月6日スペインに向かった。メンバーを全面的に若返りさせた彼のオルケスタに、ボリビアのチャランゴ奏者タラテーニョ・ローハスとダンスカップル一組を加え、歌手はアルベルト・リベラ、時には特別参加の女性歌手チョーラ・ルナらで、スペイン各地を巡演し人気を博した。その成功で弟のビクトルが住むフランスにも行った。ヨーロッパから帰国すると、ロムートはオルケスタを解散して新たに再編成することに専念した。

1950年10月27日、ビクターのレコード60-2054が録音され、曲はタンゴで、モンテーロの歌「Tarde (遅きに)」とリベラの歌「Alma en pena (苦悩する魂)」で、これがロムートのレコード製作の最後の仕事となった。何故なら誰もが予期しないことが起きたのだ。

それは、1950年12月23日、プロビンシア・デ・ブエノスアイレスのトルトゥギータ市の別荘で、昼食を楽しもうと準備していたロムートは突然倒れ急死したのだ。

彼の通夜には、H. ラサーノ、A. トロイロ、リト・パジャルド、E. P. マロニ、R. フィルポ、C. カステイージョら錚々たるメンバーが惜別の礼を捧げた。57歳という余りにも早すぎた偉大なるマエストロ、ロムートの死を悼む声は、さらに各界に広がった。

タンゴ界に君臨したロムートだったが時の流れと共にその存在が薄れかけた頃、ドン「パンチョ」ロムートの経歴を知る重要な人物、マエストロ、マルティン・ダーレが、静かにロムートの思い出を語った。“最初私は、彼が並みはずれた人物なだけで、運命がその特異性に栄冠を与えたようなものと言ったが、彼が亡くなると、もう一つデータが加わった。あの太った、人の良い、にこやかな、皆に尊敬され、成功に寵愛された男が、突然この世から去ると、さほど日も経っていないのに忘れられてしまったのだ。ロムートと私は20年来の付き合いだった。彼が私に望んでいたのは、私が彼の思い出と、これらの哀悼の言葉を書くことだったのだろう。これらの言葉がロムートにとって待ち望んでいたのだ。私は友人の一人として彼に尊敬の気持ちをここに表したい”と…。

本誌の出版の意図もまさにそのことであって、ロムートが不当に忘却のかなたに追いやられることから、わずかでも救うことが出来ればと願い、謙虚に私どもの敬意を捧げたい。

ロムートの演奏は伝統的に、ある時には進歩的だったりと非常に特異的な面があった。彼自身の個性に溢れた演奏スタイルは、多くの聴衆の心に大きな感動を与えた。それがグラン・マエストロ、フランシスコ・ロムートなのだ。



“魅せられてるままに” La Cumparsita

島崎 長次郎

日本人の“タンゴ好き”は自他共に認めるところであるが、それに加え、もうひとついえるものがある。“日本人は無類のラ・クンパルシータ好き”ということだ。それはなぜか。振り返ってみると、この曲のみを集めたいわゆる全集ものは、LP以降とはいえ、わが国で今までに発売されたLPや、そしてCDの数は、なんと10種を遥かに超えるからだ。これは驚きだ。本場のアルゼンチンはもとより、ヨーロッパやアメリカなど、他のどこを見回しても決して見られない現象といえる。

この大傑作に寄せるわが国のファンの熱い思いに改めて目を見張ると同時に、その中の一人である自分に、しみじみとした満足感を覚える。

……私がこの名作にはじめて出会ったのは、荒廃した終戦間もない昭和23年の中学生のころだった。劣悪な音質のラジオから流れてくるタンゴの中に、妙に胸に残る曲があった。演奏者に記憶はないが、それが「ラ・クンパルシータ」だとわかった。やがて母の実家の戦死した叔父がそれらしい洋楽？を持っていたという話を耳にして訪ねて行ったところ、浪花節や流行歌に混じって2枚の「ラ・クンパルシータ」が出てきた。それはザ・カステリアンズと、もうひとつはテイト・ニュー・タンゴ・アンサンブルというもの。お願いしてともかく繰り返し繰り返しこれらを聴き、すっかりこの名作の虜となってしまった。淡々としたスタートから息づきうねる深い哀愁の旋律に、例えようもない親近感を覚え、もはやそこから逃れることはできなくなってしまったからだ。これがその後の私のタンゴ人生のいわば原点となり、あわせて「ラ・クンパルシータ」収集の出发点になった。



それから50有余年経った2003年10月、この度の念願の「全集」でお世話になったオーディオパークでのコンサートに招かれ、初めてそれまでに収集したSPによる「ラ・クンパルシータ特集」のコンサートを開いた。これをきっかけに2005年の春には、金沢蓄音器館で3時間30分をかけ、合計32枚のSPを名器の誉れ高い“クレデンザ”で聴いてもらった。さらに引き続いて、その年の6月と翌年の春には神田神保町のレコード社の主催により、三省堂の自遊時間で戦前と戦後の2回の「ラ・クンパルシータ特集」を、やはり“クレデンザ”で楽しんでもらったが、

これらは、いずれも超満員の盛況だったのはうれしい限りで、この名作の威力を実感させられ、同時

に、日本人の無類の“ラ・クンパルシータ好き”を再認識した。

2013年の秋のこと、某レコード会社のある役員の方から“ジャズの「セントルイス・ブルース」が生誕100年を迎えるので、できたら「ラ・クンパルシータ」も合わせて記念盤で出したい。については自分のSPコレクションからベスト盤をセレクトして見てほしい”との要請があった。そこで早速あれこれと60枚ほどを引っ張り出し、さらに吟味して50枚に絞り込み、翌2014年の2月にリストをつくりあげたところ、会社側から“残念ながら、経営上の問題があって計画は断念せざるを得なくなった。申し訳ない”旨の連絡があった。そこで当アカデミーの飯塚会長とも相談の上、これをなんとかしてリリースしようということで検討の結果、前述したように、2003年に私が最初に「ラ・クンパルシータ特集」のコンサートを開いたスタジオ、オーディオパークに制作をお願いすることになった。代表の寺田繁氏は、かつての名機YS-11の制御機器類の開発設計に関わった方で、ジャズの研究者でも知られる一方、トラディショナル・ジャズに関する独自の復刻CDをすでに100種近くをリリースし、ヨーロッパではその復刻技術は定評を得ている。タンゴに関しては、数年前に当アカデミーの福川靖彦理事が「ファン・ダリエソ名演の時代」(11枚組)をここから世に送っているのはご存知のとおりで、ほかにも「小松亮太とタンギスツ」、「心をうたう／グロリア米山」、「小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテス」などの制作実績を持っている。



考えてみるとオーディオパークとは不思議な縁と思う。実は、この全集の制作を最初に呼びかけてこられたのは、2003年のコンサートの際の寺田さんだったからだ。今度の「全集」につけたブックレット（解説書）の最後に氏の「復刻盤CD化に当たって」の一言が述べられている。復刻に当たっての苦労はいろいろあったが…と述べた後、“多くの方々の協力によって「ラ・クンパルシータ全集」の完成を見るに至ったことは欣快この上もないことで、かねてこの作品の〈生誕100年記念〉に焦点をあてて企画をされてきた島崎長次郎氏の夢の実現の一助になったことを共に喜び合いたいと思います”と結んでおられる。

さらにありがたいのは、当日本タンゴ・アカデミーのために少しでもお役に立てればと、財政上のいろいろなご配慮をいただいたことだ。唯々感謝のほかはない。巡りめぐって最後に力を貸して下さったオーディオパークの寺田繁さんに、改めて衷心から厚くお礼を申し上げたいと思う。

CD「ラ・クンパルシータ全集」

全曲リスト

CDの発売を間近にして全50曲の演奏楽団・歌手・録音年を紹介します。

本号巻頭言で飯塚会長も取り上げておられる通り、既に各方面で話題となり関心は高まっております。従来発売された同種の企画との違いの一つは時代性、即ちこの曲が作られて100年という節目であること。もう一つは地域カバーの広さ、それはアルゼンチンを始めとする欧州・米国そして日本の音源が採用されていることです。もう一つ言えば、初演レコードの幾つかを含む50年以上に亘る言わば「ラ・クンパルシータ」の歴史そのものが収録されていることです。

そして諸経費を差し引いた収益のすべては日本タンゴ・アカデミーの運営のために寄付されます。

膨大なコレクションを提供してこの企画をプロデュースされた島崎名誉会長および録音技術面・財政面で多大のご配慮を賜ったオーディオパークの寺田繁代表に深い敬意を捧げるものです。

(大澤 寛)

「ラ・クンパルシータ全集」

《CD. 1》 アルゼンチン編

◆ [1916年～1929年 録音]

	使用音源 No.	録音年
01 ロベルト・フィルボ楽団 Orquesta Roberto Firpo	Odeon. 483	G : 1916
02 アロンソ=ミノット楽団 Orquesta Típica Alonso = Minotto	Victor. 69579	G : 1917
03 マフィア=ラウレンス (バンドネオン2重奏) Maffia = Laurenz	Victor. 79690	G : 1926
04 カルロス・ガルデル<歌> Carlos Gardel	Odeon. 8892	G : 1928
05 ロベルト・ディアス<歌> Roberto Díaz	Victor. 79702	G : 1926
06 イリアルテ=ペソア (ギター2重奏) Iriarte = Pesoa	日Colombia. J2758	G : 1928
07 カジェタノ・プグリッシ楽団 Cayetano Puglisi y su Orquesta Típica	Victor. 47076	G : 1929

◆ [1931年～1946年 録音]

08 フリオ・デ・カロ楽団 Orquesta Típica Julio De Caro	Brunswick. 6*	G : 1931
09 オルケスタ・ティピカ・ロス・プロピンシァノス Orquesta Típica Los Provincianos	Victor. 47621	G : 1931

- | | | | |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------|----------|
| 10 | フランシスコ・カナロ楽団
Francisco Canaro y su Orquesta Típica (Serie Sinfónica) | Odeon. 4262 | G : 1933 |
| 11 | エドガルド・ドナート楽団
Edgardo Donato y sus Muchachos | Victor. 37757 | G : 1935 |
| 12 | フランシスコ・ロムート楽団
Francisco Lomuto y su Orquesta Típica | Victor. 38008 | G : 1936 |
| 13 | ロベルト・フィルポ 4重奏団
Roberto Firpo y su Cuarteto | Odeon. 3508 | G : 1938 |
| 14 | ロドルフォ・ビアジ楽団
Rodolfo Biagi y su Orquesta Típica | Odeon. 5634 | G : 1942 |
| 15 | オスバルド・フレセド楽団
Osvaldo Fresedo y su Gran Orquesta Argentina | Victor. 68-0600 | G : 1943 |
| 16 | アルフレド・デ・アンジェリス楽団 / <レシタード=吟唱>ロディ
Alfredo De Ángelis y su Orquesta Típica <recitado por Néstor Rodi> | Odeon. 3775 | G : 1944 |
| 17 | アンヘル・ダゴスティーノ楽団 / A. バルガス<歌>
Ángel D'Agostino y su Orquesta Típica <estribillo cantado por Ángel Vargas> | Victor. 60-1538 | G : 1945 |
| 18 | フランチェーニ=ポンティエル楽団 / A. ポデスター<歌>
E.Francini = A.Pontier y su Orq.Típ <estribillo cantado por Alberto Podestá> | Victor. 60-1155 | G : 1946 |

◆ [1950年～1965年 録音]

- | | | | |
|----|----------------------------------------------------------------------|-----------------|----------|
| 19 | エンリケ・ロドリゲス楽団
Enrique Rodríguez y su Orquesta Típica | 日Angel OH-9045 | G : 1953 |
| 20 | トロイロ=グレラ 4重奏団
Cuarteto Troilo = Grela | tK. SF30007 | G : 1955 |
| 21 | ニコラス・ダレッサンドロ 6重奏団
Nicolás D'Alessandro y su Sexteto Típico | Victor. 60-2379 | G : 1954 |
| 22 | ロベルト・カロー楽団
Roberto Caló Orquesta Típica | Orfeo. 3002 | G : 1950 |
| 23 | エドムンド・リベロ<歌>
Edmundo Rivero con Víctor Buchino Orq. | Victor. 63-0019 | G : 1950 |
| 24 | フリオ・ソーサ<レシタード=吟唱>
Julio Sosa con Leopoldo Federico y su Orq. Típ. | Columbia. 70381 | G : 1961 |
| 25 | エクトル・バレラ楽団
Héctor Varela y su Orquesta Típica | Columbia. 15087 | G : 1954 |

《CD. 2》 アルゼンチン編

◆ [1950年～1965年 録音] (続き)

- | | | | |
|----|---------------------------------------------------------------------------|-----------------|----------|
| 01 | アストル・ピアソラ楽団
Ástor Piazzolla y su Orquesta Típica Violín solo H.Baralis | tK. 5036 | G : 1951 |
| 02 | アニバル・トロイロ楽団
Aníbal Troilo "Pichuco" y su Orquesta | tK. 5054 | G : 1951 |
| 03 | フアン・ダリエンソ楽団
Juan D'Arienzo y su Orquesta Típica | Victor. 68-0185 | G : 1951 |

- | | | | |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------|----------|
| 04 | カルロス・デイ・サルリ楽団
Carlos Di Sarli y su Orquesta Típica | Victor. 1A-0459 | G : 1955 |
| 05 | オスバルド・プグリエーセ楽団／A. コルドバ／J. マシエル
Osvaldo Pugliese y su Orquesta Típica (en vivo) | 第1回来日公演ライブ | G : 1965 |

欧米～日本・編 () =録音国

◆ [1927年～1960年 録音]

- | | | | |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|----------|
| 06 | フリアン・ウァルテ楽団 (米)
Julián Huarte and his Orchestra Típica | 日Parlophone. E5125 | G : 1929 |
| 07 | エバ・ボール楽団 (米)
Eva Bohr y su Orquesta Criolla Argentina | Columbia. 2576 | G : 1927 |
| 08 | マレク・ウエーバー楽団 (米)
Mareck Weber and his Orchestra | 日Columbia. M-644 | G : 1942 |
| 09 | ザビエル・クガート楽団／D. ショアー<歌> (米)
Xavier Cugat and his Orchestra Vocal refrain : Dinah Shore | Victor. 27603 | G : 1939 |
| 10 | ハリー・ロイ楽団 (英)
Harry Roy and his Orchestra | 日Columbia. JX-211 | G : 1938 |
| 11 | ザ・カスティリアンズ (米)
The Castilians | 日Columbia. M-20 | G : 1934 |
| 12 | ティト・スキーパー<歌> (亜)
Tito Schipa with Orchestra | 日Victor. JE-92 | G : 1930 |
| 13 | ビアンコ＝バチーチャ楽団 (仏)
Orchestre Argentin Bianco = Bachicha | Odeon. 165242 | G : 1928 |
| 14 | オラシオ・ペトロッシ楽団 (伊)
Horacio Pettorossi | Columbia. DO3756 | G : 1931 |
| 15 | エドゥアルド・ビアンコ楽団 (独)
Orquesta Típica Argentina "Eduardo Bianco" | 日Telefunken. 43101* | G : 1939 |
| 16 | オスカル・ローマ楽団 (仏)
Oscar Roma and his Argentin Orchestra | 日Crystal. 1025 | G : 1934 |
| 17 | 巴里ムーラン・ルージュ楽員 (日) | Regal. 67270 | G : 1933 |
| 18 | 奥田 良三<歌> (日) | Polydor. 2397 | G : 1936 |
| 19 | ティト・ニュー・タンゴ・アンサンブル (日) | Teichiku. 15127 | G : 1935 |
| 20 | 櫻井 潔とその楽団／柴田陸陸<歌> (日) | Victor. A4087 | G : 1940 |
| 21 | 淡谷のり子<歌> (日) | Columbia. 30471 | G : 1939 |
| 22 | 黒木 曜子<歌> (日) | Columbia. JL-6 | G : 1952 |
| 23 | 原 孝太郎と東京六重奏団 (日) | Columbia. A-329 | G : 1947 |
| 24 | 藤沢 嵐子<歌>=オルケスタ・ティピカ東京 (日) | 東芝JPO-1038 | G : 1959 |
| 25 | 早川 真平と日本オールスター・タンゴ・オーケストラ (日) | Columbia. SL1029 | G : 1960 |

◇註 ① () 内 米=アメリカ (北米)、英=イギリス、亜=アルゼンチン、仏=フランス、伊=イタリア、
独=ドイツ、日=日本

② * = 12吋 (30cm) 盤 ③ 録音年 G : =一部推定を含む

2016年上期首都圏タンゴ・コンサート情報

作成：脇田 富水彦

● First TANGO in RUI

田邊義博 (bn)、田辺和弘 (cb)、金益研二 (pf)、石井有子 (vn)、中村憲二 (pc)
1月16日 ゲストサロンRUI

● 今宵はタンゴと共に

Sayaca (vo)、鈴木崇朗 (bn)、青木菜穂子 (pf)、田中伸司 (cb)
1月19日 クリスティー東京リンコン

● セステート・メリディオナル

パブロ・エスティガリビア (pf) 率いるセステート初来日
1月21日 神奈川県民ホール、1月22日 相模女子大学グリーンホール、
2月19日、2月20日 中野サンプラザホール、

● タンゴ・ルネサンス

パブロ・エスティガリビア (pf)、マルコ・アントニオ・フェルナンデス (bn)、
サンティアゴ・ポリメニ (bn)、セサル・ラゴ (vn)、ラミーゴ・ミランダ (vn)、
ニコラス・サカリアス (cb)、エステバン・リエラ (vo)、カルラ&ガスパル (ダンス)、
ラウル&フリアン (ダンス)、カミラ&エセキエル (ダンス)
1月21日 神奈川県民ホール、2月19日、2月20日 中野サンプラザホール他

● TANGO TRIO

大柴拓 (gt)、鈴木崇朗 (bn)、高杉健人 (cb)
1月27日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● Tango de Plata

Cuarteto Especial para Año Nuevo
加藤真由美 (pf)、館野ヤンネ (vn)、田中伸司 (cb)、Sayaca (vo)
1月28日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● 会田桃子

会田桃子 (vn)、鈴木崇朗 (bn)、三枝伸太郎 (pf)、高杉健人 (cb)
2月2日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● 小松亮太

小松亮太 (bn)、KaZZma (vo)
2月8日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● ハッピー・タンゴ・アワー!

須川展也 (sx)、小松亮太 (bn)、奥村愛 (vn)、田中伸司 (cb)、松永裕平 (pf)
2月11日 福生市民会館大ホール

● 池田みさ子とオルケスタ・オルテンシア

池田みさ子 (pf)、川波幸恵 (bn)、海上亜佑巳 (bn)、鈴木慶子 (vn)、瀬尾鮎子 (vn)、
佐藤梓 (cb)
2月12日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **PIANO solo LIVE**

松永裕平 (pf)

2月20日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **小松真知子とタンゴクリスタル 時代を超えて輝くタンゴ**小松真知子 (pf)、早川純 (bn)、吉田篤 (vn)、田中伸司 (cb)、KaZZma (vo)、小島りち子 (vo)

2月21日、2月28日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **The Duo**

Carel Kraayenhof (bn)、Juan Pablo Dobai (pf)

2月23日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **ASTRORICO & KaZZma**門奈紀生 (bn)、麻場利華 (vn)、平花舞依 (pf)、滝本恵利 (cb)、KaZZma (vo)

3月3日 雑司ヶ谷エル・チョクロ、3月5日 横浜市関内ホール小ホール

● **春のタンゴ・コンサート**

古橋ユキ タンゴ四重奏団

古橋ユキ (vn)、深町優衣 (pf)、池田達則 (bn)、山本茂生 (cb)

3月5日 広尾シェ・モルチェ

● **LAST TANGO**

柴田奈穂 (vn)、田ノ岡三郎 (ac)、江森孝之 (gt)、西村直樹 (cb)、マヤン (vo)、

スペシャルゲスト 宮沢由美 (pf)

3月6日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **古橋ユキ 春のタンゴスペシャル**古橋ユキ (vn)、深町優衣 (pf)、池田達則 (bn)、山本茂生 (cb)

3月11日 アート・カフェ・フレンズ

● **小松亮太 タンゴの歌feat. アメリータ・バルター&レオナルド・グラナダドス**

小松亮太 (bn)、アメリータ・バルター (vo)、レオナルド・グラナダドス (vo)、

タンゴ・オーケスタ・エスペリアル

3月12日 東京オペラシテイ

● **古典タンゴXピアノ連弾**

加藤真由美 (pf)、松永裕平 (pf)

3月13日、5月14日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **Los Reflejos Del Alma Vol.14**青木葉穂子 (pf)、北村聡 (bn)、Savaca (vo)、田中伸司 (cb)、鬼怒無月 (gt)

3月18日 神楽坂The Glee

● **TANGO X 400% Cuatrocientos**

会田桃子 (vn)、北村聡 (bn)、林正樹 (pf)、西嶋徹 (cb)

3月24日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **アルゼンチンタンゴの夕べ**

Estrellas de PAMPA

中西伸一 (bn)、瀬尾鮎子 (vn)、松永裕平 (pf)、小栗亮太 (cb)

3月25日 両国 毛糸玉のある家

● **第39回タンゴの家ライブ**

オルケスタYOKOHAMA：齋藤一臣 (vn)、専光秀紀 (vn)、石川麻衣子 (vn)、
池田達則 (bn)、古野奈己 (bn/fl)、小川真人 (bn)、飯泉昌宏 (gt)、斉藤直樹 (cb)、
齋藤晶 (pf)、藤田翔 (vo)
3月27日 タンゴの家 (三田塾ホール)

● **QUARTET**

北村聡 (bn)、鈴木広志 (sx)、伊藤志宏 (pf)、大柴拓 (gt)
3月27日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **Loop タンゴライブ**

池田みさ子 (pf)、鈴木崇朗 (bn)、吉田篤 (vn)
3月28日、5月23日 狛江Loop

● **須藤信一郎&鈴木崇朗**

須藤信一郎 (pf)、鈴木崇朗 (bn)
3月31日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **Sin Fronteras**

カルロス・エル・テーロ・ブスキーニ (gt)、アナ・カリーナ・ロッシ (vo)、
オリヴィエ・マヌーリ (bn)
4月2日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **QUIZAS TANGO quarteto**

池田達則 (bn)、瀬尾鮎子 (vn)、深町優衣 (pf)、大熊慧 (cb)
4月3日 中目黒 楽屋

● **Ville Hiltula**

ヴィッレ・ヒルトゥーラ (bn)、青木菜穂子 (pf)、館野ヤンネ (vn)、田中伸司 (cb)
4月5日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **アルゼンチンタンゴライブ**

北村聡 (bn)、加藤真由美 (pf)、小島りち子 (vo)
4月5日 Hot pepper

● **Tangueros Articos**

Ville Hiltula (bn)、館野ヤンネ (vn)、中山育美 (pf)、長谷川順子 (cb)
4月14日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **アルゼンチンタンゴライブ**

北村聡 (bn)、加藤真由美 (pf)、小島りち子 (vo)
4月14日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **Concierto de TANGO ARGENTINA**

川波幸恵 (bn)、Sacco香織 (pf)、KaZZma (vo)
4月15日 伊勢佐木町クロストリート

● **VIENTO SUR**

田中伸司 (cb)、*Savaca* (vo)、青木菜穂子 (pf)
4月16日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **池田みさ子とオルケスタ・オルテンシア**

池田みさ子 (pf)、川波幸恵 (bn)、海上亜佑巳 (bn)、鈴木慶子 (vn)、瀬尾鮎子 (vn)、
佐藤梓 (cb)
4月17日 SinRumbo

● TANGO

大柴拓 (gt)、鈴木崇朗 (bn)、KaZZma (vo)

4月20日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● Tango Session vol.3 en EL CHOCLLO

鈴木崇朗 (bn)、Sacco香織 (pf)、東谷健司 (cb)、専光秀紀 (vn)

4月21日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● 西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ

エストレージャス・デ・パンパ：中西伸一 (bn)、鈴木崇朗 (bn)、瀬尾鮎子 (vn)、

吉田篤貴 (vn)、松永裕平 (pf)、小栗亮太 (cb)、兵頭カンナ (vo)

チコス・デ・パンパ：北村聡 (bn)、永野亜希 (vn)、宮沢由美 (pf)、佐藤洋嗣 (cb)、

金子なつみ (vo)

オルケスタ・ティピカ・パンパ：西塔祐三 (bn)、中西伸一 (bn)、北村聡 (bn)、早川純 (bn)、

鈴木崇朗 (bn)、川波幸恵 (bn)、永野亜希 (vn)、江藤有希 (vn)、瀬尾鮎子 (vn)、

吉田篤貴 (vn)、柴田奈穂 (vn)、宮沢由美 (pf)、田辺和弘 (cb)、あみ (vo)、KaZZma (vo)、

佐藤久美子 (CM)

4月22日 すみだトリフォニー小ホール

● 三枝伸太郎トリオwith Sayaca

三枝伸太郎 (pf)、沖増菜摘 (vn)、島津由美 (vc)、Sayaca (vo)

4月23日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● 松永裕平トリオ

松永裕平 (pf)、北村聡 (bn)、田中伸司 (cb)

4月24日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● タンゴへの誘い〜ブエノスアイレスの香り〜

古橋ユキ タンゴ・トリオ 古橋ユキ (vn)、鈴木崇朗 (bn)、竹本真理 (pf)

4月24日 赤坂区民センター

● TANGO DUO LIVE

KaZZma (vo)、田辺和弘 (cb)、助川太郎 (gt)、田中庸介 (gt)

4月30日 横浜エアジン

● 春の芸術祭2016

オルケスタYOKOHAMA：齋藤一臣 (vn)、専光秀紀 (vn)、石川麻衣子 (vn)、

池田達則 (bn)、古野奈己 (bn/fl)、小川真人 (bn)、飯泉昌宏 (gt)、齊藤直樹 (cb)、

齋藤晶 (pf)、藤田翔 (vo) ゲスト：池田みさ子 (pf)、島崎長次郎 (トーク)、

Araki & Mayumi (ダンス)、AKITO & aia

5月5日 横浜市開港記念会館

● TANGO ESQUINA

大河内祐 (bn)、山下真愉美 (pf)、石井有子 (vn)、吉川雅子 (vo)、吉田水子 (cb)

5月6日 六本木KNOB

● Tango de Plata

加藤真由美 (pf)、館野ヤンネ (vn)、田中伸司 (cb)、Sayaca (vo)

5月8日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● 古橋ユキ タンゴ四重奏団 魅惑のタンゴバイオリン

古橋ユキ (vn)、鈴木崇朗 (bn)、竹本真理 (pf)、齋藤直樹 (cb)

5月18日 神楽坂The Glee

● **鈴木崇朗クアルテートwith KaZZma**

鈴木崇朗 (bn)、吉田篤 (vn)、三枝伸太郎 (pf)、田辺和弘 (cb)、KaZZma (vo)
5月26日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **アルゼンチン・タンゴ・コンサート**

チコス・デ・パンパ：北村聡 (bn)、永野亜希 (vn)、宮沢由美 (pf)、佐藤洋嗣 (cb)
菅原洋一 (vo)、山口蘭子 (vo)
5月27日 練馬区文化センター小ホール

● **Tea and Tango**

川波幸恵 (bn)、Sacco香織 (pf)、KaZZma (vo)
5月28日 (公社)日本外国特派員協会

● **北村聡バンドネオン コンサート**

北村聡 (bn)
5月29日 市川市木内ギャラリー

● **Trio CELESTE with Sayaca**

青木菜穂子 (pf)、北村聡 (bn)、田中伸司 (cb)、Sayaca (vo)
6月4日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **鬼怒無月キンテート**

鬼怒無月 (gt)、北村聡 (bn)、近藤久美子 (vn)、熊田洋 (pf)、西嶋徹 (cb)
6月10日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **丸野綾子solo piano**

丸野綾子 (pf)
6月12日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **セレナータの魔法**

峰万里恵 (vo)、三村秀次郎 (gt/vn)、高場将美 (gt/vn)
6月13日 渋谷アップリンク・ファクトリー

● **ABIERTO**

須藤信一郎 (pf)、智詠 (gt/vn)、早川純 (bn)、熊本比呂志 (pc)
6月16日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **PUERTANGO ~タンゴの扉~**

柴田奈穂 (vn)、矢田麻子 (pf)、東谷健司 (cb)、ゲスト：ロベルト杉浦 (vo)
6月17日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **TANGO COLORIDO**

ユリ・アスセナ (vo)、吉田篤 (vn)、青木菜穂子 (pf)
6月24日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

● **EL TANGO VIVO**

熊田洋 (pf)、東谷健司 (cb)
6月26日 雑司ヶ谷エル・チョクロ

原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、会員からの寄稿をお待ちしております。ご執筆の内容によって「タンゲアンド・エン・ハボン」または「タンゴランディア」のどちらかに掲載いたします。「タンゲアンド・エン・ハボン」の次号の締め切りは11月末日、「タンゴランディア」は9月15日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。また、原稿の内容によっては掲載できないことがあることをご承知置き下さい。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ・アカデミーを代表するものではありません。なお人名のカナ表記については執筆者の表記のままを原則としますが、例えば Juan を「ファン」と表記されたものについては、表記の流儀の問題ではないと考え、編集部の方で「ファン」と改訂いたします。

編集後記

高温多湿の毎日です。皆様如何お過ごしでしょうか？

先ず明るいことから。1) 島崎長次郎さんの「ラ・クンパルシータ全集」が完成しました。皆様奮ってお求め・ご宣伝下さい。2) 待望のNTAホームページのリニューアル・オープンです。ご苦勞頂いている山本幸洋さんの報告記事をご覧ください。悲しいのは訃報が相次いだことです。亡くなられた方々のご冥福をお祈りすると共に、心のこもった追悼文をお寄せ頂いた泉谷隆男さん、山本幸洋さん、西村秀人さんそして吉村俊司さんに深謝いたします。 (大澤 寛)

日本タンゴ・アカデミー機関誌 **TANGUEANDO EN JAPÓN**

第38号 2016年7月発行 (非売品)

発行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-32-14-104

飯塚 久夫方

TEL/FAX 03-3324-1989 iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：大澤 寛 (編集長)

〒165-0051 東京都新宿区西早稲田2-1-23-609

TEL 03-3208-2247 hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

副編集長：池永 博威、笠井 正史、鈴木 啓子

編集委員：島崎 長次郎、宮本 政樹、弓田 綾子

印刷：(株) 藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-13-1

TEL 03-3262-8641 FAX 03-3262-8643 E-mail: fujip@fuji-p.co.jp

דה